

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

令和2年度業務の実績に関する外部評価報告書

国立国語研究所 外部評価委員会

令和3年8月5日

はじめに

令和2年度の外部評価書をお届けします。令和3年度は第3期中期計画の最終年度にあたり、外部評価委員の方々には第3期の国語研の研究についての評価だけでなく、第3期の成果を踏まえて、第4期に向けての提言もいただきました。深く感謝いたします。

令和2年度でも、コロナ感染症の発生・拡大に伴って、国語研も大きな影響を受けました。テレワーク、オンラインを最大限に活用し、ワークショップ、シンポジウム等はそれほど支障なく行うことができましたが、危機言語・危機方言のフィールドワークに関しては、その大部分を中断せざるを得ませんでした。現在、一部はオンラインによる調査の方法等を模索していますが、さまざまな問題があり、対面調査と同じようにはいかず、手探りの状態です。外部評価委員の皆様には、コロナ感染症パンデミック終息後の国語研の在り方についてのご質問や貴重なアドバイスなどをいただき、感謝しています。

いよいよ、令和4年度から、第4期が始まります。第4期の計画の策定に際しては外部評価委員の皆様方からいただいた貴重なアドバイスを踏まえて、計画案を練り直し、令和4年4月からの第4期に備えて、準備作業の最終段階に入っています。令和5年4月からは総研大博士課程への参加が始まるため、現在そのためのカリキュラムの策定等の準備も行っています。

第4期においても国語研のより一層の発展のために努力を重ねていきたいと存じます。ますますのご指導ご鞭撻をお願いいたします。

令和3年8月

国立国語研究所長 田窪 行則

目 次

評価結果報告書	1
1. 令和2年度「機関拠点型基幹研究プロジェクト評価・センターの研究活動」に関する評価結果	3
2. 令和2年度「管理業務」に関する評価結果	86
資料	92
1. 国立国語研究所外部評価委員名簿	93
2. 国立国語研究所令和2年度業務の実績に関する評価の実施について	94
3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト一覧	95
4. 国立国語研究所外部評価委員会規程	96
5. 国立国語研究所外部評価委員会【令和2年度実績評価】（第1回）議事次第	98

1. 評価結果報告書

令和2年度の国立国語研究所の外部評価を次のように実施しました。

令和3年8月5日 国立国語研究所外部評価委員会【令和2年度実績評価】(第1回)

その結果を以下の通り報告します。

外部評価委員会
委員長 坂原 茂

国立国語研究所令和2年度外部評価にあたって

本報告書は、機関拠点型基幹研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」の令和2年度分実績についての外部評価委員会の評価のまとめである。評価対象は、(1) プロジェクト全体、(2) 6つの共同研究プロジェクト（「対照言語学」、「統語・意味解析コーパス」、「消滅危機言語・方言」、「通時コーパス」、「大規模日常会話コーパス」、「学習者コミュニケーション」）、(3) 2つのセンター（コーパス開発センター、研究情報発信センター）、(4) 「管理業務」である。

令和2年度のプロジェクト全体に対する評価は「順調に進捗している」であり、(1) 研究成果・研究水準、(2) 研究体制、(3) 教育・人材育成、(4) 社会連携・社会貢献、(5) 国際連携・国際発信のいずれにおいても高い評価に値する。6つの共同研究プロジェクトの評価は、S（計画を大きく上回って実施している）が1、A（計画を上回って実施している）が3、B（計画どおりに実施している）が2であり、全体的に充実した研究が行われている。2つのセンターの評価はいずれもB（計画どおりに実施している）で、センターの多方面の活動とデータベース構築の成果が見られた。管理業務については、A（計画を上回って実施）が3、B（計画通り実施）が1で、全体的にきわめて良好な業務運営が行われている。

以上のように、外部評価委員会は、令和2年度の本プロジェクトの進捗状況は全体的に計画をやや上回り、順調に伸展していると評価した。今年度も、昨年度に続き、新型コロナウイルス感染拡大のため研究活動に予期せぬ制約が課されたが、さまざまな工夫を凝らして研究活動を進め、電子情報通信学会NLC研究会優秀発表賞を始めとして複数の賞を受賞するなど、高い水準の研究活動を行ったことは賞賛に値する。また、管理業務に関しても、効率化が順調に進行しているのが窺えた。

本プロジェクトは、先進的なケース・スタディ、種々のコーパス開発、人材育成を含む、日本語研究を大きく変える可能性をもった研究プロジェクトで、日本および世界中で現在進行中の日本語研究の中でも、疑いもなく、最重要の研究プロジェクトである。外部評価委員会としては、プロジェクトに携わる各人がそのことを意識しつつ、最終年度も高い研究水準を維持し、プロジェクトの完遂に励むことを強く希望する。

令和3年8月
外部評価委員会
委員長 坂原 茂

機関拠点型基幹研究プロジェクト評価報告書

評価に関する総括

《達成状況の評価》

順調に進捗している

(判断理由等)

コロナ蔓延の困難な状況が続く中、(1) 研究成果・研究水準、(2) 研究体制、(3) 教育・人材育成、(4) 社会連携・社会貢献、(5) 国際連携・国際発信、のいずれにおいても計画通り順調に進んでいるばかりでなく、電子情報通信学会 NLC 研究会優秀発表賞を始めとして複数の賞を受賞するなど高い評価を得ることができた。

【プロジェクト全体の連携活動に関する評価】

(1) 研究成果・研究水準について

令和2年度の研究成果・研究水準は質的・量的にもきわめて高い水準を維持している。

新型コロナウイルス感染拡大のため、予定通りの調査活動はできなかったが、量的に満足できる研究活動を展開し、オンラインでの国際シンポジウム・ワークショップ6件、国内シンポジウム・ワークショップ50件を開催し、6冊の英語による書籍を含む15冊の書籍・報告書を刊行し、各種言語資源・コーパスを整備し、言語資源32点を公開した。

研究水準もきわめて高く、「国際ワークショップ「日本語における移動動詞の文法化」」のような学会をリードする最先端の研究、「日本学特別講義 意味論入門」のように入門的要素も含むもの、32点のコーパス・データベースを公開など、国立国語研究所の研究に相応しいバランスの良い研究活動になっており、現時点での最先端の研究成果であるとともに、将来的にも大きな期待がもてる。

(2) 研究体制について

研究体制は、研究推進のための合理的でバランスの取れた構成になっており、他大学との組織的な連携、大学機能強化への貢献に関しても高い評価が与えられる。

研究体制は6つの基幹プロジェクト（「対照言語学」、「統語・意味解析コーパス」、「消滅危機言語・方言」「通時コーパス」、「日常会話コーパス」、「学習者のコミュニケーション」）を中核として国内外の626人の研究者を共同研究員として組織されている。

各班の研究の進捗状況を管理するために共同研究プロジェクト推進会議、自己点検・評価委員会を設置し、研究情報の共有化、班同士の連携、合同シンポジウムの企画、プロジェクト全体の自己点検・評価を行っている。

研究の共同利用・共同研究拠点の強化の取り組みとしては、これまでの公募型共同研究に加え、研究所が保有する言語資源等の研究資料や実験機器等を活用する公募型プロジェクト「共同利用型」を新たに導入し、17件のプロジェクトを採択した。また、随時申請可能な「共同利用型共同研究（登録型）」や有償コーパスを無償で活用できる「共同利用型共同研究（言語資源型）」を令和2年度に新たに設け、共同利用拠点としての機能の強化を図った。

プロジェクト間の連携強化に関しては、全基幹プロジェクト参加のNINJALシンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」を開催し、令和3年度にはその成果をとりまとめた書籍の刊行を予定している。またコーパス開発センターによる支援体制の元で各班が開発する言語資源の有効な活用を進

めるため定期的に「領域横断コーパス会議」を開催し、同センターが管理する検索アプリケーション「中納言」を通して各班が構築したコーパスの一部を公開し、プロジェクト内外の言語資源に関する成果を発表し交流を深める場として「言語資源活用ワークショップ2020」を開催した。

大学との連携体制としては、神戸大学大学院人文学研究科や東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所との学术交流協定に基づき研究会等を開催したほか、弘前大学人文社会科部との学术交流協定に基づき津軽方言の有対動詞データの収集・分析等に関する共同研究を推進し、成果をデータベース「使役交替言語地図」に格納して公開した。

(3) 教育・人材育成について

教育・人材育成については、大学との連携、教材開発、若手研究者の育成や社会人の学び直しなどに多大な貢献をしており、高い評価が与えられる。

大学院教育では、一橋大学で3人が授業を行い、博士学位論文審査の主査2件、副査2件を担当した。東京外国語大学においても2人が授業を担当し、コーパス講習会を開催した。「危機言語」班は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所との協定に基づき、特任助教の雇用、若手研究者のフィールドワークに対するスキル向上を支援し、また九州大学言語学講座とは「九大下地ゼミ×青井隼人 学術スキルWS」をオンラインで開催した。

教材及び教育プログラムの開発に関して、「危機言語」班と「統語コーパス」班が顕著な活動を行った。「危機言語」班は、令和元年度に刊行した『地域文化の可能性』をもとに出版準備を進め、また令和元年度に刊行した『フィールドワーク事前研修報告書』をもとに『フィールド言語学の手引き』の出版準備を進め、いずれも2021年度に出版予定である。「統語コーパス」班は、『Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective』(ひつじ書房)を刊行し、国語研究所のコーパスを活用して本教材の練習問題を解くためのインターフェースを神戸大学と連携して開発し、ウェブサイトで公開した。

若手研究者の育成も活発に行った。若手研究者のキャリアパスとして特任助教を5人雇用了。若手研究者の育成のために、国内外の博士学位取得者をプロジェクト研究員(PDフェロー)として5人、非常勤研究員として64人雇用し、専門的研究指導を行なった。令和2年度に退職した21人のうち19人が大学や研究機関や民間企業等の常勤・非常勤として就職し、またプロジェクト非常勤研究員1名が学会の賞(言語処理学会第27回年次大会優秀賞)を受賞した。高度な専門性を有する若手研究者の育成のために、各班の研究テーマに即した若手研究者向けのチュートリアル・講習会を16回開催するなど、さまざまな活動を行った。

社会人の学び直しへの貢献では、日本語教師等を対象とする「NINJAL日本語教師セミナー」を国内外で1回ずつ、日本語教育ボランティアに対するスキルアップ講座を国内で1回開催し、また中学校・高等学校の国語科教員及び教職課程の学生・院生向けに、『日本語歴史コーパス』活用のための講習会を開催した。

(4) 社会連携・社会貢献について

社会連携・社会貢献については、一般向けの多数のシンポジウム・講演会の開催、地方自治体と連携した方言復興のための講座の開催や創作方言劇の制作・上演、最先端の言語研究成果を社会に還元するためのモバイル型展示ユニットの展示、産学連携研究として、リクルート社Megagon Labs.との共同研究の推進など、積極的な活動を行った。

一般向けフォーラム・イベントで特記すべきは、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オープンハウスやニホンゴ探検をオンラインに切り替えて開催し、45件の動画コンテンツを公開したとこ

ろ、約2万件の参加（アクセス）があり、従来の対面式に比較して50倍以上の参加数となったことである。

地方自治体との連携では、鹿児島県沖永良部島和泊町、知名町との協定に基づき、方言復興のための知名町公民館講座を毎月1回オンラインで開催したほか、創作方言劇『ヒーヌムの生まれた海』を知名町と共同で制作し、おきえらぶ文化ホール・あしびの郷・ちなで上演するなど多方面の活動をした。また琉球朝日放送株式会社と共同で制作した「くとうぼどう宝～消滅危機言語を守る人～」が第26回プログレス賞奨励賞（テレビ朝日系列24社の番組審議会委員が選考する賞）を受賞し、当研究所のこの面での活動に社会的認知が与えられた。

展示を通じた研究成果の公開に関しては、令和3年3月からの民博特別展「復興を支える地域の文化—3.11から10年」に「災害と方言」のテーマで参加し、3台のモバイル型展示ユニットを展示し、静岡英和学院大学や東京都八丈島でも別の展示を行った。また周防大島町、周防大島町教育委員会主催の「周防大島とハワイ～移民たちの足跡～」に共催として協力した。

産学連携に関しては、リクルート社 Megagon Labs. などのIT企業との共同研究を推進し、Megagon Labs. より日本語版 spaCy Parser version 2.3.0 及び GiNZA Parser 4.0 をリリースした。またワークスアプリケーションズ社との研究成果を商業利用可能なオープンソースとして公開した結果、学界と産業界の連携体制や成果の有用性・公益性が評価され、電子情報通信学会 NLC 研究会優秀発表賞を受賞した。『日本語歴史コーパス』の開発では、(株)小学館出版局との間で新たに連携協定を締結し、産学連携のもとでコーパスの構築・整備を推進した。

(5) 国際連携・国際発信について

国際連携・国際発信に関しても、高いレベルで研究活動が行われており、高評価に値する。

海外機関所属の研究者101人を共同研究員として、別に海外の研究者1人を外来研究員として受け入れ、共同研究を推進した。

今年度は1件の国際学術交流協定を更新し、新たに1件の国際学術交流協定を締結した。16件の国際連携協定を活用して「オックスフォード NINJAL 上代日本語コーパス」のアップデートや北京日本学術センターとの日本語習得過程調査の分析など、国際共同研究体制を強化した。

オンラインでの6件の国際シンポジウム等を開催した。特に、ソウル大学と国際ワークショップを開催したほか、日本語実用言語学国際会議を誘致し開催するなど、海外の機関と連携して企画・開催することにより、国際的な拠点性を強化した。

共同研究の成果の国内外への発信のために、Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics など5冊を、Mouton 社や MIT Press など定評のある出版社から国際出版した。ハワイ大学とは、危機言語の叢書の刊行について Brill 社との出版協定の準備を進めた。

日本語研究のさらなる国際化のために、海外の若手日本語研究者を対象とする NINJAL 日本語学講習会を4回、NINJAL チュートリアルを1回2コースをオンラインで開催し、合計442人（昨年度比187%）が受講した。

(6) その他特記事項

特になし。

【今後の活動に向けた意見】

新型コロナ感染拡大の中でも、研究、コーパス・データベース作成・公開、教育・人材育成、社会連携・社会貢献、国際連携・国際発信のいずれに関しても高い水準の活動が行われており、次年度以

降もこのレベルを維持した研究継続が期待できる。効率よく機能している現在の研究体制を維持しつつ、積極的な研究活動が継続されることを強く望みたい。

各プロジェクト・センターの評価

対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法

プロジェクトリーダー：窪菌 晴夫

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

日本語の研究は日本国内に長い伝統と優れた成果を有している一方で、他の言語と相対化させる努力が十分ではなく、(i)世界諸言語の中で日本語がどのような言語であるのか、(ii)一般言語学・言語類型論の視点から見ると、日本語の分析にどのような知見が得られるのか、(iii)日本語の研究が世界諸言語の研究や一般言語学・言語類型論にどのように貢献するのか、いまだ十分に明らかにされたとは言えない。現代の日本語研究に求められているのは、日本語の研究が世界諸言語の研究、とりわけ一般言語学や言語類型論研究にどのように貢献できるのかという「内から外を見る」視点と、一般言語学や言語類型論研究が日本語の分析にどのような知見をもたらすかという「外から内を見る」視点である。

本プロジェクトは、この両視点から日本語の言語事実を分析することにより、日本語（諸方言を含む）を世界の諸言語と対照させて日本語の特質を明らかにし、それにより日本語研究の国際化を図ることを主たる目的とする。日本語の音声・音韻、語彙・形態、文法、意味の構造を、言語獲得（第一言語獲得、第二言語習得）はもとより、言語に関係する他の学問分野（心理学、認知科学他）との接点・連携をも視野に入れて、対照言語学・言語類型論の観点から分析することにより、諸言語間に見られる類似性（普遍性）と相違点（個別性・多様性）を明らかにする。このような対照研究を通じて得られた研究成果を国内外に向けて発信する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトは音声・音韻特徴を分析する音声研究班と、形態・文法・意味構造を分析する文法研究班の2つの研究班（サブプロジェクト）を組織する。音声研究班は「語のプロソディーと文のプロソディー」を主テーマに、文法研究班は「名詞修飾表現」「とりたて表現」「動詞の意味構造」の3つをテーマに研究を進める。ともに海外の研究者との国際共同研究と国際シンポジウムの開催・誘致を軸に、論文集（英文、和文）の刊行や、アジアを中心とする諸言語の構造の異同を可視化する言語地図（電子媒体）の刊行を目指す。

2. 年次計画（ロードマップ）

● 全体計画・研究組織

音声研究班と文法研究班は研究成果発表会や研究文献リスト作成などの日常的な活動をそれぞれ独自に行う一方で、「対照言語学の観点から日本語の特質を解明する」という共通の目標に沿って国際シンポジウムを定期的で開催し、その成果を英文論文集などの成果刊行物として公刊する。また、日本語や言語類型論に関する国際会議を合同で誘致し、プロジェクト全体で日本語研究と国語研の国際化を推し進める。

対照言語学	H28 年度	H29 年度	H30 年度	R 元年度	R2 年度	R3 年度
シンポジウム等	オノマトペ 国際シンポジウム, NINJAL フォーラム 「オノマト ペ」開催	「プロソ ディー」に関 する国際ワー クショップ開 催	「プロソ ディー」「移動動 詞」「動詞の意味 構造」に関する 国際シンポジウ ム開催	「プロソ ディー」に関 する国際ワー クショップ開 催, 国際認知 言語学会共催	NINJAL チュートリアル 開催	国際会議 JK 2021 の開催
刊行・出版		NINJAL フォーラムの 成果の刊行, 音声関係の啓 蒙書刊行	論文集の編集 作業, 「プロソ ディー」に関す る研究論文集刊 行	「名詞修飾」 「とりたて表 現」に関する 各研究論文集 刊行	英文論文集 の編集作業, 「移動表現」 に関する研究 論文集刊行	「日本語と 言語類型論」 「動詞の意味 構造」「移動動 詞」に関する 各研究論文集 の刊行
データ		言語地図の作成				公開

・研究組織

リーダー:

窪菌晴夫

班リーダー:

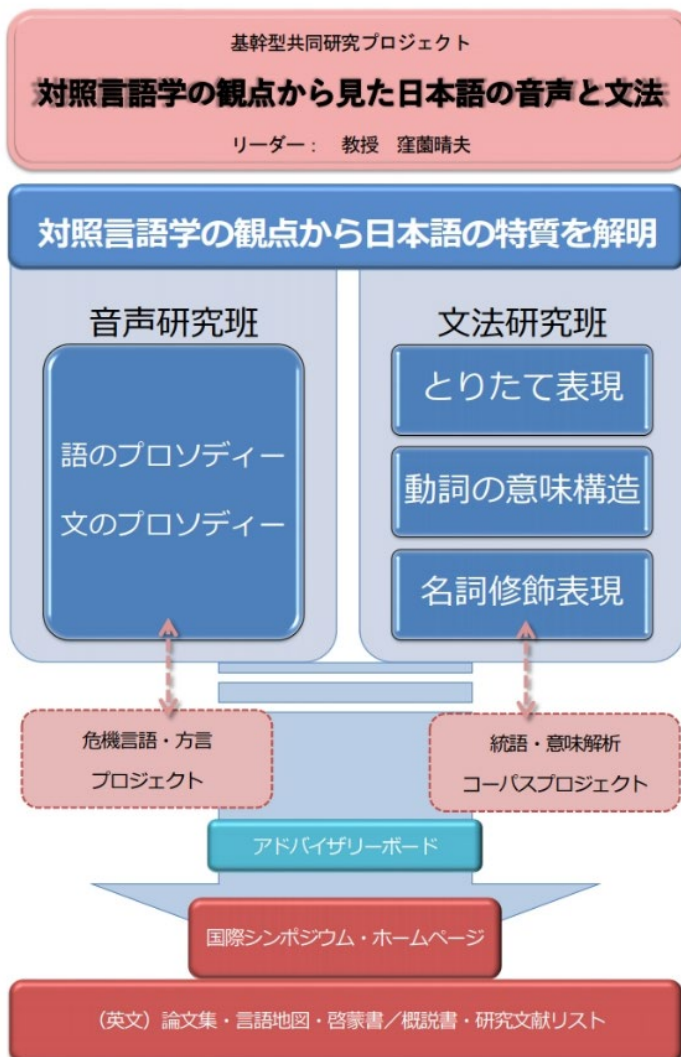
窪菌晴夫 (音声)

野田尚史 (とりたて表現)

松本曜 (動詞の意味構造)

プラシャント・パルデシ

および窪田悠介 (名詞修飾表現)



● 年次計画

平成 28 年度（研究プロジェクトの始動）

1. 日英語によるプロジェクト HP を開設し、以後、随時更新する。
2. 若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。また日本学術振興会外国人特別研究員 (PD) 2 名に対して研究指導を行う。
3. 国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードを設置し、プロジェクトの運営や成果発信について随時アドバイスを求める。
4. 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
5. NINJAL 国際シンポジウムとして The 24th Japanese Korean Linguistics Conference (JK 24) (10 月 14~16 日) とオノマトペ国際シンポジウム (12 月 17~18 日) の 2 つを開催する。またその成果の取りまとめ (論文集の編集) に着手する。
6. オノマトペをテーマに一般社会向けの NINJAL フォーラムを開催する (1 月 21 日)。
7. 第二期中期計画期間に着手した『日本語版連濁事典』, Mouton Handbook (Japanese Contrastive Linguistics の巻), The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants, Tonal Change and Neutralization の編集作業を完了する。
8. 言語地図の立案を開始する (項目・言語の選択, 刊行方法等)。
9. 大学院生向けのチュートリアル (国内) を開催する。
10. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

平成 29 年度（研究プロジェクトの展開）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。また日本学術振興会特別研究員 (PD) 1 名に対して研究指導を行う。
2. 研究班ごとに研究成果発表会を年数回開催する。
3. 「プロソディー」と「名詞修飾」をテーマにそれぞれ国際シンポジウムを開催する。
4. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。
5. Mouton Handbook (Japanese Contrastive Linguistics および Syntax の巻), Tonal Change and Neutralization の編集作業を完了する。
6. 前年度に開催した NINJAL 国際シンポジウム 2 件と NINJAL フォーラム 1 件の成果を取りまとめ、それぞれ論文集、啓蒙書として編集を行う。
7. 『移動表現の類型論 II (仮題)』の編集作業を行う。
8. 音声関係の啓蒙書を執筆する (1 冊目)。
9. 言語地図の作成を開始する。

平成 30 年度（研究成果の中間とりまとめ）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。
2. 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会 (Prosody and Grammar Festa 3) を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。
4. 音声 (プロソディー) と文法 (移動動詞, 動詞の意味構造) に関する国際シンポジウム・ワークショップをそれぞれ開催する。

5. 前年度に開催した「プロソディー」に関する国際ワークショップの論文の編集を行い、出版社に入稿する（公刊は1年後）。また「とりたて表現（和文）」「移動表現（和文）」「名詞修飾（和文）」に関する各論文集の編集作業を進める（公刊は1年後の予定）。

6. 引き続き言語地図の作成用のデータ収集を行う。

7. 大学院生向けのチュートリアルを国内と海外でそれぞれ開催する。

令和元年度（研究プロジェクトの拡充）

1. 若手研究者をプロジェクトPDフェローとして合計2名雇用し、研究指導を行う。

2. 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。

3. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会（Prosody and Grammar Festa 4）を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

4. 「プロソディー」に関する国際シンポジウムを開催する。また、国際認知言語学会を共催する。

5. 前年度に開催した「移動動詞」に関する国際シンポジウムの成果を研究論文集（英文）として取りまとめる（公刊は1～2年後）。また「動詞の意味構造（和文）」に関する論文集の編集に着手する。

6. 「とりたて表現（和文）」「名詞修飾（和文）」に関する各研究論文集を刊行する。

7. 引き続き言語地図の作成を行う。

令和2年度（研究成果のとりまとめ）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクトPDフェローとして合計2名雇用し、研究指導を行う。

2. 研究班、研究テーマごとに成果取りまとめのための研究発表会と打合せ会議を年数回開催する。

3. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会（Prosody and Grammar Festa 5）を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

4. 「名詞修飾（和文）」と「移動表現（和文）」「移動表現（英文）」「日本語と言語類型論（和文）」に関する研究論文集をそれぞれ刊行する。「移動動詞（英文）」「動詞の意味構造（和文）」「プロソディー（英文）」に関する各論文集を編集する。

5. 大学院生向けのチュートリアルを開催する。

6. 言語地図の取りまとめを行う。

令和3年度（研究成果の公刊）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクトPDフェローとして合計2名雇用し、研究指導を行う。

2. 成果取りまとめのための研究発表会と打合せ会議を年数回開催する。

3. 「移動動詞（英文）」「動詞の意味構造（和文）」「プロソディー（英文）」の各論文集を刊行する。

4. 言語地図を公刊（公開）する。

【3年目までの成果物】〔編者〕

1. Sequential Voicing in Japanese Compounds (John Benjamins) 2016年6月〔バンス〕

2. 『日本語コーパス活用入門：NINJAL-LWP実践ガイド』（大修館）2016年7月〔パルデン〕

3. The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants (Oxford University Press) 2017年4月〔窪菌〕

4. 『日本語を分析するレッスン』（大修館書店）2017年4月〔野田〕。

5. 『オノマトペの謎』（岩波書店）2017年5月〔窪菌〕

6. 『通じない日本語』（平凡社新書）2017年12月〔窪菌〕

7. Handbook of Japanese Syntax (De Gruyter Mouton) 2017年12月〔野田〕

8. Japanese Korean Linguistics 24 (CSLI) 2018年1月〔船越〕

9. Handbook of Japanese Contrastive Linguistics (De Gruyter Mouton) 2018年2月〔パルデシ〕
10. Tonal Change and Neutralization (De Gruyter Mouton) 2018年3月〔窪菌〕
11. The Linguistic Review 36巻1号, 特集 Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean, 2019年2月〔窪菌〕

【5年目までの成果物】上記に加え次のものを刊行する（9番以降は6年目の刊行予定）。

1. 『よくわかる言語学』（ミネルヴァ書房）2019年〔窪菌〕
2. 『日本語と世界の言語のとりたて表現』（くろしお出版）2019年〔野田〕
3. 『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』（ひつじ書房）2020年〔パルデシ〕
4. Broader Perspectives on Motion Event Descriptions (John Benjamins) 2020年〔松本〕
5. Type-Logical Syntax (MIT Press) 2020年〔窪田〕
6. 『移動表現の類型論と第2言語習得』（くろしお出版）2021年3月〔松本〕
7. 『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』（開拓社）2021年〔窪菌他〕
8. 『一般言語学から見た日本語のプロソディー』（くろしお出版）2021年〔窪菌〕
9. 『日本語の歴史的対照文法』（和泉書院）2021年度〔野田〕
10. 『動詞の意味と百科事典的知識（仮題）』（開拓社）2021年〔松本〕
11. Motion Event Descriptions from a Cross-Linguistic Perspective Vol. 1 (De Gruyter Mouton) 2022年〔松本〕
12. Prosody and Prosodic Interfaces (Oxford University Press) 2021年度〔窪菌〕
13. Word and Sentence Prosody: The Endangered Dialect of Koshikijima Japanese (De Gruyter Mouton). 2022年〔窪菌〕
14. 『プロソディー研究の最前線（仮題）』（開拓社）2022年〔窪菌〕

II. 令和2年度活動概要

令和2年度予算総額 26,045千円

令和2年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

対照言語学研究を推進するために、国内研究者5人を共同研究員として追加し、国内外あわせて157人の組織で事業を遂行した。コロナ禍にあつて対面形式のイベントは実施できない状況となったが、オンラインを活用して例年以上の活動を行った。具体的には4つの研究班ごとの公開研究発表会を計23回（国内学会でのワークショップ1回を含む）、4班合同の発表会(Prosody and Grammar Festa 5)を1回、国際シンポジウム・ワークショップを2件開催した。これら26件の企画において計53件の研究発表が行われ（うち学生が筆頭発表者のもの8件）、計1676人（延べ）の参加者が得られた（うち海外機関研究者112人、大学院生を含む学生381人）。

共同研究の成果を取りまとめる執筆・編集活動に注力した結果、プロジェクト全体で図書10冊、論文99編（ブックチャプター60編含む）、学術発表・講演85件（一般向け除く）を公開・刊行した。このうちプロジェクトの所内メンバー（教員5名）が下記6冊の図書（研究書2冊、研究論文集4冊）および論文23編を刊行し、さらに7冊の研究書・研究論文集の編集・執筆を行った。

- ・『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』（パルデシ プラシヤント、堀江薫 共編、ひつじ書房）2020年5月

- Type-Logical Syntax (Yusuke Kubota and Robert D. Levine 共著, MIT Press) 2020年9月
- Broader Perspectives on Motion Event Descriptions (Yo Matsumoto and Kazuhiro Kawachi, eds. John Benjamins) 2020年8月
- 『移動表現の類型論と第二言語習得』(吉成祐子, 眞野美穂, 江口清子, 松本曜 共著, くろしお出版) 2021年2月
- 『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』(窪菌晴夫他 共編, 開拓社) 2021年2月
- 『一般言語学から見た日本語のプロソディー』(窪菌晴夫著, くろしお出版) 2021年3月

2. 共同利用・共同研究に関する計画

学術交流協定に基づき、神戸大学大学院人文学研究科と上記のProsody and Grammar Festa 5を、ソウル大学と国際ワークショップ (Japanese/Korean Phonology) をそれぞれ共同開催した。また日本語・韓国語の対照研究のためにイギリス・ヨーク大学と学術交流協定を締結し、共同研究を開始した。

データベース等の構築・公開については、名詞修飾表現の言語地図 The World Atlas of Noun-Modifying Constructions (WANMC)を完成し、当初の計画より1年早く一般公開した。また諸言語の移動動詞に関する文献目録(英文)の増補改訂を行い公開した。

この他、国際シンポジウムの開催や出版企画についてアドバイザリーボードのメンバーに意見を求め、その意見を査読者の選定や第4期のプロジェクトテーマの立案に活用した。

3. 教育に関する計画

若手育成としてPDフェローを2人雇用し、それぞれ研究指導を行った。またプロジェクト全体で5人の非常勤研究員を雇用し、対照言語学の事業を推進した。海外の大学から大学院生2名(アメリカ, ロシア)を特別共同利用研究員として受け入れ、研究指導を行った。

さらに大学院生4人, 学振PD1人を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、プロジェクト主催の発表会等で研究発表の機会を与えた。また研究発表会や国内/国際シンポジウム・ワークショップ等において延べ8人の大学院生(筆頭発表者)に発表の機会を提供した。

イベントとしては、主に国内の大学院生を対象に第36回NINJALチュートリアル「カテゴリ文法入門」(令和2年9月)を開催し、海外では中国(常州工学院)の日本語学講習会および主にインドを対象にしたNINJAL日本語学講習会(4日間)において、学生と教員を対象に日本語学に関する講習会を行った。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

プロジェクト全体で地域社会と連携した講演を計7件、それ以外の講演を6件行った。このうち所内メンバーは鹿児島県薩摩川内市と交わした連携協定に基づき、同市・甕島の中学校(全3校)において中学生・教員・地元住民を対象として方言講演会を開催し、計100人(中学生60人, 教員・一般40人)の参加者を得た。またアジアの日本語研究者を対象とした日本語学講習会(4日間)では延べ276名の参加があったが、そのうち約半数が現役の日本語教師であり、社会人の学び直しの機会となった。

5. グローバル化に関する計画

海外の出版社から2冊の研究書/研究論文集を国際出版した(MIT PressおよびJohn Benjamins)。イベントについてはコロナ禍において大きな影響を受けたが、オンラインを利用して合計2件の国際ワークショップを開催し、合計105人の参加を得た。このうちJapanese/Korean Phonologyのワークショップはソウル大学との学術交流協定に基づくものである。また海外(主にインド)の日本語研究者を対象とした

NINJAL 日本語学講習会をオンラインで4日間開催し、延べ276名の参加者を得た。

人的交流として海外の研究者1人(台湾)を外来研究員として受け入れ共同研究を行い、海外の大学院生2人(アメリカ、ロシア)を特別共同利用研究員として受け入れ研究指導を行った。

プロジェクト全体では19件、国際会議で研究成果を発表した。このうち所内メンバーはJK 28 Satellite Workshop 'Experimental Phonetics and Phonology' や国際ワークショップ 'Japanese/Korean Phonology' などにおいて招待講演・研究発表を行った。

6. その他

該当する活動なし。

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を大きく上回って実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
1. 対照言語学研究を推進するために、4つの研究班(下記)ごとの公開研究発表会を計23回(国内学会におけるワークショップ1回を含む)、4班合同の発表会(Prosody and Grammar Festa 5)を1回、国際ワークショップを2回開催した。これら計26件の企画において計53件の研究発表が行われ(うち学生が筆頭発表者のもの8件)、計1676人(延べ)の参加者が得られた(うち海外機関研究者112人、大学院生を含む学生381人)。	
① このうち、班ごとの研究発表会および国内学会シンポジウム・ワークショップ計23回の内訳は音声研究班が21回(令和2年5月25日~7月17日, 10月9日~令和3年1月15日)、動詞の意味構造班(以下「意味構造班」)が2回(令和2年9月27日, 11月15日)であった。これらの発表会に合計1381人の参加が得られた(うち海外機関研究者94人、大学院生を含む学生334人)。発表数は合計27件であった。(国内学会シンポジウム・ワークショップの詳細については下記2を参照)。	
② プロジェクト全体の統合を図るために、令和3年2月20-21日に、プロジェクト全体の研究発表会(Prosody and Grammar Festa 5)をオンラインで開催し、190人の参加者を得た(うち海外機関研究者18人、大学生を含む学生47人)。この合同発表会では基調講演3件と口頭発表9件および8件のポスター発表により、対照言語学および言語類型論に関する研究成果を報告した。	
③ 国際シンポジウム等(計2件)	
・令和2年10月30日に、国際ワークショップ「日本語における移動動詞の文法化」をオンラインで開催した。参加者は35人、発表件数は2件(口頭、海外機関研究者による発表2件、学生による発表1件)であった〔意味構造班〕。	
・ソウル大学人文学部との学術交流協定に基づき、国際ワークショップ(Japanese/Korean Phonology)を音韻論フェスタ(オンライン、令和3年3月8-9日)の特別セッションとして開催した。参加者は70人、発表件数は4件(口頭、海外機関研究者による発表2件)であった〔音声研究班〕。	
2. 国内学会において下記のワークショップを企画した。	
① 日本言語学会第161回大会(令和2年11月22日、オンライン開催)において「危機方言のプロソディー」と題するワークショップを企画・開催した。参加者は84人であった〔音声研究班〕。	
3. プロジェクトの所内メンバー(教員5名)が合計6冊の書籍(研究書2冊、研究論文集4冊)を刊行し、さらに7冊の著書・研究論文集の執筆・編集を行った。	

- ① プロジェクト全体の論文集『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』（開拓社）の編集を進め、令和3年2月に刊行した。
- ② 音声研究班は日本語諸方言のプロソディーを分析した『一般言語学から見た日本語のプロソディー』（窪菌晴夫著、くろしお出版）を令和3年3月に刊行した。また前年度に開始した論文集Prosody and Prosodic Interfaces (H. Kubozono, J. Ito and A. Mester eds. Oxford University Press, 2021年刊行予定)の編集作業を完了し、さらにWord and Sentence Prosody: The Endangered Dialect of Koshikijima Japanese (H. Kubozono, De Gruyter Mouton)および『プロソディー研究の最前線（仮題）』（窪菌晴夫、守本真帆 共編、開拓社）について出版社と契約を締結し執筆・編集作業を進めた。
- ③ とりたて班は研究論文集『日本語の歴史的対照文法』（野田尚史、小田勝 共編、和泉書院、令和3年5月刊行予定）の編集を進めた。また、研究論文集『日本の言語・方言の対照文法』（野田尚史、日高水穂 共編、和泉書院、令和4年度刊行予定）の編集を開始した。
- ④ 意味構造班は、Broader Perspectives on Motion Event Descriptions (Yo Matsumoto and Kazuhiro Kawachi, eds., John Benjamins) を令和2年8月に、『移動表現の類型論と第二言語習得：日本語・英語・ハンガリー語学習の多元的比較』（吉成祐子、眞野美穂、江口清子、松本曜 共著、くろしお出版）を令和3年2月にそれぞれ刊行した。また、Motion Event Descriptions from a Cross-Linguistic Perspective, Vol. 1 (De Gruyter Mouton 社から出版予定)、および『フレーム意味論の貢献：動詞とその周辺』（開拓社から出版予定）の執筆・編集を進めた。
- ⑤ 名詞修飾班は論文集『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』（パルデシ・プラシヤント、堀江薫 共編、ひつじ書房）を令和2年5月に、Type-Logical Syntax (Yusuke Kubota and Robert D. Levine 著, MIT Press, open access)を令和2年9月に出版した。

4. プロジェクト全体

プロジェクト共同研究員の研究成果も含め、プロジェクト全体で図書10冊と論文99編（ブックチャプター含む）を刊行し、発表・講演を85件行った。

5. 言語調査

コロナ禍のために、予定していた言語・方言調査は実施できなかった。

6. 名詞修飾班が2018年に出版したMouton Handbook of Contrastive Linguisticsの書評がJournal of Japanese Linguistics 2020; 36 (2): 291-303 (De Gruyter Mouton)に掲載され、Yukinori Kimoto氏から以下の評価を受けた。“First, many of the contributors illuminate an astonishing range of linguistic phenomena in Japanese regarding language typology and linguistic theories... Further, this volume affirms the contribution of the study of Japanese to general Western linguistic theory, other individual language descriptions, and generalization in linguistic typology”, “Given that this book is written in English, a wider readership can access this monumental achievement in Japanese linguistics.”

(2) 研究実施体制等に関する計画

1. 神戸大学大学院人文学研究科との学術交流協定に基づき、Prosody and Grammar Festa 5（令和3年2月20-21日、オンライン）を共催した。（「1. 研究に関する計画」(1)-1-②参照）。
2. 対照言語学研究を実施するために、国内研究者5人を共同研究員として追加し、国内外あわせて157人の組織でプロジェクトの事業を遂行した（うち大学院生4人、海外研究機関に属する研究者19人）。また海外から1人（台湾）を外来研究員として受け入れ、共同研究を行った。

「計画を大きく上回って実施した」と自己評価した理由

これまでの合同発表会 (P&G Festa) の成果を集約した『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』(開拓社)をはじめ、所内メンバーが研究図書計 6 冊 (研究書 2 冊, 研究論文集 4 冊) を刊行した。これは「複数冊の刊行」という計画を大きく上回る成果である。イベントについては、コロナ禍にあつて対面式の研究会やワークショップが実施困難となる中で、オンラインにより国内研究会 23 回 (国内学会ワークショップ 1 回を含む) と合同発表会 (P&G Festa 5) 1 回, 国際ワークショップ 2 回を開催した。これは例年より多く、また計 7 回という計画を大幅に上回るものであった。2018 年度に刊行した研究論文集に対して国際誌に好意的な第三者評価 (書評) が与えられたことも計画を上回る成果と言える。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価

計画を上回って実施した

(1) 共同利用・共同研究に関する計画

1. 言語地図

名詞修飾表現の言語地図 The World Atlas of Noun-Modifying Constructions (WANMC) を計画より 1 年早く一般公開した [名詞修飾班]。

2. 文献目録

諸言語の移動動詞に関する文献目録 (英文) の増補改訂を行い, ver. 3.3 を令和 3 年 1 月 21 日に公開した [意味構造班]。

3. 平成 28 年度に公開した甌島アクセントデータベースに年間 140,654 件のアクセスがあった。移動動詞文献目録については年間 238 件, 言語地図については 45 件のアクセスがあった (2020 年 4 月 1 日～2020 年 12 月 8 日)。

(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

1. ソウル大学人文学部との共催で国際ワークショップ (Japanese/Korean Phonology) を音韻論フェスタの特別セッションとして開催した。(詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照)。

2. 統語論・意味論の分野の日本語・韓国語対照研究のために, 2020 年 7 月にイギリス・ヨーク大学と学術交流協定を締結した。

3. NINJAL シンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」(令和 2 年 10 月 3 日) においてプロジェクトから 2 件の研究発表を行った。また「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」プロジェクトと共催でシンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—日本の言語・方言の対照研究を中心に—」を 2 回にわたり開催した (令和 3 年 3 月 6 日, 21 日)。

4. 音声研究班は編集集中の研究論文集 (Prosody and Prosodic Interfaces, OUP) の編集過程において, 査読者の選定等についてアドバイザーボードのメンバーに意見を求め, それを活用した。名詞修飾班では第 4 期のプロジェクトテーマについてアドバイザーボードの意見を求め, それを活用した。

5. 神戸大学大学院人文学研究科との学術交流協定に基づき, Prosody and Grammar Festa 5 を共催した (「1. 研究に関する計画」(1)-1-②参照)。

6. 日本音韻論学会が主催した音韻論フォーラム 2020 (令和 2 年 8 月 28 日～30 日, オンライン) に協力し, 海外特別講演 (Jennifer Smith 氏, North Carolina 大学) を企画した。

7. 東京音韻論研究会 (TCP) および関西音韻論研究会 (PAIK) と第 16 回音韻論フェスタ (令和 3 年 3 月 8 日～9 日) を共催した。合計 104 人の参加が得られた (うち海外機関研究者 16 人, 大学院生を含む学生 32 人)。発表数は合計 12 件であった (うち海外機関研究者 1 人, 大学院生を含む学生 6 人)。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</p>	
<p>1. 海外の大学 (ハワイ大学, ロシア科学アカデミー) から 2 名の大学院生を特別共同利用研究員として受け入れ, 研究指導を行った。</p>	
<p>(2) 人材育成に関する計画</p>	
<p>1. 若手研究者を育成するために, PD フェローを 2 人, 非常勤研究員を 5 人雇用した。</p>	
<p>2. 大学院生 4 人, 学振 PD1 人を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。</p>	
<p>3. プロジェクトが企画したイベント (研究発表会, シンポジウム・ワークショップ他) において合計 8 人の大学院生 (筆頭発表者) に発表の機会を提供した。</p>	
<p>4. 大学院生に対して調査旅費と成果発表の旅費を支援する予定であったが, コロナ禍によりすべてのイベントがオンライン開催となったため今年度の支援はできなかった。</p>	
<p>5. 第 36 回 NINJAL チュートリアル「カテゴリ文法入門」を 4 回にわたって開催し (令和 2 年 9 月 5 日, 9 月 12 日, 9 月 19 日, 9 月 26 日), 大学院生を中心に延べ 228 名の参加を得た。</p>	
<p>6. アジアの若手日本語研究者を対象に NINJAL 日本語学講習会を開催した。また中国常州工学院日本語学科において, 学部生と教員向けに, 語の意味に関する講習会を行った [意味構造班] (詳しくは「5. その他: グローバル化」(2)-2 参照)。</p>	
<p>7. 国語研オープンハウス (令和 2 年 9 月 10 日, 国語研) において大学生・大学院生向けのポスター発表を 1 件行った。</p>	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</p>	
<p>1. 鹿児島県薩摩川内市との間に前年度結んだ連携協定に基づき, 甕島の全中学校 (3 校) の中学生・教員・地元住民を対象としてことばと方言に関する啓蒙講演をオンラインで行った (令和 3 年 1 月 22 日午前および午後)。参加者は計 100 人 (中学生 60 人, 教員・一般 40 人) であった。</p>	
<p>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</p>	
<p>1. 上記 1 の社会連携による講演および下記 2 の現役教師向けの講演とは別に, プロジェクト全体で一般社会人向け講演を 7 件行った (別添「研究成果一覧」の「一般向け講演・セミナー等」欄参照)。</p>	
<p>2. 現役教師向け講演会等</p>	
<p>NINJAL 日本語学講習会では, 受講者の半数が現役の日本語教師であった (詳細については「5. その他: グローバル化(2)-2-①」参照) [名詞修飾班]。</p>	

5. その他の目標を達成するための措置

(1) グローバル化に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p data-bbox="204 331 571 365">(1) 国際的協業に関する計画</p> <p data-bbox="188 376 1465 454">1. 海外の研究者1人(台湾)を外来研究員として、大学院生2名(アメリカ, ロシア)を特別共同利用研究員としてそれぞれ受け入れ, 共同研究/研究指導を行った。</p> <p data-bbox="188 465 1465 589">2. ソウル国立大学, オックスフォード大学の研究者と, 日本語と韓国語の敬語に関する脳波計測実験に関してオンラインでの研究打合せを行い, 今までの研究成果を共有するとともに, 今後の研究の進め方について話し合った。</p> <p data-bbox="204 645 571 678">(2) 国際的発信に関する計画</p> <p data-bbox="188 689 1465 813">1. 下記の2件の国際ワークショップを開催し(オンライン), 合計105人の参加者を得た。 ソウル大学人文学部との共催で国際ワークショップ(Japanese/Korean Phonology)をオンラインで開催した(詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照)。 国際ワークショップ「日本語における移動動詞の文法化」をオンラインで開催した(詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照)。</p> <p data-bbox="188 913 1465 947">2. 下記の2件の海外日本語学講習会をオンラインで開催し, 合計341人の参加者を得た。</p> <p data-bbox="204 958 1465 1081">①海外の日本語研究者(日本語教師・日本語学習者を含む)向けのNINJAL日本語学講習会を令和2年10月17日, 18日, 11月28日, 29日の計4日間オンラインで開催し, 延べ276名の参加者を得た[名詞修飾班]。詳細は以下の通りである。</p> <ul data-bbox="212 1093 1465 1429" style="list-style-type: none">• 10月17日(土)84名(うち外国機関所属80名)(学部生5名, 修士課程9名, 日本語教師37名, その他33名)• 10月18日(日)67名(うち外国機関所属62名)(学部生5名, 修士課程7名, 博士課程1名, 日本語教師31名, その他23名)• 11月28日(土)65名(うち外国機関所属52名)(学部生4名, 修士課程9名, 博士課程4名, 日本語教師31名, その他17名)• 11月29日(日)60名(うち外国機関所属51名)(学部生1名, 修士課程8名, 博士課程2名, 日本語教師25名, その他24名) <p data-bbox="204 1440 1465 1518">②令和2年9月29日に, 中国常州工学院日本語学科において, 日本語の語の意味に関する講習会をオンラインで行った。参加65名(全員が外国機関所属, 学部生60名, 日本語教師5名)[意味構造班]。</p> <p data-bbox="204 1529 355 1563">3. 国際出版</p> <p data-bbox="228 1574 1465 1832">英文研究論文集 Broader Perspectives on Motion Event Descriptions (John Benjamins)を令和2年8月に, 英文研究書 Type-Logical Syntax (MIT Press)を令和2年9月に刊行した。また Motion Event Descriptions from a Cross-Linguistic Perspective, Vol 1 (De Gruyter Mouton)と Prosody and Prosodic Interfaces (Oxford University Press)の編集を進め, Word and Sentence Prosody: The Endangered Dialect of Koshikijima Japanese (De Gruyter Mouton)の出版契約と執筆を行った(詳しくは「1. 研究に関する計画」(1)-3参照)。</p> <p data-bbox="228 1843 1409 1877">また同じく所内メンバー(教員5名)が下記8編の論文を海外のジャーナル・論文集に発表した。</p> <ul data-bbox="212 1888 1465 1955" style="list-style-type: none">• H. Kubozono (2020) 'Default word prosody and its effects on morphology' Japanese/Korean Linguistics 26, 19-31. CSLI.	

- S-A, Jun and H. Kubozono (2020) ‘Prosodic systems in Asian Pacific Rim’ The Oxford Handbook of Prosody. Oxford University Press.
- Y. Matsumoto (2021) ‘The semantic differentiation of V-te V complexes and V-V compounds in Japanese’ Verb-Verb Complexes in Asian Languages. Oxford University Press.
- Y. Matsumoto. (2020) ‘The semantics of Japanese verbs’ Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics. (Mouton de Gruyter)
- Y. Matsumoto. (2020) ‘Motion Verbs in Japanese’ Oxford Research Encyclopedia of Linguistics.
- K. Akita and Y. Matsumoto. (2020) ‘A fine-grained analysis of manner salience: Experimental evidence from Japanese and English’ Broader perspectives on motion event descriptions (John Benjamins)
- Y. Matsumoto. (2020) ‘Neutral and specialized Path coding: Toward a new typology of Path coding devices and languages’ Broader perspectives on motion event descriptions (John Benjamins)
- Y. Kubota, et al., ‘Development of a General-Purpose Categorical Grammar Treebank’ LREC 2020, 5195-5201

4. 国際発表

コロナ禍により国際会議の多くが中止となったことに伴い例年ほどの発表はなかったが、下記の所内メンバーによる発表を含め、プロジェクト全体で19件、国際会議で成果発表を行った（別添の「研究成果一覧」参照）。

- JK 28 Satellite Workshop ‘Experimental Phonetics and Phonology’ (2020年12月, オンライン) [音声研究班(窪菌)]。
- 国際ワークショップ ‘Japanese/Korean Phonology’ (2021年3月, オンライン) [音声研究班(窪菌)]。

5. 文献目録(英語)の公開

移動動詞に関する文献目録(英文)を増補改訂し公開した(「2. 共同利用・共同研究に関する計画(1)-2」参照)。

- 6. 音韻論フォーラム2020において海外特別講演を企画した。(詳しくは「2. 共同利用・共同研究に関する計画」(2)-6参照)。

6. その他

該当する活動なし。

令和2年度の評価

《評価結果》

計画を大きく上回って実施している

コロナ禍のもと、対面でのシンポジウムなどは開催できなくなっている。調査等も大きな制約を受けることになっている。しかし、そのような中であるにも関わらず、全体に計画を上回って研究が進められている。

まず、53件もの研究発表が行われたこと、プロジェクト全体の論文集『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』（開拓社）の刊行をはじめとする著書、編著書、研究論文等の刊行も多数に及ぶ。グローバルな発信ということでも海外のジャーナル・論文集に8本の論文が掲載されたことも大きく注目される。

若手研究者の育成や講演会などもほぼ計画通りないしそれを上回る形で行われている。

《評価項目》

1. 研究について

公開研究発表会を計23回（国内学会におけるワークショップ1回を含む）、4班合同の発表会（Prosody and Grammar Festa 5）を1回、国際ワークショップを2回開催、というように、53件の研究発表が行われことは当初の計画を大幅に上回るものである（特に、プロジェクト全体の研究発表会（Prosody and Grammar Festa 5）のオンライン開催において190人の参加があったことは特筆される）。

出版刊行も、所員によるものだけでも6冊（研究書2冊、研究論文集4冊）と、極めて盛んである。その中でプロジェクト全体の論文集『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』（開拓社）の刊行は特筆に値する。

それぞれの班における編著書の刊行も注目に値する。すなわち、『一般言語学から見た日本語のプロソディー』（窪菌晴夫著、くろしお出版）、『日本語の歴史的対照文法』（野田尚史、小田勝 共編、和泉書院、令和3年5月刊行予定）、Broader Perspectives on Motion Event Descriptions (Yo Matsumoto and Kazuhiro Kawachi, eds., John Benjamins) 『移動表現の類型論と第二言語習得：日本語・英語・ハンガリー語学習の多元的比較』（吉成祐子、眞野美穂、江口清子、松本曜 共著、くろしお出版）、『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』（パルデシ・プラシヤント、堀江薫 共編、ひつじ書房）などの多数のものがある。

2. 共同利用・共同研究について

神戸大学大学院人文学研究科との学術交流協定に基づく研究活動（Prosody and Grammar Festa 5）、ソウル大学人文学部との共催の国際ワークショップ（Japanese/Korean Phonology）、イギリス・ヨーク大学と学術交流協定の締結、など、内外との研究交流が盛んである。

NINJAL シンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」（令和2年10月3日）における研究発表、「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」プロジェクトと共催でのシンポジウム（「日本語文法研究のフロンティア—日本の言語・方言の対照研究を中心に—」）などは共同研究に相当する。

3. 教育について

研究発表会およびシンポジウム等への参加者のうち、大学院生を含む学生は334人となっており、若手研究者の育成という点で一定の成果を上げているといえる。

そのほか、プロジェクト事業の中で、大学院生4名、学振PD1人が共同研究員になっていること、大学院生筆頭の研究発表も8件あることなども特筆に値する。

公開的な教育の機会としてのNINJAL チュートリアル「カテゴリ文法入門」を4回にわたって開催し（令和2年9月5日、9月12日、9月19日、9月26日）、大学院生を中心に延べ228名の参加を得たことも注目される。

今後も特定の若手研究者の育成ということと、特に限定しない多くの大学院生への教育ということ

との両面での展開が期待される。

4. 社会との連携及び社会貢献について

NINJAL 日本語学講習会で多数の日本語教師が参加したこと、甌島の全中学校を対象にした遠隔の啓蒙的講演、などはコロナ下の状況での制約はあるものの、注目すべき社会貢献と言える。

5. グローバル化について

国際ワークショップ「日本語における移動動詞の文法化」、ソウル大学人文学部との学术交流協定に基づく国際ワークショップ (Japanese/Korean Phonology) など、国内にとどまらない研究活動が行われており、海外研究機関からの参加者も 112 人と一定数ある。

Prosody and Prosodic Interfaces (H. Kubozono, J. Ito and A. Mester eds. Oxford University Press, 2021 年刊行予定) の編集作業を完了するなど、出版も着実に進められている。海外のジャーナル・論文集に 8 本の論文が出されていることも注目される。

6. その他特記事項

名詞修飾表現の言語地図 The World Atlas of Noun-Modifying Constructions (WANMC) を計画より 1 年早く一般公開したことも研究の進展を示すものである。現在のところアクセスできる言語はアジアの一部の言語に限られているようであるが、今後の進展が待たれる。

統語・意味解析コーパスの開発と言語研究

プロジェクトリーダー：プラシャント・パルデシ

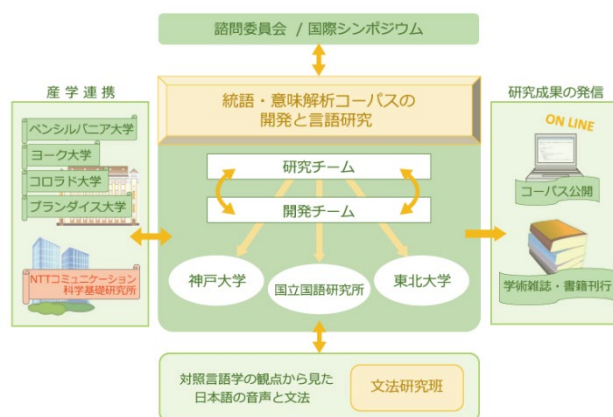
I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

現在世界の主要言語について Penn Treebank 方式の統語解析情報付きコーパス（ツリーバンク）が作られ、言語学および言語処理の研究に目覚ましい成果を挙げている。しかし日本語については十分な規模の公開されたツリーバンクは存在しない。

本プロジェクトでは、上記のような日本語研究の遅れを挽回し、多様な日本語の機能語、句、節および複雑な構文を大量の言語データから検索・抽出して研究することを可能とする統語・意味解析情報付き日本語構造化コーパス NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ)・Keyaki Treebank/Kainoki Treebank/Kusunoki Treebank の構築に加えて、述語項構造解析のために必要となる意味役割情報を付与するコーパスの開発も試みる。さらに、このコーパスを利用して、日本語の研究を行い、その成果を国内外に向けて発信する。コーパスの共同利用の推進の一環として、最終年度までに 5~6 万文規模のコーパスを完成させる予定であり、言語処理の技術を持たない人でも簡単に利用できるインターフェースとともに、国立国語研究所のホームページから一般公開する。また、日本語に堪能でない海外の研究者にも本コーパスを利用できるようにローマ字版も用意する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトでは、右図の示すように、日本国内外の研究者から構成される研究班に加えて国立国語研究所、東北大学、神戸大学にコーパス開発班を設け、それらの班が相互に連携しながら開発と研究を進める。また、日本語研究の国際化を目指して、世界のコーパス言語学研究の最前線で活躍している海外の研究者および日本国内の中堅研究者で Advisory Board を構成し、このメンバーのアドバイスを中心に諸企画の方針・方向を決定し、国際的研究ネットワークの構築を図る。また、国際シンポジウムなどを開催し、その成果を海外の定評のある出版社・研究雑誌を通じて発信する。



2. 年次計画（ロードマップ）

● 全体計画

- ・コーパス開発：6年間で5~6万文規模の統語・意味解析コーパスを完成させ、一般公開する。
- ・日本語に堪能でない海外の研究者にも本コーパスを利用できるようにローマ字版も提供する。
- ・コーパス使用の利便性を図るために複数の検索ツール（インターフェース）を提供する。
- ・統語・意味解析コーパスに基づく研究を行い、研究成果を国内外に発信する。

● 年次計画

平成 28 年度：研究プロジェクトの始動（1 年目）

1. プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回、国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. 国内外の主要研究者から成るアドバイザーボードを設置し、プロジェクトの運営や成果発信について随時アドバイスを求める。
7. インターネットを通じてアノテーション作業が円滑に行える環境を海外の研究者と連携しながら構築する。
8. 海外の大学と研究交流協定を結ぶ。
9. 日英版のユーザーフレンドリーなインターフェースを構築し、NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスと合わせて公開する（1 万文）。
10. 2013 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。
11. 2016 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。

平成 29 年度：研究プロジェクトの推進（2 年目）

1. プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. 国際シンポジウム (Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing) を企画し、実施する。研究成果の編集を開始する。
7. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し、合計 2 万文のデータを公開する。
8. 2013 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。
9. 2016 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。

平成 30 年度：研究成果の中間とりまとめ（3 年目）

1. プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。

5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに1万文を追加し、合計3万文のデータを公開する。
7. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会(チュートリアル)を2回開催する(内1回はNINJAL チュートリアル)。
8. アノテーションマニュアル試作版作成・ウェブ公開する。
9. インターフェースの開発・改良を続ける。
10. 国際シンポジウム (Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing) の研究成果をとりまとめ、プロジェクトの内部と外部の査読者によるレビューを経た後に、海外の定評のある研究雑誌 LILT (*LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY*) に提出する。
11. 日本語の統語論の教育に特化した Exploring Japanese Syntax (仮題) を執筆し、この教材の練習問題を NPCMJ コーパスを利用して解くための仕組みを模索する。
12. 幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究(宮田 Susanne 教授との共同研究)を開始する。
13. 述語と機能語に対する詳細な形態論情報付与のための研究(宮田 Susanne 教授との共同研究)を開始する。
14. 日本語学習者のコミュニケーション(リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ)、科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究: 複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。
15. 2013年12月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。
16. 2016年12月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。

令和元年度：研究プロジェクトの拡充(4年目)

1. プロジェクト HP (日英版) を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに1万文を追加し、合計4万文のデータを公開する。
7. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会(チュートリアル)を開催。
8. 日本語の統語論の教育に特化した Exploring Japanese Syntax (仮題) を刊行し、併せて、この教材の練習問題を NPCMJ コーパスを利用して解くための仕組みも公開する。
9. アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開
10. 幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究(宮田 Susanne 教授との共同研究)を継続し、CHILDES (Child Language Data Exchange System) と連携してデータを公開する。
11. 述語と機能語に対する詳細な形態論情報付与のための研究(宮田 Susanne 教授との共同研究)を継続する。

12. インターフェースの開発・改良を続行する。
13. 岡山大学(竹内研究室)と連携し、述語構造シソーラス (Predicate-Argument Structure Thesaurus (PT)) で分析された意味役割とフレームの情報を統語・意味コーパス NPCMJ に加える。
14. 2013 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果の編集を完了・出版社 (Oxford Univ. Press) に入稿する。
15. 2016 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を出版社 (John Benjamins) に入稿する。
16. 2017 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing の研究成果をとりまとめ、プロジェクトの内部と外部の査読者によるレビューを完了し、海外の定評のある研究雑誌 LILT (*LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY*) に提出する。
17. 日本語学習者のコミュニケーション (リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ), 科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究: 複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。

令和 2 年度：研究成果のとりまとめ (5 年目)

1. プロジェクト HP (日英版) を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し、合計 5 万文のデータを公開する。
7. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会 (チュートリアル) を開催する。
8. アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開
9. インターフェースの開発・改良を続行する。
10. 統語意味解析情報を付与した幼児の発話データの公開 (宮田 Susanne 教授との共同研究)
11. 述語と機能語に対して詳細な形態論情報の付与されたデータを公開 (宮田 Susanne 教授との共同研究)
12. 岡山大学(竹内研究室)と連携し、述語構造シソーラス (Predicate-Argument Structure Thesaurus (PT)) で分析された意味役割とフレームの情報を統語・意味コーパス NPCMJ に加える。
13. 日本語学習者のコミュニケーション (リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ), 科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究: 複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。

令和 3 年度：研究成果の公開 (6 年目)

1. プロジェクト HP (日英版) を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。

5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに1万文を追加し、合計6万文のデータを公開する。
7. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会（チュートリアル）を開催する。
8. アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開
9. 岡山大学（竹内研究室）と連携し、述語構造シソーラス（Predicate-Argument Structure Thesaurus (PT)）で分析された意味役割とフレームの情報を統語・意味コーパス NPCMJ に加える。
10. 統語意味解析情報を付与した幼児の発話データの公開（宮田 Susanne 教授との共同研究）
11. 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ）、科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。

【3年目までの成果物】

- ・ NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス（3万文）を初心者から上級者まで様々な利用が可能な各種検索インターフェースと共に公開。
- ・ NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス（3万文）をユーザーフレンドリーなインターフェースと共に公開。

【5年目までの成果物】

- ・ 海外の定評のある研究雑誌の特集号または論文集：「NINJAL 国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing の研究成果（論文集）の刊行（LILT (LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY)）」
- ・ NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス（5万文）をユーザーフレンドリーなインターフェースと共に公開。
- ・ 日本語の統語論の教育に特化した入門書 *Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective* の刊行
- ・ 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ）、科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し開発した「文型バンク」（ウェブ版）。
- ・ NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果（論文集）の刊行（Oxford Univ. Press）
- ・ NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果（論文集）の刊行（John Benjamins）

6年間のロードマップ

統語コーパス	H28年度	H29年度	H30年度	R元年度	R2年度	R3年度
データ	統語・意味解析コーパス(NPCMJ)を毎年1万文(計6万文)作成および一般公開					
シンポジウム等	国内外の学会で研究発表	国際シンポジウム開催, 国内外の学会で研究発表	国内外の学会で研究発表	国内外の学会で研究発表	国内外の学会で研究発表	国内外の学会で研究発表
	毎年2回公開研究発表会開催					
講習会等	毎年2回統語コーパス利用講習会					
刊行・出版			国際シンポジウムの成果を刊行, アンノテーションマニュアル試作版作成	アンノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開	啓蒙書・普及書を刊行, アンノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開	アンノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開

II. 令和2年度活動概要

令和2年度予算総額 29,506千円

令和2年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

- ① 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために, 研究発表会(オンライン版)を2回開催し, 計56名(延べ)の参加者が得られた。
- ② 弘前大学と連携し, 津軽方言のコーパス構築を進めた。
- ③ 検索インターフェースNPCMJ Explorer, NPCMJ Search, NPCMJ Child Language Development Timelineのマニュアル(ユーザーズガイド)の日本語版と英語版およびNPCMJ アンノテーションマニュアル(第1~25節; 25節以降は準備中)の日本語版と英語版をプロジェクトのホームページで公開した。
- ④ NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果論をまとめた英文文集 Verb-Verb Complexes in Asian Languages (Taro Kageyama, Peter Edwin Hook, and Prashant Pardeshi (eds.) Oxford University Press, 571頁+前書き・索引)の編集・校閲作業を終え, 出版社に提出した。
- ⑤ 日本語の統語論の教育に特化した Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective を刊行した。この教材の一部の練習問題を NPCMJ を使って解くためのインターフェースを開発し, 刊行と同時に公開した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

- ① 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために, 7名の非常勤研究員(うちPDフェロー1名, 大学院生3名, フルタイム1名, パートタイム1名および技術補員1名)を雇用し, プロジェクト共同研究員と共にプロジェクトの事業(コーパス開発, チュートリアル開催, データの著作権処理等)を進めた。

- ② 学術交流協定に基づき、弘前大学と津軽方言のデータに NPCMJ 方式のアノテーションを付加するための共同研究を行い、データの一部に対して試験的にアノテーションを試みた。また、津軽方言の有対動詞のデータを収集・分析し、「使役交替言語地図」(The World Atlas of Transitivity Pairs (WATP))に格納して、公開した。
- ③ 昨年に続き、本年も宮田 Susanne 教授(愛知淑徳大学)との共同研究を進め、子供の日本語習得のデータに NPCMJ 方式のアノテーションを付加し、公開した。
- ④ 業務委託に基づき、東北大学と連携してアノテーション付与作業およびデータのローマ字化作業を進めた。同じく、業務委託に基づき、神戸大学と連携して、Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective の練習問題のインターフェースを開発し、書籍の出版と合わせて公開した。また、竹内孔一准教授(岡山大学)と連携して NPCMJ のデータの一部に意味役割とフレームの情報を付加し、公開した。

3. 教育に関する計画

- ① 若手研究者を育成するために、PD フェロー1名、非常勤研究員数名5名を雇用し、アノテーション方法の研究およびアノテーション付与作業を推進した。
- ② 7名の大学院生を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、そのうち2名に公開研究会における発表の機会を提供した。
- ③ オンライン方式の講習会を1回開催した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ① インターネットを通して、検索インターフェース NPCMJ Explorer, NPCMJ Search, NPCMJ Child Language Development Timeline のマニュアル(ユーザーズガイド)の日本語版と英語版および NPCMJ アノテーションマニュアル(第1~25節)の日本語版と英語版を公開し、NPCMJ コーパスとともに一般に発信した。

5. グローバル化に関する計画

- ① 英語による研究成果として、日本語の統語論の教育に特化した Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective を2020年10月にひつじ書房から刊行した。この教材の一部の練習問題を NPCMJ を使いながら解くためのインターフェースを開発し、刊行と同時に公開した。
- ② 英語インターフェースと日本語インターフェース、ローマ字表記のデータと仮名漢字表記のデータが選択できるようにした。
- ③ The International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC) 2020(マルセイユ, フランス, 2020年5月11~16日)(新型コロナウイルス感染拡大によるオンライン開催)で研究成果を発表した。

6. その他

該当する活動なし。

Ⅲ. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p data-bbox="229 331 788 360">(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <p data-bbox="188 376 1471 539">1. 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために、研究発表会（オンライン版）を2回開催した。2回の研究発表会において計3件の研究発表が行われ（すべて大学院生が筆頭発表者）、計56人（延べ）の参加者が得られた（うち海外機関研究者1人、大学院生を含む学生13人）。各研究会の詳細は以下の通りである。</p> <p data-bbox="201 555 459 584">① 第1回研究発表会</p> <p data-bbox="229 600 1426 629">開催日：2020年7月7日、参加者数25人、うち、海外機関研究者0人、大学院生を含む学生6人。</p> <p data-bbox="201 645 459 674">② 第2回研究発表会</p> <p data-bbox="229 689 1453 719">開催日：2020年11月27日、参加者数31人、うち、海外機関研究者1人、大学院生を含む学生7人。</p> <p data-bbox="188 734 1471 853">2. 津軽方言のコーパス構築を進めた。シンポジウムに関しては、弘前大学との津軽方言コーパス構築に関する共同研究の成果を発表する場として計画していたが、新型コロナウイルス感染拡大により開催に至らなかった。来年度の開催を目指す予定である。</p> <p data-bbox="188 869 1471 1032">3. 検索インターフェース NPCMJ Explorer, NPCMJ Search, NPCMJ Child Language Development Timeline のマニュアル（ユーザーズガイド）の日本語版と英語版および NPCMJ アノテーションマニュアル（第1～25節）の日本語版と英語版をプロジェクトのホームページで公開した。また、新たに NPCMJ Development Interfaces を、使用説明書の日本語版と英語版とともに公開した。</p> <p data-bbox="188 1048 1471 1211">4. 2013年12月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果論をまとめた英文文集 Verb-Verb Complexes in Asian Languages (Taro Kageyama, Peter Edwin Hook, and Prashant Pardeshi (eds.), Oxford University Press, 571頁+前書き・索引) を刊行した（2021年2月）。</p> <p data-bbox="188 1227 1471 1346">5. 日本語の統語論の教育に特化した Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective を2020年10月にひつじ書房から刊行した。この教材の練習問題の一部を NPCMJ を使いながら解くためのインターフェースを開発し、書籍の出版と合わせて公開した。</p> <p data-bbox="229 1397 655 1426">(2) 研究実施体制等に関する計画</p> <p data-bbox="188 1442 1471 1606">1. 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために、7名の非常勤研究員（うちPDフェロー1名、大学院生3名、フルタイム1名、パートタイム1名および技術補員1名）を雇用し、プロジェクト共同研究員と共にプロジェクトの事業（コーパス開発、チュートリアル開催、データの著作権処理等）を進めた。</p> <p data-bbox="188 1621 1471 1830">2. 学術交流協定に基づき、弘前大学と津軽方言のデータに NPCMJ 方式のアノテーションを付加するための共同研究を行い、データの一部に対して試験的にアノテーションを試み、748 ツリー（16,512語を内部公開した（通称：Matsunoki Treebank））をプロジェクトのHPで公開した。また、津軽方言の有対動詞のデータを収集・分析し、「使役交替言語地図」 (The World Atlas of Transitivity Pairs (WATP)) に格納して、公開した。</p> <p data-bbox="188 1845 1471 2009">3. 昨年に続き、本年も宮田 Susanne 教授との共同研究を進め、子供の日本語習得のデータに NPCMJ 方式のアノテーションを付加し、内部公開した（2021年3月末時点で12,427 ツリー；59,218語）。来年度はダブルチェックを行い、前年度で開発した幼児の言語発達の過程を可視化できるインターフェースとともに公開する予定。</p>	

4. 業務委託に基づき、東北大学と連携してアノテーションの研究・アノテーション作業およびデータのローマ字化作業を進めた。同じく、業務委託に基づき、神戸大学と連携して、Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective の練習問題のインターフェースを開発し、書籍の出版と合わせて公開した。また、岡山大学竹内研究室と連携してNPCMJ コーパスの一部のデータに意味役割とフレームの情報を付加し、内部公開した（2021年3月末時点で36,639 ツリー、346,830 語）。10. 業務委託に基づき、東北大学と連携してアノテーションの研究・アノテーション作業およびデータのローマ字化作業を進めた。同じく、業務委託に基づき、神戸大学と連携して、インターフェースの改良に関する研究を行い、パターンブラウザに改良を加え、公開した。さらに、(1)7 の Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective の練習問題を作成し、当該練習問題を NPCMJ コーパスで解くための仕組みを開発した（書籍の出版と合わせて、公開する予定である）。また、岡山大学竹内研究室と連携して NPCMJ コーパスの一部のデータに意味役割とフレームの情報を付加し、内部公開した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに1万文を追加し、合計5万文を2021年3月に公開した。加えて、今までパーザーの学習用に使用した述語項構造シソーラスの用例に NPCMJ 方式のアノテーションを付与したデータも公開する(2021年3月末時点で36,639 ツリー、346,830 語)。 新型コロナウイルス感染症拡大で対面式の開催を見合わせた。オンラインで開催の準備を進め、2021年3月13日に講習会を開催した(総参加者数:44名内学生数11, 総発表(口頭)件数:5件)。 NPCMJ コーパスに基づく研究の成果を国際学会で1件、国内学会で9件発表した。 日本語学習者のコミュニケーション(リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ)と連携し、NPCMJ コーパスの情報を利用して「文型バンク」の拡充を進めた。新しい文型200件の見出しデータが完成させた(Excel形式)。 述語とその項・付加詞の情報を可視化するシステムの構築に向けて、日本語学習者のコミュニケーション(リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ)と連携し、NPCMJ コーパスに付与されている情報を利用して、基礎データを作成した(Excel形式)。 <p>(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 国内外の主要研究者から成るアドバイザーボードと相談しながらアノテーションの質的な拡充を行った。変更点をウェブで公開中のマニュアルに反映した。 国語研の他の研究プロジェクトと合同で NINJAL シンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」を開催し、研究成果を発表した。今年度中の論文化し、窪菌晴夫・朝日祥之(編)『言語コミュニケーションの多様性(仮題)』と題した論文集に寄稿予定。 コーパスに形態論情報を付与するために、CHILDES(チャイルズ, Child Language Data Exchange System)を援用するための研究を、宮田 Susanne 先生と共同で続行した。 	

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 大学院等への教育協力に関する計画	
(2) 人材育成に関する計画	
1. 若手研究者を育成するために、PD フェロー1名、非常勤研究員5名を雇用し、アノテーションの研究および実施を推進した。	
2. 大学院生を7名、共同研究員としてプロジェクトに参画させ、公開研究会において、2名に発表の機会を提供した。	
3. 新型コロナウイルス感染拡大ですべての発表会がオンラインとなり、旅費等の支援は不要となった。	
4. 当初予定していた対面式の講習会は新型コロナウイルス感染拡大で実現できず、オンライン方式で開催するための準備を進め講習会を1回（3月13日）開催した。	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画	
(2) 研究成果の社会への普及に関する計画	
1. インターネットを通して、検索インターフェース NPCMJ Development Interfaces , NPCMJ Explorer, NPCMJ Search, NPCMJ Child Language Development Timeline のマニュアル（ユーザーズガイド）の日本語版と英語版および NPCMJ アノテーションマニュアル（第1～25節）とともに NPCMJ コーパスを一般公開した。	

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 国際的協業に関する計画	
(2) 国際的発信に関する計画	
1. 英語による研究成果として、日本語の統語論の教育に特化した Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective が2020年10月にひつじ書房から刊行された。この教材の一部の練習問題を NPCMJ コーパスを使いながら解くためのウェブサイトを開発し、書籍の出版と合わせて公開した。	
2. コーパスのローマ字表記および英語版インターフェースを含む NPCMJ コーパスを公開した。	
3. The International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC) 2020（マルセイユ、フランス、2020年5月11～16日）（新型コロナウイルス感染拡大によるオンライン開催）で研究成果を発表した。	

6. その他

該当する活動なし。

令和2年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施している

このプロジェクトの中心である、日本語の統語・意味コーパス(NPCMJ コーパス)の開発と拡充は、予定通り進展しており、令和2年度も順調に1万文のアノテーション付きデータが追加された。統語情報だけでなく意味情報のタグも付されたコーパス・プロジェクトはユニークな試みであり、発足当初と比べるとインターフェースも充実してきている。令和2年度は、日本語版と英語版のアノテーションマニュアル(25節まで)や、統語論教育のためのテキスト(Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective)の練習問題のためのインターフェースも公開された。NPCMJ コーパスのシステムは機能が多岐にわたっているだけに、使いこなすための技術が必要な側面があり、練習問題付きの教科書は有用であろうと思われる。今後、どのぐらい利用されているか、随時、ページビュー数等も発表してほしい。

本プロジェクトの令和2年度の活動は、十分充実しているが、計画よりも特に上回っているわけではないと判断し、評価はBとした。

《評価項目》

1. 研究について

論文集としては、2013年12月に開催された国際シンポジウムの成果がVerb-Verb Complexes in Asian Languages (Taro Kageyama, Peter Edwin Hook, and Prashant Pardeshi (eds.), Oxford University Press, 571頁+前書き・索引)として刊行された。また、アノテーションマニュアルに加えて、NPCMJ Development Interfacesの使用説明書が公開された点も喜ばしい。

令和元年度には、自己点検報告書にNPCMJ コーパスに基づく研究の成果として「国際学会での発表4件、国内学会での発表16件、論文刊行6編」と報告されていたが、令和2年度は「国際学会で1件、国内学会で9件発表」であった。新型コロナウイルス感染症拡大の影響があったのかもしれない。

また、津軽方言や日本語習得のデータにNPCMJ スタイルのアノテーションを加える試みは興味深いですが、プロジェクト全体の目的に対して、どのような位置づけがされているのか、もう少しわかりやすい説明があればよりよいと感じた。

2. 共同利用・共同研究について

NPCMJ コーパスには、令和2年度も一万文のデータが追加され、コーパスの拡充が進んでいる。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、例年のようなNPCMJ コーパス講習会/チュートリアルは開かれなかったが、オンラインの講習会が開かれた。

また、外部研究機関との連携としては、国際的に広く利用されている、言語発達のコーパスであるCHILDESと連携し、アノテーションの作業にも着手している。また、岡山大学の竹内研究室とも共同研究を進め、述語構造シソーラス(Predicate-Argument Structure Thesaurus (PT))で分析された意味役割とフレームの情報をNPCMJに加えた。また、国語研内の他グループと連携し、「文型バンク」

の拡充も進め、新たに文型 200 件に意味解説を追加した。このように、共同利用・共同研究について概ね順調に進展していると判断できる。

3. 教育について

これまでと同様、PD フェローや非常勤研究員を雇用するとともに、大学院生を共同研究員としてプロジェクトに加えており、若手研究者の育成を図っている。

ただし、新型コロナウイルス感染拡大ですべての発表会がオンラインとなり、旅費等の支援は不要となった。また、当初予定していた対面式の講習会は新型コロナウイルス感染拡大で実現できず、オンライン方式の講習会を 1 回、開催した。

4. 社会との連携及び社会貢献について

マニュアルが充実しつつあることは、大変喜ばしいことである。現在公開されているアノテーションマニュアルは 25 節まで、とのことであるが、これが主要な部分をほぼカバーしているのか、まだ続きが相当あるのか、明示されていたほうが望ましいと思う。

5. グローバル化について

NPCMJ コーパスはローマ字でも使用でき、ウェブサイトやマニュアルも英語と日本語の 2 言語で作成されている。グローバル化については、問題ないと判断している。

6. その他特記事項

NPCMJ のデータ量について、「自己点検報告書」の p.11 では「合計 5 万文を公開した」とあるが、「主要業績概要」の①では、「約 6.7 万文のデータ」とあった。また、web ページ (<http://npcmj.ninjal.ac.jp/>) の News 欄によると 2.6 万文の追加がされたとあった。どうして数字が食い違っているのか不思議に思ったので、機会があれば、説明してほしい。

「自己点検報告書」に 2 ヶ所「英文文集」という表現があったが、「英文論文集」のほうが適切なのではないかと思った。

日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成

プロジェクトリーダー：木部 暢子

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトは、日本の消滅危機言語・方言の記録・分析・継承を目的として、各地の言語・方言の調査を実施し、言語資源の整備・分析を行うとともに、言語・方言の継承活動を支援して地域の活性化に貢献することを目的とする。

近年、世界的な規模でマイナー言語が消滅の危機に瀕している。2009年、ユネスコは世界の危機言語リストを発表したが、その中には日本で話されている8つの言語—アイヌ語、与那国語、八重山語、宮古語、奄美語、沖縄語、国頭語、八丈語—が含まれている。しかし、消滅の危機に瀕しているのはそれだけではない。日本各地の伝統的な方言もまた、消滅の危機にさらされている。これらの言語・方言が消滅する前にその包括的な記録を作成し言語分析を行うこと、また、これらの言語・方言の継承活動を支援することは、言語学上の重要課題であるばかりでなく、日本社会においても重要な課題である。

以上のような状況を踏まえ、本プロジェクトでは、次のことを実施する。(1) 日本の危機言語・方言の語彙集、文法書、談話テキストの作成と言語分析、(2) 音声・映像資料（ドキュメンテーション付き）、「日本語諸方言コーパス」等の言語資源の整備、(3) 地域と連携した講演会・セミナーの開催、(4) 若手育成のためのフィールドワークの手引き書の作成。

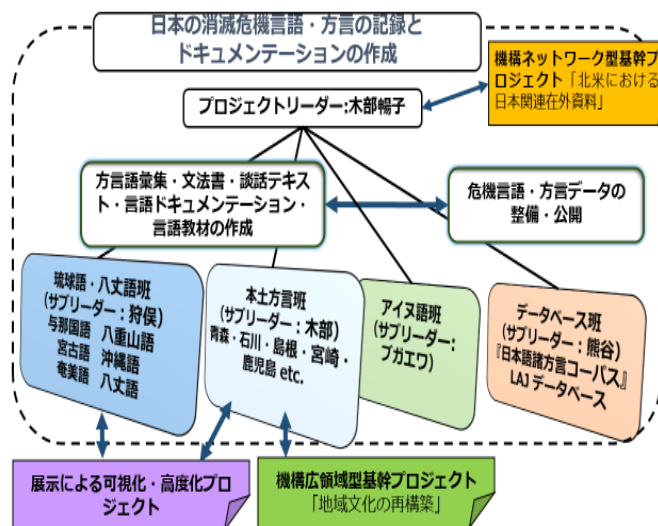
なお、実施にあたっては、機構の広領域型基幹プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」の「方言の記録と継承による地域文化の再構築」、ネットワーク型基幹プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」、「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化」と連携する。

2. 年次計画（ロードマップ）

●全体計画・研究組織

本プロジェクトの実施にあたっては、図のような研究班を組織する。

- ・琉球語・八丈語班、本土方言班は6年間で、琉球24地点、八丈語、本土16地点（東北4地点、関東3地点、中部・関西3地点、中国・四国3地点、九州3地点）の語彙集・文法書・談話テキスト、言語ドキュメンテーション、言語教材を作成する。アイヌ語班はアイヌ語の口承文芸コーパスを作成する。
- ・データベース班は「日本の危機言語・方言の音声データベース」、「アイヌ語口承文芸コーパス」、「日本語諸方言コーパス」、「『日本語諸方言コーパス』データベース」の整備・公開を行う。
- ・研究成果として、以下のものを目指す。



書籍：ムートン社 Handbook of Japanese Dialects , Handbook of the Ainu Language, 危機言語・方言に関する英文論文集, 『日本語の格』(仮題), 『談話のなかの方言』, 『沖縄県久米島方言調査報告書』, 『島根県隠岐の島方言調査報告書』, 『石川県白峰方言調査報告書』, 『愛知県木曾川方言調査報告書』, 『青森県むつ市方言調査報告書』, 『青森県八戸市方言調査報告書』, 『宮崎県椎葉村方言語彙集(仮題)』,

コーパス・データベース：『アイヌ語口承文芸コーパス』, 『日本語諸方言コーパス』, 「日本の危機言語・方言データベース」, 「『日本言語地図』データベース」,

その他：フィールドワークの手引き書, 各地の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション, 言語教材。

●年次計画

平成 28～29 年度（1～2 年目）

- ① 調査：琉球語, 八丈語, 本土方言の調査を行う。
- ② 研究会：「格と取り立て」, 「指示詞・代名詞」に関する研究会, コーパスに関する合同シンポジウムを開催する。
- ③ 言語資源：「日本語諸方言コーパス」, 「危機言語・方言音声データ」, 「アイヌ語口承文芸データ」等を拡充・整備し, 公開する。
- ④ 地域との連携：「危機的な状況にある言語・方言サミット」(年1回), 「方言セミナー」(年1回)を開催する。
- ⑤ 若手育成：大学院生, PD 等を調査へ参加させる。フィールドワークの手引き書の準備を行う。
- ⑥ 成果：『日本語の格表現』(くろしお出版), 『かたりの中の方言』(勉誠出版)を出版する。『沖縄県久米島方言調査報告書』, 『島根県隠岐の島方言調査報告書』, 『石川県白峰方言調査報告書』を刊行する。ムートン社 Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language (30年4月刊行予定), 『椎葉村方言語彙集(仮題)』(31年出版予定)の出版準備を行う。

平成 30 年度（3 年目）

- ① 調査：琉球語, 八丈語, 本土方言の調査を行う。
- ② 研究会：国際シンポジウム “Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization.” , 「動詞・形容詞」に関する研究発表会を開催する。
- ③ 言語資源：『日本語諸方言コーパス』モニター版を公開する。また, 「危機言語・方言」音声データ, 『アイヌ語口承文芸コーパス』, 「『日本言語地図』データベース」のデータ補充, および首都圏大学生調査の結果分布地図, 属性別集計表の作成。
- ④ 地域との連携：「方言セミナー」, (1回)を開催する。
- ⑤ 若手育成：大学院生, PD 等を調査へ参加させる。『フィールドワークの手引き書』の作成を進める。
- ⑥ 成果：『白峰方言調査報告書』, 『隠岐の島方言調査報告書』を刊行する。ムートン社 Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language の出版準備を行う。各地点の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション・フィールドワークのテキストの刊行準備を進める。

令和元～2 年度（4～5 年目）

- ① 調査：琉球語, 八丈語, 本土方言, アイヌ語の調査を行う。
- ② 研究会：「方言語彙集」, 「文法記述」に関する研究会, コーパス合同シンポジウムを開催する。
- ③ 言語資源：『日本語諸方言コーパス』のデータを拡充整備する。「危機言語・方言」データ, 『アイヌ語口

承文芸コーパス』、『日本言語地図』データベース」等のデータを拡充・公開する。

- ④ 地域との連携：「方言セミナー」, 「危機的な状況にある言語・方言サミット」を開催する。
- ⑤ 若手育成：大学院生, PD 等の調査への参加。
- ⑥ 成果：『椎葉村方言語彙集（仮題）』, 『むつ市方言調査報告書』, 『日本語の格表現』（くろしお出版）, 『かたりの中の方言』（勉誠出版）, 『地域文化の可能性』を出版する。各地点の語彙集・文法書・談話テキストをウェブで公開する。
- ⑦ 展示による言語研究の可視化・高度化を実施する。

令和3年度（6年目）

- ① 調査：次期準備調査を実施する。
- ② 研究会：研究成果報告会を開催する。
- ③ 言語資源：『日本語諸方言コーパス』（9080 時間）を一般公開する。「危機言語・方言音声データ」, 「アイヌ語口承文芸コーパス」, 「『日本言語地図』データベース」等のデータを拡充・公開する。
- ④ 地域との連携：『椎葉村方言語彙集』を刊行する。言語復興のための講演, ワークショップを開催する。
- ⑤ 若手育成：大学院生, PD 等の調査データの整備・公開を支援する。
- ⑥ 成果：ムートン社 Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language , 『フィールドワーク言語学の手引き』を出版する。各地点の語彙集・文法書・談話テキストをウェブで公開する。
- ⑦ 民博特別展に参加し, 「災害と方言」の展示を行う。

6年間のロードマップ

	H28 年度	H29 年度	H30 年度	R 元年度	R2 年度	R3 年度
調査	琉球語, 八丈語, アイヌ語, 本土方言調査					
データ	『諸方言コーパス』データ整備	モニタ版公開	データ整備	データ整備	データ整備	本公開
	方言コーパスを使った方言研究					
	危機言語・方言音声データ・アイヌ語口承文芸コーパス等整備・公開					
シンポジウム等	毎年, 研究発表会, 危機言語・方言サミット, コーパス合同シンポジウム, 方言セミナー開催					
			国際シンポジウム開催	ハワイ大合同シンポジウム（毎年1回開催）		
刊行・出版	『久米島方言調査報告書』 『島根県隠岐の島方言調査報告書』, 『白峰方言調査報告書』等刊行		『椎葉村方言語彙集（仮題）』, 『愛知県木曾川方言調査報告書』等刊行	『椎葉村方言語彙集（仮題）』, 『むつ市方言調査報告書』, 『八戸市方言調査報告書』, 『日本語の格表現』, 『かたりの中の方言』, 『地域文化の可能性』		Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language 『フィールド言語学の手引き（仮題）』

3. 令和3年度の実施予定

- ・研究成果報告会を開催する。
- ・『日本語諸方言コーパス』を正式版として公開する。
- ・『椎葉村方言語彙集』を刊行する。言語復興のための講演, ワークショップを開催する。
- ・大学院生, PD 等の調査データの整備・公開を支援する。
- ・ムートン社 Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language , 『フィールド言語学の手引き』を出版する。
- ・各地点の語彙集・文法書・談話テキストをウェブで公開する。

・民博特別展に参加し、「災害と方言」の展示を行う。

II. 令和2年度活動概要

令和2年度予算総額 40,000千円

令和2年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

【フィールドワーク】全国40地点で調査を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止とした。【研究発表会等】その代わりに研究発表会を充実させた。実施内容は以下のとおり（すべてオンライン開催）。①2020年6月14日 プロジェクト第1回研究発表会「格・情報構造（本土諸方言）」、②2021年3月14日プロジェクト第2回研究発表会、③2021年3月6日・3月21日「日本語文法研究のフロンティア—日本の言語・方言の対照研究を中心に—」（「対照言語」文法研究班と共催）、④2021年3月28-29日「アジア・アフリカ地理言語学 2020年度第2回研究会 Classification and symbols for a geolinguistic study of grammatical relations」（東外大AA研共同利用・共同研究課題「アジア・アフリカ地理言語学研究」、科研費18H05510と共同開催）。その他、科研費と合同で異分野融合の研究発表会を開催した。⑤2020年8月17-18日「遺伝学・言語学・考古学の成果から見る宮古諸島の人の多様性」、⑥2020年9月19-20日「係り結びと格の通方言的・通時的研究」、⑦2020年12月19-20日「日琉諸方言系統論の展望」。【研究成果】前年度に実施した青森県八戸市方言調査の報告書を3月に刊行した。また、『うちなーぐち活用辞典』『及位の方言』を刊行した。【教材・教育プログラム】東外大AA研LingDy3と共同で『フィールド言語学の手引き』の編集を、機構広領域連携型プロジェクト「地域社会」、鹿児島大学と共同で『地域文化の可能性』の編集を行った。これらは2021年度出版の予定である。【受賞】琉球朝日放送株式会社と共同で制作した「くとうばどう宝 ～消滅危機言語を守る人～」が第26回プログレス賞 奨励賞を受賞、本プロジェクトが刊行した『鳩間方言辞典』の著者 加治工真市氏が琉球新報活動賞（出版活動部門）を受賞した。【大学との組織的な連携】東外大AA研LingDy3との連携協定に基づき、クロスアポイントメントにより特任助教1人を雇用し、「フィールド言語学ウェビナー」、教材『フィールド言語学の手引き』の編集、若手育成等を実施した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

【データベース等】『日本語諸方言コーパス（COJADS）』モニター版のデータの更新、追加公開を行った。公開データは62地点、60時間となった。COJADSモニター版は2019年5月の公開から1年半で中納言の利用契約数が3,206件となった。また、自然言語処理研究等の有償利用申請が3件あった。『アイヌ語口承文芸コーパス』はアイヌ語千歳方言の民話8話を追加し、公開説話数は38話となった。『日本言語地図データベース』（LAJの原データの電子化）は25項目のデータを追加し、ダウンロード可能なデータは100項目となった。【方言辞典】昨年度刊行した『鳩間方言辞典』の全用例に音声を付けた『鳩間方言 音声語彙データベース』、『多良間島方言辞典』（渡久山春英、セリック・ケナン）を国語研リポジトリで公開した。また、首里・那覇方言の『うちなーぐち活用辞典』（宮良信詳著）、旧山形県及位村方言の『及位方言辞典』（高橋良雄著）を刊行した。【講習会・講演会】NINJALチュートリアル（オンライン）で「コーパスを使った方言研究」を開催した。【研究成果】NINJALシンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」、Proceedings of Methods XVI（2020年4月）等においてCOJADSを使った研究を公開した。

3. 教育に関する計画

【プロジェクト非常勤研究員の雇用】若手育成のために、非常勤研究員を9人雇用した。【大学院生、学振PD等の参加】大学院生6人、日本学術振興会特別研究員5人を共同研究員としてプロジェクトに参画さ

せ、学会や研究発表を支援した。今年度の発表件数は大学院生、学振特別研究員合わせて10件である。【講義】2020年12月5-6日に東外大AA研LingDy3と共同で、フィールドワークに関する講義「フィールド言語学ウェビナー」を、2021年2月11-12日に九州大学 言語学講座 下地理則研究室と共同で、大学院生の研究支援を目的とする「九大下地ゼミ×青井隼人 学術スキルWS」をオンラインで開催した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

【地域社会との連携】宮崎県椎葉村との協定に基づき、機構の広領域連携型プロジェクト「地域社会」と共同で、『椎葉村方言語彙集』の刊行準備を進めた。2021年度に椎葉村と共同出版の予定である。また、鹿児島県沖永良部島和泊町、知名町との協定に基づき、方言復興のための公民館講座を6月から毎月1回オンラインで開催するとともに、沖永良部の方言ミュージカル『ヒーヌムンの生まれた海』を制作し、2021年2月23日に知名町あしびの郷文化ホールにおいて上演した。【研究成果の社会への普及】NINJALフォーラム「日本とアジアの消滅危機言語—私たちはいま、何をしなければならないか—」を2021年2月27日に東外大AA研LingDy3と共同で開催した（オンライン）。文化庁、気仙沼市等と共同で「危機的な状況にある言語・方言サミット（気仙沼）」を開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、次年度に延期となった。【展示】「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」と共同で、モバイル型展示ユニットによる展示を以下のとおり実施した。①2020年9月25日-12月17日 静岡英和学院大学「地図で見る日本の方言」「沖縄のことばと文化」の展示。②2021年3月4日-5月18日 民博特別展「復興を支える地域の文化—3.11から10年」に「方言と地域文化—沖縄県八重山と東北各地の方言」のテーマで参加し、「危機に瀕した言語・方言」「地震・津波・方言」「がんばっぺ 東北」を展示。③昨年度に開催した企画展示「ハワイ：日本人移民の150年と憧れの島のなりたち」を踏まえ、2021年3月15日-5月9日に山口県周防大島町、周防大島町教育委員会が主催する「周防大島とハワイ～移民たちの足跡～」(周防大島文化交流センター)に共催として協力した。【社会人のスキルアップ】知名町において役場職員や市民が参加する公民館講座や方言劇制作を実施し、方言の保存と復興に関する技術訓練を行った。また、和泊町職員と協議を重ね、「島ムニ継承推進協議会」の発足に貢献した。

5. グローバル化に関する計画

【海外の研究者との連携】 海外の研究者4名を共同研究員に加え、共同研究を推進した。オンラインのシンポジウムでは、海外の共同研究者2名の発表を含め、研究発表とディスカッションを行った。【国際共同研究発表会】毎年実施しているハワイ大学マノア校との共同研究発表会は、新型コロナウイルスのため日程の調整がつかず、今年度は中止とした。【国際出版】ムートン社 Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language, 2018年の国際シンポジウムの発表を元にした英語論文集の刊行準備を進めた。また、ハワイ大学との協定に基づき、消滅危機言語を中心とするオープンアクセスの電子書籍シリーズを Brill 社から刊行するための協議を行った。

6. その他

該当する活動なし。

Ⅲ. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <p>(1) フィールドワーク</p> <p>1. 共同研究員が40地点において調査を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、すべて中止とした。</p> <p>(2) 公開研究発表会・講演会</p> <p>現地調査の代わりに、研究発表会を以下のとおり充実させた。</p> <p>2.1 2020年6月14日にプロジェクト第1回研究発表会「格・情報構造（本土諸方言）」(Zoom&YouTube Live 配信)を開催した。発表件数5件、参加者82人（Zoom参加登録32人+YouTube Live 視聴者50人、うち学生3人）、YouTube 視聴384件である。</p> <p>2.2 2021年3月14日にプロジェクト第2回研究発表会（Zoom&YouTube Live 配信）を開催した。今年度は現地調査ができなかったため、これまでの調査データをもとに成果を報告した。発表件数4件、参加者68人（Zoom参加登録51人、YouTube Live 視聴者17人、うち学生13人）である。</p> <p>2.3 2021年3月6日・3月21日に「対照言語」文法研究班と共同で「日本語文法研究のフロンティアー日本の言語・方言の対照研究を中心にー」（オンライン）を開催した。発表件数19件（詳細は「対照言語」文法版の報告書参照）。</p> <p>2.4 2021年3月28-29日に東外大AA研共同利用・共同研究「アジア・アフリカ地理言語学研究」と共同で「アジア・アフリカ地理言語学2020年度第2回集会」（オンライン）を開催した。テーマはClassification and symbols for a geolinguistic study of grammatical relationsで、アジア・アフリカ・日本におけるケースマーキング・システムを一定の基準で記述し、比較した。発表件数31件、参加者68人（うち学生18人、国外機関所属者数8人）である。</p> <p>その他、科研費と合同で異分野融合の研究発表会を開催した。</p> <p>2.5 2020年8月17-18日に遺伝学、考古学と合同で、「遺伝学・言語学・考古学の成果から見る宮古諸島の人の多様性」（オンライン）を開催した（科研費19H05354「日琉諸語の歴史と発展についての総合的研究に向けて」（新学術領域「ヤポネシア・ゲノム」公募班）、科研費17H06115「言語系統樹を用いた琉球語の比較・歴史言語学的研究」と共同）。発表件数6件（遺伝学3件、言語学2件、考古学1件）、参加者43人（うち学生4人、国外機関所属者数3人）である。</p> <p>2.6 2020年9月19-20日にシンポジウム「係り結びと格の通方言的・通時的研究」（オンライン）を開催し、文献、フィールド双方の視点から、係り結びを考察した（科研費19H05354「日琉諸語の歴史と発展についての総合的研究に向けて」（新学術領域「ヤポネシア・ゲノム」公募班）、科研費19H01255「日琉諸語の有標主格性に関する基礎的研究」、科研費20K20704「日琉諸語における格という文法カテゴリーの検討」と共同）。発表件数11件、参加者177人（うち学生36人、国外機関所属者数3人）である。</p> <p>2.7 2020年12月19-20日に日本語史、フィールド言語学、遺伝学、統計学等の多分野合同のシンポジウム「日琉諸方言系統論の展望」（オンライン）を開催した（科研費17H02332「比較言語学的方法による日本語・琉球諸語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築」、科研費17H06115「言語系統樹を用いた琉球語の比較・歴史言語学的研究」、科研費18H05510「日本語と関連言語の比較解析によるヤポネシア人の歴史の解明」（新学術領域「ゲノム配列を核としたヤポネシア人の起源と成立の解明」計画研究B02班）。科研費19H05354「日琉諸語の歴史と発展についての総合的研究に向けて」（新学術領域「ヤポネシア・ゲ</p>	

ノム」 公募班と共同)。発表件数9件(言語学7件, 遺伝学2件, 国外機関所属者2件), 参加者156人(うち学生25人, 国外機関所属者数13人)である。

3. 音声言語と手話言語の研究連携のために, 民博と共同で「手話言語と音声言語に関する民博フェスタ2020/SSLL2020」を開催した。ダイアン・ブレンタリ教授(シカゴ大学)による特別講演1件, 特別企画: 手話言語学基礎講座を行い, 2020年9月25-10月2日にオンデマンド講演配信, 10月4日に質疑応答を実施した。

(3) 研究成果の公表

4. 『日本語の格表現』(くろしお出版), 『かたりの中の方言』(勉誠出版)は編集作業が遅れ, 来年度の刊行となった。
5. 椎葉村との協定に基づき『椎葉村方言語彙集』の編集作業を進めた(詳しくは「4 社会との連携」(1)1を参照のこと)。
6. 前年度に実施した青森県八戸市方言調査の報告書を機構広領域連携研究プロジェクト「地域社会」と共同で2021年3月に刊行した。
7. 共同研究員の研究も含めて, 書籍・報告書4件, ブックチャプター8件, 論文12件, 総説・解説1件, コーパス等4件, 学会発表・学術講演60件, 一般向けの講演・セミナー等6件, 講習・チュートリアル等5件, 研究発表会等企画12件, 新聞等執筆記事17件, 受賞2件, 取材記事7件, 展示2件の研究成果を公開した。(プロジェクトの企画によるもの, プロジェクトに対する謝辞を含むもののみ)。

(4) 教材及び教育プログラムの開発

- 8.1 東大AA研LingDy3と共同で昨年度刊行した『フィールドワーク事前研修報告書』(これまでに実施したフィールドワーク事前研修の講義内容をまとめたもの)をもとに, 『フィールド言語学の手引き』の出版準備を進めた。2021年度出版予定である。
- 8.2 機構広領域連携型プロジェクト「地域社会」と共同で昨年度に刊行した『地域文化の可能性』(2018年度に実施した鹿児島大学との共同授業の内容をまとめたもの)をもとに出版準備を進めた。2021年度出版予定である。

9. 受賞

- 9.1 琉球朝日放送株式会社と共同で制作した, 奄美・沖縄を巡って「言葉」について考える番組「くとうぼどう宝 ~消滅危機言語を守る人~」が第26回プログレス賞(テレビ朝日系列24社の番組審議会委員が選考する賞)奨励賞を受賞した。
- 9.2 国語研の協力のもと作成された沖永良部の刊行情報誌『おきのえらぶ島観光情報誌しまらつきよ vol.5』が日本地域情報コンテンツ大賞2020 自治体PR部門最優秀賞を受賞した(2020年11月19日)。審査員から「誌面からQRコードで動画に連動させ, 島の方言をダイレクトに聞けるなど, その取り組みがとても面白かった」と評された。
- 9.3 昨年度プロジェクトが編集・出版した『鳩間方言辞典』の著者 加治工真市氏が琉球新報活動賞(出版活動部門)を受賞した。そのほか, 本辞典と加治工真市氏が沖縄タイムス2020年7月21日, 琉球新報2020年11月8日等で紹介された。

10. 新聞の報道

- 10.1 山田真寛准教授と共同研究員の横山晶子がオンラインで行った沖永良部知名町公民館講座「しまむに教室」の講義が, 奄美新聞2020年6月6日, 南海日日新聞2020年6月7日で報道された。
- 10.2 琉球のこことばを絵本で残す取り組みが, 朝日新聞2020年9月19日で紹介された。

(2) 研究実施体制等に関する計画

(1) 大学との組織的な連携

1. 国内外の研究者 78 人（内大学院生 6 人，日本学術振興会特別研究員 5 人，国外機関所属者 4 人）をプロジェクト共同研究員として組織してプロジェクトを推進した。
2. 東外大 AA 研 LingDy3 との連携協定に基づき，クロスアポイントメントにより特任助教 1 人を雇用し，LingDy3 と共同で「フィールド言語学ウェビナー」，テキスト『フィールド言語学の手引き』の編集，若手育成のための「九大下地ゼミ×青井隼人 学術スキル WS」を実施した（「3. 教育」(2) (4) 5 参照）。

(2) 共同研究を通じた大学支援

3. 鹿児島大学との協定に基づき，上記のとおり教科書『地域文化の可能性』の出版準備を進めた。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価

計画どおりに実施した

(1) 共同利用・共同研究に関する計画

(1) データベース等の構築・公開

1. 2019 年 5 月に公開した『日本語諸方言コーパス (COJADS)』モニター版に 25 時間分の新規データの追加公開を行った（2021 年 2 月）。これにより公開データは 62 地点，60 時間となった。
2. 「危機言語 DB」の基礎語彙に鹿児島県甑島里方言の基礎語彙のデータを追加。2021 年 2 月に『アイヌ語口承文芸コーパス』にアイヌ語千歳方言の民話データ 8 話を追加し，公開説話数は 38 話となった。また，2021 年 3 月に『日本語地図データベース』(LAJ の原データの電子化) に 25 項目のデータを追加し，ダウンロード可能なデータは 100 項目となった。
3. 昨年度刊行した『鳩間方言辞典』(加治工真市) の全用例に音声を付けた『鳩間方言 音声語彙データベース』を国語研リポジトリで公開した。また『多良間島方言辞典』(渡久山春英，セリック・ケナン) を国語研リポジトリで公開した。
4. 未公開の方言集をウェブと印刷製本により公開する事業として，今年度は，首里・那覇方言の『うちな一ぐち活用辞典』(宮良信詳著)，旧山形県及位村の『及位方言辞典』(高橋良雄著) を 3 月に刊行した。

(2) データベース等に関する講習会・講演会

5. COJADS モニター版の利用促進のため，NINJAL チュートリアルで「コーパスを使った方言研究」をオンラインで開催した。（詳しくは「3 教育に関する計画」(4) 4 参照のこと）

(3) データベース等を使った研究成果

6. 2020 年 10 月 3 日に開催された NINJAL シンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」において COJADS を使った研究成果「配慮表現の地域差—日本語諸方言コーパス (COJADS) から」を発表した。また，COJADS を使った 格標示形式に関する論文が Proceedings of Methods XVI (2020 年 4 月) に掲載された。
7. COJADS モニター版は，2019 年 5 月の公開から 1 年半で中納言の利用契約数が 3,206 件となった。また，自然言語処理研究の利用申請が 3 件あり，この分野でも注目されている。

(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

(1) 共同利用・共同研究を推進するための大学との組織的な連携

1. 琉球大学との協定に基づき，琉球大学に業務委託を行い，沖縄県国頭村奥方言，名護市幸喜方言，うるま市平安座島方言等のデータ収集を行った。

(2) プロジェクト合同の研究集会

2. 「対照言語」文法研究班との合同研究会「日本語文法研究のフロンティアー日本の言語・方言の対照研究を中心にー」を開催したほか、科研費と連携して異分野融合のシンポジウムを3回開催した。(詳しくは「1. 研究に関する計画」(2)参照のこと)
- (3) 共同利用・共同研究の評価等
3. 協定を結んでいるハワイ大学から国際出版に関するアドバイスを受けた。(詳しくは「5. グローバル化」(2)(1)4を参照のこと)

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 大学院等への教育協力に関する計画	
(2) 人材育成に関する計画	
(1) プロジェクト非常勤研究員の雇用	
1. 若手研究者育成のために、非常勤研究員を9人雇用した。うち1名が国立大学助教に、1名が博物館に、1名が企業に就職した。	
(2) 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加	
2. 大学院生6人、日本学術振興会特別研究員5人を共同研究員としてプロジェクトに加え、研究発表の機会を提供した。学会や研究発表会・シンポジウム等における発表件数は、大学院生4件、学振特別研究員6件である。	
(3) 若手研究者への研究費の支援	
3. 今年度は新型コロナウイルスのため、若手研究者に対する調査旅費の援助は行わなかった。その代わりに、若手育成のためのオンライン講義を充実させた(以下の(4)チュートリアル参照)。	
(4) チュートリアル	
4. 昨年度、新型コロナウイルス感染拡大防止のため延期になったNINJALチュートリアルを2021年3月7日にオンラインで開催した。講義題目は「コーパスを使った方言研究」で、COJADSの活用のしかたや利用上の注意点、研究の可能性等について講義を行った。参加者は21人である。	
5.1 第一線で活躍するフィールド言語学者の知見と技術を若手研究者に共有することを目的として、2020年12月5-6日に東外大AA研LingDy3と共同で「フィールド言語学ウェビナー」を開催した。本講座はこれまで対面で、参加人数を8人程度に制限していたが、今回はオンライン開催のため、参加人数を大幅に拡大し、39人の大学生、大学院生、若手研究者が受講登録した。	
5.2 大学院生の研究支援のため、九州大学 言語学講座 下地理則研究室と共同で、2021年2月11-12日に「九大下地ゼミ×青井隼人 学術スキルWS」をオンラインで開催する。参加者は20人(限定)である。	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画	
1. 宮崎県椎葉村との協定に基づき、機構広領域連携型プロジェクト「地域社会」と共同で、『椎葉村方言語彙集』の刊行準備を進め、椎葉村12地点の方言語彙集の編集と原稿の組み版をほぼ終えた。2021年度に椎葉村と共同出版する予定である。	

- 2.1 鹿児島県沖永良部島和泊町，知名町との協定に基づき，方言復興のための公民館講座を6月から毎月1回，オンラインで行った。昨年度からウェブ会議システムの利用準備を進めており，6月から実施した。その他の講演・ワークショップは新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止とした。
- 2.2 沖永良部の創作方言劇『ヒューマンの生まれた海』を制作し，2021年2月23日におきえらぶ文化ホール・あしびの郷・ちなにおいて上演した。

(2) 研究成果の社会への普及に関する計画

(1) 一般向け講義・講演会・フォーラム

1. 2021年2月27日に東外大AA研LingDy3と共同で市民向けNINJALフォーラム「日本とアジアの消滅危機言語—私たちはいま，何をしなければならぬか—」をオンラインで開催した。4件の講演（国語研2件，東外大2件）とディスカッションにより，日本とアジアにおける消滅危機言語の現状報告と危機言語復興のための問題提起を行う。参加者は171人である。
 2. 文化庁，気仙沼市等と共同で「危機的な状況にある言語・方言サミット（気仙沼）」を開催する予定であったが，新型コロナウイルス感染拡大防止のため，次年度に延期となった。
 3. 機構の「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」と共同で，モバイル型展示ユニットによる言語の展示を以下のとおり開催した。
 - 3.1 2020年9月25日-12月17日に静岡英和学院大学で「地図で見る日本の方言」「沖縄のことばと文化」の2台のモバイル型展示ユニットによる展示を行った。
 - 3.2 2021年3月4日-5月18日に国立民族学博物館特別展「復興を支える地域の文化—3.11から10年」に「方言と地域文化—八重山の方言と東北の方言—」のテーマで参加し，モバイル型ユニット「危機に瀕した言語・方言」（既存のユニットの再制作），沖縄県石垣島の明和の津波を題材とする「地震・津波・方言」（新規作成），東日本大震災を題材とする「がんばっぺ 東北」（新規作成）を展示した。
 - 3.3 モバイル型展示ユニットによる言語の展示を紹介した「みんなの力で方言地図を作ってみよう！地図で見る日本の方言『参加型言語地図』の変遷」を広報室と共同で作成し，公開した。「絆創膏」の方言の全国分布図が出来上がるまでの過程が段階を追って紹介されている。
 - 3.4 八丈島の方言と文化を紹介する動画作品「黄八丈」「島寿司」「たなばたさま」をホームページで公開した。また，動画を展示するためのモバイル型展示ユニットを作成した。これらの展示と講演会を3月に八丈島で開催する予定であったが，新型コロナウイルス感染拡大防止のため延期とした。
 - 3.5 昨年度に開催した企画展示「ハワイ：日本人移民の150年と憧れの島のなりたち」を踏まえ，周防大島町，周防大島町教育委員会主催の「周防大島とハワイ～移民たちの足跡～」(2021年3月15日-5月9日，山口県周防大島文化交流センター)に共催として協力した。
 4. 危機言語の復興のために，クラウドファンディングで資金を集め，地元の人と協力して絵本を4冊作成した（「ましゅ いっしゅーぬ くれー」（沖永良部），「カンナマルクールクぬ かむ」（多良間），「ふしぬ いんのぬ はなし」（竹富），「ディアブディ」（与那国）。刊行が遅れ，4月となった。
- (2) インターネット等を通じた研究成果の社会への発信
5. COJADS モニター版，「危機言語 DB」，『アイヌ語口承文芸コーパス』，『日本言語地図データベース』，『鳩間方言辞典』，『鳩間方言 音声語彙データベース』，動画作品『八丈のことばと文化』等の危機言語・方言のデータをオンラインで配信した。（詳しくは「2 共同利用・共同研究」(1) 参照のこと）
- (3) 社会人を対象とするスキルアップの計画等

6. 鹿児島県沖永良部島和泊町，知名町において，役場職員や市民が参加する公民館講座や方言劇制作を実施し，方言の保存と復興に関する技術訓練を行った。また，和泊町職員と協議を重ね，「島ムニ継承推進協議会」の発足に貢献した。
7. 『椎葉村方言語彙集』の編集（本項目 1 参照），NINJAL フォーラムの開催等を社会人や自治体職員，教員等のスキルアップに繋げた。

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 国際的協業に関する計画	
(1) 海外の研究者 4 名を共同研究員に加え，研究発表会やシンポジウム（オンライン）を通じて共同研究を推進した。シンポジウムでは海外の共同研究者 2 名が研究発表を行い，ディスカッションに参加した。	
(2) 海外の大学との連携	
1. ハワイ大学マノア校との連携協定に基づくシンポジウムは，新型コロナウイルス感染拡大防止のため日程の調整がつかず，今年度は中止とした。	
(2) 国際的発信に関する計画	
(1) 英語による研究成果の発信	
1. ムートン社 Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language の刊行作業を進めた。Dialects に関しては，日本語原稿の英訳を進め，3/4 の原稿の英訳を終えた。	
2. 2018 年の国際シンポジウムの発表を元にした英語論文集の刊行準備を進め，要旨・章立てなどをまとめた草稿の協議をムートン社担当者と進めた。	
3. 危機言語・方言の基礎語彙データや自然談話の英訳を進め，「危機言語 DB」のウェブページで発信した。	
4. ハワイ大学との協定に基づき，消滅危機言語を中心とするオープンアクセスの電子書籍シリーズを Brill 社から刊行するための協議を行った。	

6. その他

該当する活動なし。

令和 2 年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

計画と実施状況を照合すると，ほぼすべての項目で計画はバランスよく達成，もしくは一部計画を上回って達成されていた。新型コロナウイルス感染症拡大（以後コロナ禍）によるフィールドワークと国際会議開催の中止が自己評価に強く反映されたようであるが，いずれも不可抗力であり，かつそれに代わる活動が活発に実施されていたことから，A 評価が妥当であると判断した。

コロナ禍に伴い，全国 40 地点を予定していたフィールドワークが中止された。しかしながらこれに代わり，公開研究発表会，公開講演会は，オンラインによって計画を大きく上回って実施された。また，ハワイ大学マノア校との連携協定に基づく国際シンポジウムの日程調整ができず中止となった

が、これに代わり、オープンアクセスの電子書籍シリーズを刊行するための具体的協議が行われている。

質的には、番組、情報誌、出版に対する4賞の受賞とともに、方言データベース COJADS モニター版に対し自然言語処理研究の関係者から3件の利用申請があったことは特筆される。さらに、地域社会貢献において方言復興を支えるオンラインでの講座実施、絵本作成等が積極的に推進されたこと等には、現地との好ましい協力体制を築いてきた活動の跡が窺える。

《評価項目》

1. 研究について

研究計画にあげられた、①フィールドワーク、②公開研究発表会・講演会、③研究成果の公開、④教材及び教育プログラムの開発に関する実施状況については、①のフィールドワーク 40 地点が中止となった。しかしながら、令和2年度は、世界的にコロナ禍の影響が及んだ年であり、その状況と対策が見通せない中では、中止以外の選択肢はありえなかったものと思われる。ちなみに、フィールドワークに代わる活動として、②、③、④は質量ともに十二分な成果を上げた。まず、②公開研究発表会・講演会については2回開催予定のところ、媒体も工夫しながら7回の開催を見た。海外からの参加者もあり、予定を上回る成果を上げたといえるであろう。次に③研究成果の公開については、番組、情報誌、辞典出版において4賞を授けられた。また、④大学との組織的な連携、⑤共同研究を通じた大学支援は活発で、予定を上回る成果が上がっている。以上、研究については、感染症拡大という不可抗力に対してよく対処し、計画を上回る実施成果を上げたと判断される。

2. 共同利用・共同研究について

①データベース（以後 DB）等の構築、②DB 等に関する講習会・講演会、③DB 等を使った研究成果、の3点において、①②は、計画通り実施されている。③については、COJADS を用いた研究として口頭発表1件、英語論文1件（プロシーディングズ）が発信された。また、自然言語処理研究の関係者から COJADS モニター版の利用申請が3件あったことは、COJADS がデータベースとして着実に利用可能性を広げていることの証左であり、学術的意義が認められる。次に、④大学との組織的な連携については、琉球大学との協定を活かして、コロナ禍でもデータ収集を行い得た点が注目される。⑤プロジェクト合同の研究集会は、計画を上回った回数が実施された。⑥海外の研究者に研究の推進に関するアドバイスを求める、という点については、協定を結んでいるハワイ大学から国際出版に関する助言を得ており、計画通り実施された。以上、困難な社会的状況の中で、計画通り実施しつつ着実に成果の質を上げている。

3. 教育について

人材育成に関しては、①プロジェクト非常勤研究員の雇用、②大学院生、学振 PD 等のプロジェクトへの参加、③若手研究者への研究費の支援、④チュートリアルについて、③を除いたすべての項目にわたり、計画通り遺漏なく実施された。③については、コロナ禍のため、調査旅費支援は中止されたが、妥当な判断であったといえる。それに代わる措置として、若手育成のためのオンライン講義を充実させ、当初の計画をこえた大学院生、若手研究者を受け入れた。

4. 社会との連携及び社会貢献について

第1に、社会との連携については、おおむね計画通り実施された。感染症にまつわる社会環境への対処の工夫として、鹿児島県沖永良部島における方言復興のための公民館講座を6月から月1回、オ

ンラインで実施できたことが評価される。第2に、研究成果の社会への普及については、計画を上回る活発な実施活動がみられた。オンラインを用いて、一般向けフォーラムが実施され、171人の参加者があったこと。モバイル展示ユニットが新たに4点作成されたこと。危機言語・方言のデータ拡充とオンライン配信の数。これらは、計画を上回って実施された。社会人を対象とするスキルアップの計画は、展示、講演などが制限される現況のなか、方針を変え、方言集や方言劇制作の活動を通じて行ったことも評価できる点である。コロナ禍により気仙沼市との共同方言サミット、八丈島での展示・講演が中止になったことは、不可抗力である。全般に、計画をやや上回る成果をあげていると判断される。

5. グローバル化について

ハワイ大学との連携協定に基づく国際シンポジウムが中止になった理由は、コロナ禍の影響で日程調整が不調に終わったためとのことである。それに代わり、同大学との協定に基づき、具体的な出版社名も含めて電子書籍シリーズ刊行の協議を行ったことは、計画を上回る成果であったといえる。そのほか、海外研究者の受入、英語による研究書の刊行作業の継続、国際シンポジウムの発表を元にした英語論文集の刊行準備、危機言語・方言の基礎語彙データや自然談話の英訳とウェブでの発信は、当初の計画通り実施された。

6. その他特記事項

言語研究にとって、フィールドワークのもつ意味は大きい。今後は、コロナ禍における対面方言調査実施の工夫について、大学連携も視野に入れつつ、斯界への新たな提言がなされることを期待したい。

通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開

プロジェクトリーダー：小木曾 智信

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

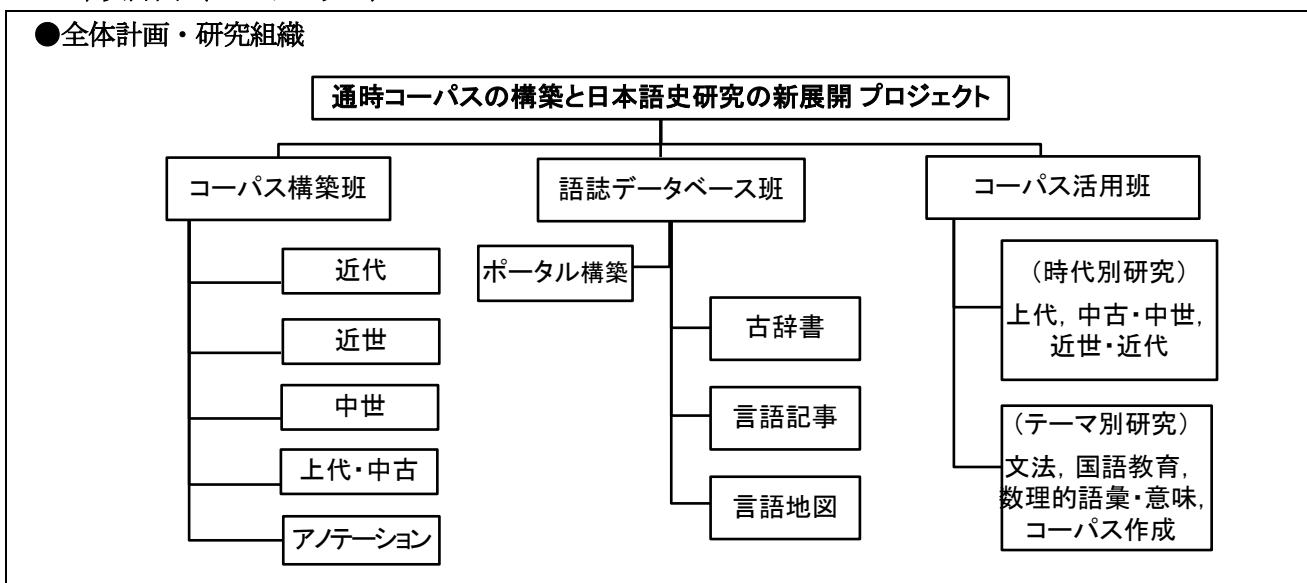
本プロジェクトは、上代（奈良時代）から近代までの日本語資料をコーパス化し、日本語の歴史研究が可能な通時コーパスと語誌のデータベースを構築する。そして、このコーパス・データベースを活用することで新たな観点から日本語史研究を展開する。従来の日本語史研究は、専門知識を必要とするさまざまな文献を取り扱う必要から、研究が特定の資料や形式に偏ったものになりがちであった。通時コーパスを構築し活用することによって個別の資料だけでなく日本語史全体をマクロな視点から見た研究を展開することを可能にする。さらにコーパス言語学で培われてきた新しい研究手法を導入し、従来行えなかった視点からの研究を展開する。

既に国語研究所では『日本語歴史コーパス』の構築に着手しているが、本プロジェクトではこのコーパスを通時コーパスとして利用可能にするために大幅に拡張する。第2期中期計画で構築済みの「平安時代編」（平安仮名文学作品）、「室町時代編」（狂言）等に加え、上代の万葉集・宣命、中古以降の和歌集、中世のキリシタン資料・軍記物・抄物、近世の洒落本・人情本、近代の雑誌・教科書・文学作品等をサブコーパスとして追加する。このほかにも、日本語史研究に資する資料を選定してコーパスに追加し、上代から近代までの日本語を一本に繋ぐ通時コーパスとして完成させる。また、コーパスと関連付けた語誌データベースを構築し、語誌情報のポータルページを公開し、研究者のみならず日本語の歴史に興味を持つ人々に役立つ情報を提供する。コーパスを活用する研究班には、上代、中古・中世、近世・近代の各時代別の研究グループの他、文法・語彙、資料性・アノテーションの検討の研究グループを設け、コーパス構築に携わるメンバーも全員が参加して研究活動を展開する。

なお、プロジェクトの実施にあたっては、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センター、および人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」（代表者・高田智和）と連携して行う。また、実践女子大学との提携に基づきデジタル化された所蔵資料の活用を図る。

2. 年次計画（ロードマップ）

●全体計画・研究組織



「コーパス構築班」は6年間で奈良時代から明治・大正時代までをカバーする通時コーパスを構築する。上代・中古，中世，近世，近代の時代ごとにグループを置き，プロジェクト非常勤研究員を配置してコーパス開発にあたる。「語誌データベース班」は，コーパスと連携した語誌データベースを開発するために古辞書，言語記事，言語地図のグループを置き，各々専任教員が中心となってデータベースを開発する。またポータル構築のグループを置き，コーパスと語誌データベースの情報を統合した語誌情報ポータルサイトの設計・構築にあたる。「コーパス活用班」は，時代別に上代，中古・中世，近世・近代の研究グループを置き，コーパス構築班と連携しつつ各時代の日本語の研究にあたる。また分野別に，文法，語彙，数理・言語処理の研究グループを置き各分野の研究にあたるほか，資料性，アノテーションのグループを置き，それぞれコーパスに追加する資料，アノテーションに関する研究を行う。このほか，人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して表記の研究を行う。コーパス活用班にはコーパス構築班のメンバー，PD・大学院生を含む若手研究者を参加させる。

●年次計画

※各年，研究発表会（シンポジウムを含む）・講習会を1回以上開催する。サブコーパスの名称は仮称。

平成28年度（1年目）

- ・「鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行」，「明治・大正編Ⅰ雑誌」（太陽・女性雑誌非コアデータ）を公開。
- ・日本語学会でワークショップを開催。

平成29年度（2年目）

- ・「奈良時代編Ⅰ万葉集」，「室町時代編Ⅱキリシタン資料」，「江戸時代編Ⅰ洒落本」を公開。
- ・書き言葉コーパス入門書を出版。

平成30年度（3年目）

- ・「江戸時代編Ⅱ人情本」，「明治・大正編Ⅱ教科書」を公開。
- ・古辞書データベースの試作版を公開。

●3年目までの成果物

コーパス構築班は『日本語歴史コーパス』を拡張し下記のサブコーパスを公開する。

「鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行」「室町時代編Ⅱキリシタン資料」「奈良時代編Ⅰ万葉集」「明治・大正編Ⅰ雑誌」「明治・大正編Ⅱ教科書」「江戸時代編Ⅰ洒落本」「江戸時代編Ⅱ人情本」「和歌集編（八代集）」「明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料」

語誌データベース班は，語誌データベースの一部として古辞書データベースの試行版を公開する。コーパス活用班は，ワークショップ・公開研究会を2回以上，国際シンポジウムを1回開催し，書籍1冊を刊行する。また，プロジェクト全体として一般向けのNINJALフォーラムを1回開催する。

令和元年度（4年目）

- ・「奈良時代編Ⅱ宣命」，「江戸時代編Ⅲ近松浄瑠璃」を公開。

令和2年度（5年目）

- ・「明治・大正編Ⅳ近代小説」を公開。
- ・語誌情報ポータルサイトの公開。
- ・研究論文集の出版。

●5年目までの成果物

コーパス構築班は，奈良時代から明治・大正時代までの通時的な研究ができるコーパスとして『日本語歴史コーパス』を拡張し公開する。語誌データベース班は，各種語誌データベースを構築し，語誌情報のポー

タルサイトを公開する。コーパス活用班は、国際シンポジウムを1回開催し、研究論文集を1冊以上出版する。

令和3年度（6年目）

- ・「鎌倉時代編Ⅲ軍記」を公開。
- ・『日本語歴史コーパス』（奈良時代～明治・大正時代）の（一次）整備完了。
- ・語誌情報ポータルサイトの完成。

3. 令和3年度の実施予定

- ・シンポジウムの開催
「通時コーパス」シンポジウム 2022 を開催（2022年3月予定，オンラインの見込み）
- ・研究論文集2冊の刊行
田中牧郎・橋本行洋・小木曾智信『コーパスによる日本語史研究—近代編—』ひつじ書房 2021年5月
岡部嘉幸・橋本行洋・小木曾智信『コーパスによる日本語史研究—近世編—』ひつじ書房 2021年刊行予定
- ・『日本語歴史コーパス』の完成版（第1次整備）の公開
「鎌倉時代編Ⅲ軍記」を公開（2022年3月予定）
「明治・大正編 SP 盤落語」（テキスト版）を公開（2022年3月予定）
「明治・大正編 新聞」を公開（2022年3月予定）
- ・語誌情報ポータルサイト
「語彙研究文献語別目録」を追加，インターフェースを改修して一般公開

II. 令和2年度活動概要

令和2年度予算総額 30,000千円

令和2年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

- ・通時コーパス活用班のグループ研究発表会を3回オンラインで実施した。
- ・昨年度新型コロナウイルス感染症対策のため中止となった「通時コーパス」シンポジウム 2020（本来は2020年3月13日予定）を9月13日にオンラインで開催した。
- ・「通時コーパス」シンポジウム 2021 を3月13日にオンラインで開催した。
- ・研究成果として，書籍5件，論文・ブックチャプター等38件，発表・講演65件，コーパス・データベース等6件を公開した（原則としてプロジェクトに対する謝辞を含むもののみ。コーパス・データベース等はアップデート版を含む）。
- ・新規に『日本語歴史コーパス』「明治・大正編Ⅳ近代小説」と「江戸時代編Ⅳ随筆・紀行」の松尾芭蕉作品を整備し，検索アプリケーション「中納言」を通して公開した（一般公開は2021年4月）。
- ・共同研究員等によって別のプロジェクトで構築された「春秋雑誌会話篇」を再整備して「明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料」として，また「延喜式祝詞」を再整備して「奈良時代編Ⅲ祝詞」として『日本語歴史コーパス』に追加し，検索アプリケーション「中納言」を通して公開した（一般公開は2021年4月）。
- ・令和3年度公開のために「鎌倉時代編Ⅲ軍記」「明治・大正編 SP 盤落語」（テキスト版），「明治・大正編 新聞」のデータ整備を行った。
- ・語誌情報ポータルサイトへの「語彙研究文献語別目録」データ登載準備を行った。

- ・日本語学会 2020 年度秋季大会でワークショップ『日本語歴史コーパス』活用入門』を開催した（10 月 24 日、オンライン）。

3. 教育に関する計画

- ・『日本語歴史コーパス』中納言の講習会を日本語学会ワークショップの中で 1 回、独自に 1 回、NINJAL チュートリアルで 1 回の 3 回実施した。
- ・『日本語歴史コーパス』の解説ビデオを公開した（国語研オープンハウス動画）。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ・国語教育グループで「通時コーパス国語教育活用ワークショップ」を開催し、中高の国語科教員および教職課程履修生に通時コーパスの講習を行った（2 月 23 日）。
- ・通時コーパスでの『新編全集』の利用契約を発展させて、(株)小学館と国語研との間で連携協定を締結した。

5. グローバル化に関する計画

- ・シンポジウム・研究会をオンラインで公開し、海外から多数の参加を得た（「通時コーパス」シンポジウム 2020 オンラインは 12 ヶ国 24 名、「通時コーパス」シンポジウム 2021 は 9 ヶ国 21 名）。
- ・時差に対応するため、シンポジウムの録画をオンライン（YouTube）で公開し国際的に発信した。

6. その他

該当する活動なし。

Ⅲ. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
1. 研究成果として、書籍 5 件、論文・ブックチャプター等 38 件、発表・講演 65 件、コーパス・データベース等 6 件を公開した（原則としてプロジェクトに対する謝辞を含むものに限った）	
2. 古辞書データベース・言語地図データベース・言語記事データベースの整備を行ない、データを用いた研究活動を行った（関連する論文等は 1. に記載の数のうちに含めた）。	
3. 通時コーパス活用班のグループ研究発表会を共催を含めて 3 回オンラインで実施した。 科研と共催「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」8 月 8 日（当日参加者 62 名） 近世グループ「通時コーパス活用班 近世グループオンライン研究発表会」12 月 27 日（当日参加者 27 名） 国語教育グループ「第 5 回 「通時コーパス」国語教育活用ワークショップ」2 月 23 日（当日参加者 50 名）	
4. 昨年度新型コロナウイルス感染症対策のため中止となった「通時コーパス」シンポジウム 2020（本来は 2020 年 3 月 13 日予定）をあらためて 9 月 13 日にオンラインで開催し、登録者にビデオ配信を行った（参加登録 171 名、当日参加者 136 名）。	

また、「通時コーパス」シンポジウム 2021 を 3 月 13 日にオンラインで開催し、登録者にビデオ配信を行った（参加登録 175 名、当日参加者 131 名）。

(2) 研究実施体制等に関する計画

- 『日本語歴史コーパス』を活用した研究を実施するために、国内外の研究者 87 人をプロジェクト共同研究者として組織して研究活動を行った（国内 83 人、海外 4 人）。
- 『日本語歴史コーパス』の構築を実施するためプロジェクト非常勤研究者 4 名を雇用した（プロジェクト PD フェロー 1 名とあわせ、合計 5 名）。
- 人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して研究を実施し、「延喜式祝詞」を『日本語歴史コーパス』の一部として公開した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<h3>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</h3>	
<ol style="list-style-type: none"> 『日本語歴史コーパス』「明治・大正編Ⅳ近代小説」と「江戸時代編Ⅳ随筆・紀行」の松尾芭蕉作品を整備し、検索アプリケーション「中納言」を通して公開した（一般公開は 2021 年 4 月）。 また、共同研究者等によって別のプロジェクトで構築された「春秋雑誌会話篇」（白百合女子大学・常盤智子氏ほか）を再整備して「明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料」として、「延喜式祝詞」（人文機構プロジェクト、高田智和・間淵洋子）を再整備して「奈良時代編Ⅲ祝詞」として『日本語歴史コーパス』に追加し、検索アプリケーション「中納言」を通して公開した（一般公開は 2021 年 4 月）。 年度末時点で調査した範囲で、今年度発表された『日本語歴史コーパス』を利用した研究業績の数は 79 編（論文と全国学会予稿集掲載分）となった（昨年度は年度末確認時点で 72 編）。 https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/list.html また『日本語歴史コーパス』の登録ユーザー数は 4460 人増加、2020 年度の検案件数は約 46 万 5 千件となった（昨年度は 31 万件）。〔この項、4 (2) 1 に重出〕 「奈良時代編Ⅱ宣命」および「明治・大正編Ⅲ教科書」に原文の画像を参照できるようリンクを追加した（一般公開は 2020 年 10 月公開）。 「語誌情報ポータル」のウェブサイトを更新して公開した（2021 年 3 月）。また、言語地図・言語記事の追加データ作成、「語彙研究文献語別目録」データ登載準備を行った。 来年度公開のために「鎌倉時代編Ⅲ軍記」「明治・大正編 SP 盤落語」（テキスト版）、「明治・大正編 新聞」を整備のデータ整備を行った。 研究成果をまとめた論文集 2 冊の出版準備を行った（1 冊は 12 月に入稿済み）。 <ul style="list-style-type: none"> 田中牧郎・橋本行洋・小木曾智信『コーパスによる日本語史研究—近代編—』ひつじ書房 2021 年 5 月刊行予定 岡部嘉幸・橋本行洋・小木曾智信『コーパスによる日本語史研究—近世編—』ひつじ書房 2021 年刊行予定 通時コーパス活用班のグループ研究発表会を 3 回オンラインで実施した。〔重出〕1 (1) 4 を参照。 英国オックスフォード大学との連携のもとで共同研究を推進し、オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス (ONCOJ) のアップデートを行った。〔重出〕5 (1) 1 を参照。 	

8. NINJAL シンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」(10月3日・オンライン)にプロジェクトとして参加した。
9. 今年度の研究計画については、コロナ禍への対応として、Zoom 等を活用したイベントのオンライン開催、VPN を活用した在宅作業によるコーパス構築環境の構築等によって、できるだけ計画通りの内容を実施することに注力した。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 大学院等への教育協力に関する計画	
(2) 人材育成に関する計画	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 『日本語歴史コーパス』を活用するための書籍として、活用班メンバーで執筆した『コーパスで学ぶ日本語学 日本語の歴史』(田中牧郎編, 朝倉書店)を刊行した。(5月1日) 2. 非常勤については完全な在宅勤務態勢となったため、非常勤研究員等への例年通りの指導は行えなかったが、オンラインの場を通して研究方法の指導を行った。 3. 大学院生を引き続き共同研究員としてプロジェクトに参画させた(もと大学院生が学籍を離れたことで4名には達しなかった)。 4. 日本語学会 2020 年度秋季大会でワークショップ『日本語歴史コーパス』活用入門』を開催した(10月24日, オンライン開催)。 5. NINJAL チュートリアルで『日本語歴史コーパス』の講習を行った(11月28日予定を弔事により急遽中止, 2021年3月1日に改めて開催)(参加者66名)。 6. 『日本語歴史コーパス』利用の講習会を11月14日に開催し(参加者33名), 日本語学会ワークショップと NINJAL チュートリアルとあわせて計3回開催した。 7. コーパス活用班の研究発表会および「通時コーパス」シンポジウムにおいて, 大学院生に発表の機会を提供した(オンラインのため旅費提供は無し)。 8. 若手研究者の国際会議発表の指導・参加費の補助を行った(オンラインで開催された Digital Humanities 2020)。(コロナ禍による国際会議の中止・延期のため1件のみ)。 	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画	
<ol style="list-style-type: none"> 1. プロジェクトにおける(株)小学館との連携を深化させ, 国語研と小学館出版局とのあいだで連携協定を締結した。「中納言」とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」本文とのリンクを継続したほか, 第4期の研究プロジェクトを視野に, UniDic 拡充を目的として, 小学館『日本国語大辞典』の見出し語データの提供を受けた。 2. 情報システム研究機構・人文学オープンデータ共同利用センター(CODH)との共同で, 近代文献のOCRに関する研究を継続した。 	
(2) 研究成果の社会への普及に関する計画	

- 『日本語歴史コーパス』を拡充し、コーパス検索アプリケーション「中納言」を通してインターネット上で無償にて公開した。登録ユーザー数は4460人増加、2020年度の検索件数は約46万5千件となった（昨年度は31万件）。
- 歴史的資料を対象とした形態素解析のための辞書整備を行い、2021年度の全面アップデートの準備を行った。また、この辞書を用いて形態素解析を行うWeb上のツール「Web茶まめ」の更新準備を行った。
- 中学校・高等学校の国語科教員及び教職課程の学生院生向けに『日本語歴史コーパス』活用の講習会（国語教育活用ワークショップ）を実施した（2月23日・オンライン）。また、中学・高校等の古文の授業での利用を想定したコーパス簡易検索アプリケーション「ことねり」のアップデート用データの作成と更新準備を行った。

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 国際的協業に関する計画	
<ol style="list-style-type: none"> 英国オックスフォード大学との連携の下、オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス（ONCOJ）のアップデートを行って公開した（2021年3月）。 海外の研究者4人を共同研究員に加え、『日本語歴史コーパス』活用に関する共同研究を推進した。 国際学会 EAJS でのパネルセッションが採択されていたが、コロナ禍による会議の延期のため実施できなかった（2021年度にオンラインで開催予定）。 『日本語歴史コーパス』の新規公開データについて、英文Webページを作成し情報を発信した（一般公開は2021年4月）。 シンポジウム・研究会をオンラインで公開したことで、海外から多数の参加を得た（「通時コーパス」シンポジウム2020オンラインは12ヶ国24名、「通時コーパス」シンポジウム2021は9ヶ国21名）。 	

6. その他

該当する活動なし。

令和2年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施している

令和2年度は、改めて言うまでもなく、コロナ禍に明け暮れた年度であった。年度初は、緊急事態宣言発出等によって、業務も機能不全におちいり、また、年度が進むにつれて、オンラインによる業務が軌道に乗ってきたとはいえ、登所してのそれと比べれば、種々制約も多かったと思われるが、その不如意のなか、研究の灯を絶やさずに、計画に基づいて、着々と実績を積んできたことは、評価されるべきである。

研究についての、書籍点数、論文、発表・講演数もおおむね満足できる数値になっていると思われるし、『日本語歴史コーパス』のさらなる充実についても、着実に歩を進め、その利用件数も着実に伸びている。また、作成した通時コーパスを運用してもらえる人材、広めてもらえる人材の育成も、

思わぬコロナ禍という障碍のなかでも、まずは順調と言える。また、社会連携、社会発信、グローバル化という側面からの活動も着実である。

コロナ禍がなければ、計画を上回った推進が可能であったとも思われる計画とその実施を見ると、残念な面もありはするが、コロナ禍のなかでも、当初計画を着実に履行したという点で、評価Bとなるのは、決して低い評価なのではない。

《評価項目》

1. 研究について

研究水準及び研究の成果等に関する計画の面から言うと、研究成果として、書籍5件、論文・ブックチャプター等38件、発表・講演65件、コーパス・データベース等6件が公開され、古辞書データベース・言語地図データベース・言語記事データベースの整備、データを用いた研究活動が行われたことは、コロナ禍のなか、よく健闘した結果と言える。また、主として年度後期に、オンラインによる、通時コーパス活用班のグループ研究発表会を3回、「通時コーパス」シンポジウム2020（名称は中止前のもの）、「通時コーパス」シンポジウム2021を各1回開催したことも、コロナ禍の制約のもと、よく楫をきって柔軟に対応したというべきであろう。一般的に、オンライン開催では、対面するときには参加が難しかった、遠隔や海外の地からの参加が見られることが特長であり、報告書の5にも言及があるように。「通時コーパス」シンポジウム2020オンラインは12ヶ国24名、「通時コーパス」シンポジウム2021は9ヶ国21名の参加があったことは、意義深かった。

また、研究実施体制等に関する計画の面から言うと、『日本語歴史コーパス』を活用した研究を実施するために、国内外の研究者87人をプロジェクト共同研究員として組織して研究活動を行ったこと、『日本語歴史コーパス』の構築を実施するためプロジェクト非常勤研究員を雇ったこと、「延喜式祝詞」を『日本語歴史コーパス』の一部として公開したこと等においても、共同研究員・非常勤研究員数を、予定数以上組織化・採用できていることを含めて、計画どおりに遂行されたと評価できる。

2. 共同利用・共同研究について

共同利用・共同研究に関する計画の面から言うと、当初の、『日本語歴史コーパス』「明治・大正編IV近代小説」を整備し、公開する」という計画に比して、同コーパスのみならず、「江戸時代編IV随筆・紀行」の松尾芭蕉作品、「明治・大正編III明治初期口語資料」、「奈良時代編III祝詞」が加えられたことは、特筆してよい。特に、後二者は、他プロジェクトからの参入であり、同コーパスプロジェクトが目指している、他プロジェクトとの連携の実践例と言え、今後の進展も期待される。また、『日本語歴史コーパス』を利用した研究業績数、『日本語歴史コーパス』の検索件数ともに、昨年度実績を超えたことも、共同利用の実実があがっている証左と言ってよいであろう。特に後者の伸びが飛躍的であるのは、コロナ禍の影響がポジティブに出たと解しうるのはないだろうか。また、「奈良時代編II宣命」および「明治・大正編III教科書」の原文画像リンク、「語誌情報ポータル」のウェブサイトのアップデート公開、「鎌倉時代編III軍記」「明治・大正編 SP 盤落語」（テキスト版）等のデータ整備、研究成果をまとめた論文集2冊の出版準備、オンラインによるグループ研究発表会等も、共同研究・共同利用の趣旨からは、着実な進展と言える。

また、共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画から言うと、オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス (ONCOJ) のアップデート、NINJAL シンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」へのオンライン参加も、共同利用・共同研究実施体制からは意義深く、研究計画の改善の一環としての、Zoom によるオンラインイベントの開催、VPN活用のテレワークも、コロナ禍対策として有益なものとして評価できる。

3. 教育について

大学院等への教育協力に関する計画に関する計画については、当初から、特に計画されていなかったようであるが、人材育成に関する計画の面では、『コーパスで学ぶ日本語学 日本語の歴史』（田中牧郎編，朝倉書店）の刊行，日本語学会 2020 年度秋季大会のオンラインワークショップ『日本語歴史コーパス』活用入門』開催，NINJAL チュートリアルでの『日本語歴史コーパス』講習，『日本語歴史コーパス』利用の講習会等が実行されている。コロナ禍のために，対面による教育活動が困難だったという事情は，理解できる。そのなかにあつて，非常勤研究員に対するオンラインによる研究方法指導，コーパス活用班の研究発表会および「通時コーパス」シンポジウムにおける，大学院生への発表機会提供，オンラインで開催された国際会議 Digital Humanities 2020 参加の若手研究者への国際会議発表の指導・参加費補助等の活動と実績は，評価できるものである。

4. 社会との連携及び社会貢献について

産業界や地域社会との連携に関する計画から言うと，(株)小学館との連携を深化させ，国語研と小学館出版局とのあいだで連携協定を締結し，UniDic 拡充を目的として，小学館『日本国語大辞典』の見出し語データの提供を受けたことは，自治体・産業界との連携という項目に合致するものとして評価できる。

また，研究成果の社会への普及に関する計画から言うと，『日本語歴史コーパス』を拡充し，コーパス検索アプリケーション「中納言」を通してインターネット上で無償にて公開し登録ユーザー数，検索件数，ともに前年度よりも増加したことは，成果として評価できる。2でも触れたが，これもまた，コロナ禍の影響がポジティブに現われた結果と言えよう。さらに，歴史的資料を対象とした形態素解析のための辞書整備を行ない，「Web 茶まめ」の更新準備を行ったことも，社会貢献の点で有益であった。どこに書くべきか迷うことではあるが，近代の振仮名付き漢字列の分析が，最近になって進化してきていると思われ，そのことと，辞書の解析精度の向上は，車の両輪のように，分析結果の向上にも寄与するのではないかと期待される（近代の振仮名付き漢字列の分析は，近世版本の版面分析にも転用可能だと思われる）。また，『日本語歴史コーパス』活用の講習会のオンライン実施，「ことねり」のアップデート用データの作成と更新準備等の活動も，中高の教育現場への貢献として意義深い。

5. グローバル化について

国際的協業に関する計画から言うと，英国オックスフォード大学との連携の下，オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス (ONCOJ) のアップデートを行って公開したことは，コロナ禍のもとで，2021 年 3 月という時期の実施になったとはいえ，次期への橋渡しとして重要と思われる。さらに，海外の研究者 4 人を共同研究員に加え，『日本語歴史コーパス』活用に関する共同研究を推進したことも，グローバル化に向けての着実な歩みとすることができる。

また，国際的発信に関する計画から言うと，『日本語歴史コーパス』の新規公開データについて，英文 Web ページを作成し情報を発信したことも，成果として評価できる。国際学会 EAJS でのパネルセッションが採択されていたが，コロナ禍による会議の延期のため実施できなかったことは，残念ではあったが，コロナ禍のもとでは，万やむを得ないと言わざるを得ない。

6. その他特記事項

特になし。

大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究

プロジェクトリーダー：小磯 花絵

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトの目的は、均衡性を考慮した大規模な日本語日常会話コーパスを構築し、それに基づく分析を通して、日常会話を含む話し言葉の特性を、レジスター・相互行為・経年変化の観点から多角的に解明することである。そのために、(1) 多様な日常場面の会話 200 時間を収めた大規模コーパスの構築を目指す会話コーパス構築班、及び、構築したコーパスを用いて、(2) 語彙・文法・音声などに着目してレジスター的多様性を研究するレジスター班、(3) 会話相互行為の中で文法が果たす役割や構造を研究する相互行為班、(4) 語彙・文法・音声などに着目して話し言葉の経年変化を研究する経年変化班の4つの班を組織して研究を進める。

会話コーパス構築班では、日常の会話行動に関する調査に基づき、自宅・職場・店舗・屋外での家族・友人・同僚・店員との会話など、多様な日常場面での会話を網羅するようコーパスを設計するものであり、世界的に見ても新しい試みである。また、従来の多くの会話コーパスのように収録のために人を集めて会話してもらうのではなく、生活の中で生じる会話を会話者自身に収録してもらうことにより、日常の会話を自然な形で記録する点にも特色がある。会話の音声・映像を収録し、文字化した上で、形態論情報や統語情報、談話情報などのアノテーションを施し、一般に公開する。これにより、話し言葉に関する高度なコーパススペースの研究基盤の確立を目指す。こうしたコーパスは、話し言葉や会話行動に関する基礎研究だけでなく、日本語教育や辞書編纂、音声情報処理、ロボット工学などの応用研究にも資するものである。また、後世の人々が21世紀初頭の日本人の生活や文化を知るための貴重な記録となる。

コーパスに基づく話し言葉研究では、現代の日常会話に加え、講演などの独話、発話を前提に書き言葉で記されたシナリオ、発話を前提としない小説などの会話文、1950年代以降の話し言葉など、多様なデータを対象に、高度な統計的分析や緻密な微視的分析を通して、話し言葉の語彙・文法・音声・相互行為上の特性や仕組み、その経年変化の実態を、実証的に解明する。こうした研究を支えるものとして、昔の話し言葉データやBCCWJの小説などの会話文、国会会議録などを対象にデータを整備し一般に公開する。

このように本プロジェクトでは、日常会話を含む様々なコーパスやデータベースを整備・構築し一般に公開することによって、話し言葉コーパスの共同利用・共同研究の基盤強化をはかる。

2. 年次計画 (ロードマップ)

●全体計画・研究組織

本プロジェクトの実施にあたって図に示す4つの班を組織して研究を推進する。

【コーパス構築班】

多様な場面の日常会話を収めた『日本語日常会話コーパス』を構築し、次の通り公開する。

平成30年度：50時間の会話の映像・音声・転記・短単位データをモニター公開（令和2,3年度も継続して公開）

令和3年度：200時間分の会話の映像・音声・転記・短単位データに加え、コアデータ20時間には人手で各種アノテーション（長単位・文節・発話単位・係り受け・対話行為など）を付与して本公開

【3つの研究班】

各班の研究に必要となるコーパス・データベース・アノテーションを随時整備し、各班のテーマの研究を推進する。

構築したコーパス・データベースについては以下の通り公開する。

平成 28 年度：『名大会話コーパス』中納言版・ひまわり版を一般公開（レジスター班）

平成 29 年度：『国会会議録』ひまわり版を一般公開（経年変化班）

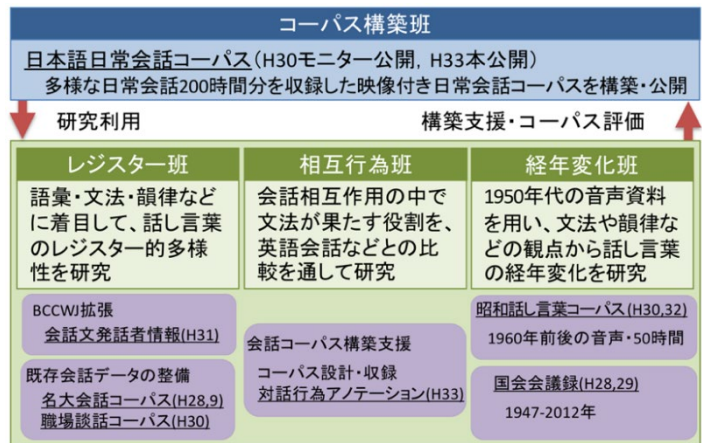
平成 30 年度：『現日研・職場談話コーパス』中納言版を一般公開

平成 30 年度：『昭和話し言葉コーパス』独話をモニター公開（経年変化班）

令和元年度：BCCWJ 中納言版 会話文発話者情報の拡張（レジスター班）

令和 2 年度：『昭和話し言葉コーパス』を本公開（経年変化班）

各班の研究成果をとりまとめて論文集を編纂し、令和 2 年度末までに 1 冊以上刊行する。



● 年次計画

H28 年度	会話コーパス整備 その他のデータ整備 研究 成果発表 若手育成 成果物公開	会話収録・データ整備の開始 アノテーション仕様策定・自動付与システム整備 [昭和話し言葉コーパス] 転記テキスト作成開始 [国会会議録検索システム] 構築・公開 [BCCWJ 発話者情報] アノテーション仕様策定・付与開始 [名大会話コーパス] 形態論情報付与 班ごとに研究会合を持ち研究を始動 シンポジウム 1 回, 班合同研究発表会 1 回開催 コーパス利用講習会 2 回開催 『名大会話コーパス』一般公開 (形態論情報付きテキスト検索版)
H29 年度	会話コーパス整備 その他のデータ整備 研究 成果発表 若手育成	会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正開始 プロジェクト内部のデータ公開 [昭和話し言葉コーパス] 転記テキスト作成継続 [BCCWJ 発話者情報] アノテーション継続 既存データを中心とする予備研究を推進 シンポジウム 1 回, 班合同公開研究発表会 1 回開催 コーパス講習会 2 回開催
H30 年度	会話コーパス整備 その他のデータ整備 研究	会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正継続 [昭和話し言葉コーパス] アノテーション開始, モニター公開準備 [BCCWJ 発話者情報] 検索システム整備開始 既存データにプロジェクト整備データを加えて研究を展開

	<p>成果発表</p> <p>若手育成</p> <p>成果物公開</p>	<p>シンポジウム・ワークショップ 3 回開催</p> <p>フォーラム（日本語の変化を探る）1 回開催</p> <p>コーパス講習会 2 回開催</p> <p><u>『日本語日常会話コーパス』50 時間モニター公開</u></p> <p><u>『昭和話し言葉コーパス』25 時間モニター公開（うち許諾が取れたもの）</u></p> <p><u>『現日研・職場談話コーパス』一般公開</u></p>
R 元年度	<p>会話コーパス整備</p> <p>その他のデータ整備</p> <p>研究</p> <p>成果発表</p> <p>若手育成</p> <p>成果物公開</p>	<p>会話収録・データ整備の継続</p> <p>コアデータ・アノテーション人手修正継続</p> <p>[昭和話し言葉コーパス] アノテーション継続</p> <p>既存データにモニター公開データを加えて研究を開始・コーパス評価</p> <p>シンポジウム 3 回開催</p> <p>コーパス講習会 2 回開催</p> <p><u>『BCCWJ 発話者情報』一般公開（中納言版）</u></p> <p><u>『日本語日常会話コーパス』50 時間モニター公開（継続）</u></p> <p><u>『昭和話し言葉コーパス』モニター公開（継続）</u></p>
R2 年度	<p>会話コーパス整備</p> <p>研究</p> <p>成果発表</p> <p>若手育成</p> <p>成果物公開</p>	<p>会話収録・データ整備の継続</p> <p>コアデータ・アノテーション人手修正継続</p> <p>既存データにモニター公開データを加えて研究を推進・コーパス評価</p> <p>シンポジウム 2 回開催</p> <p>コーパス講習会 2 回開催</p> <p><u>『昭和話し言葉コーパス』本公開</u></p> <p><u>『日本語日常会話コーパス』50 時間モニター公開（継続）</u></p>
R3 年度	<p>会話コーパス整備</p> <p>研究</p> <p>成果発表</p> <p>成果物公開</p>	<p>公開準備（データ統合・検証，個人情報処理など）</p> <p>研究成果のとりまとめ</p> <p>シンポジウム 1 回開催</p> <p>コーパス講習会 1 回開催</p> <p><u>『日本語日常会話コーパス』本公開</u></p> <p>論文集の刊行 1 冊以上</p>

3. 令和 3 年度の実施予定

<p>シンポジウム 1 回開催</p> <p>コーパス講習会 1 回開催</p> <p>『日本語日常会話コーパス』本公開</p> <p>論文集 1 冊刊行</p>

II. 令和2年度活動概要

令和2年度予算総額 29,886 千円

令和2年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

- ・2020年3月に開催予定であったが新型コロナウイルス感染拡大防止のために延期した「ことば・認知・インタラクション 8」をオンラインで2020年6月27日に開催した。口頭発表4件、参加者は246名（うち学生66名、海外機関所属者13名）であった。
- ・プロジェクト全体の研究成果を発信するために、各班合同のシンポジウム「日常会話コーパス VI」を令和3年3月4日にオンラインで開催した。口頭発表7件、参加者は254名（うち学生73名、海外機関所属者21名）であった。
- ・会話コミュニケーションについての議論を深めるため、関連する科研費プロジェクトと合同で、シンポジウム「ことば・認知・インタラクション 9」をオンラインで2021年3月6日に開催した。口頭発表4件、参加者は188名（うち学生35名、海外機関所属者12名）であった。
- ・以上の研究成果は、プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて、論文7件、ブックチャプター6件、発表・講演35件、一般向けの講演・セミナー等3件、データベース等4件（うち1件はプロジェクト内限定）として公開した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

- ・1950-1970年代にかけて国語研究所で録音された音声資料を対象とする『昭和話し言葉コーパス』について、2018年度にモニター公開した独話17時間に加え、会話27時間を追加で整備し、計44時間の話し言葉コーパスとして、オンライン検索システム「中納言」にて音声配信機能を付けて2021年3月15日に本公開した。独話については『日本語話し言葉コーパス』と、会話については『日本語日常会話コーパス』と比較することにより、話し言葉の経年変化を実証的に研究できる基盤が整備された。今年度、4184件に及ぶ新規利用申請があるなど、多くの関心を集めている。
- ・2018年度にモニター公開した会話データ50時間が広く活用されるようになり、利用者から増補の希望が寄せられたことから、当初の計画にはなかったが、追加で会話データ50時間（計100時間）を整備し、オンライン検索システム「中納言」にて音声配信機能を付けて2021年2月17日に一般公開した。中納言の今年度の新規利用契約は5156件、検案件数は昨年度25,751件に対して82,580件（昨年度比320%）となるなど、飛躍的にコーパスの利用が増えた。
- ・これまで共同研究員およびその指導学生に公開してきた『日本語日常会話コーパス』100時間に対し、追加で50時間（計150時間）を公開し、研究・教育に活用した。
- ・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の図書館サブコーパスの文学・物語に含まれる会話文に対する話者情報（話者名・性別・年代）付与について、NDC情報の増補に伴い新たに対象となった225サンプルに追加で話者情報を付与し、オンライン検索システム「中納言」で2021年3月30日に公開した。
- ・国立障害者リハビリテーションセンター研究所からの協力要請を受け、『日本語日常会話コーパス』に参加した協力者のうち60名を対象に自閉症スペクトラム傾向指数調査を実施した。これは、自閉症スペクトラム傾向指数と言語運用との関係を明らかにし、自閉症者の言語運用上の問題の支援に繋がる知見を見出すことを目指すものであり、『日本語日常会話コーパス』の利用可能性を広げる新たな取り組みである。

3. 教育に関する計画

- ・コーパス言語学分野の人材を育成するために、若手研究者や大学院生を主対象とする講習会を2回開催した。これまでコーパスの利用法を中心に講習会を開催してきたが、受講者からの希望を受け、1回をコーパスの構築法を学ぶための講習会とした。
- ・コーパスの利用者からの要望を受け、オンライン検索システム『中納言』や全文検索システム『ひまわり』の利活用法、『日本語日常会話コーパス』利活用のための仕様等を説明する一連のビデオチュートリアルを新たに作成し、ホームページで公開した。公開後、計4400件以上のアクセスがあるなど、広く活用されている。
- ・若手研究者を育成するため、非常勤研究員5名を雇用した。Rを用いた統計勉強会を開催するなどし、コーパス言語学の若手研究者の育成につとめた。また共同研究員が指導する大学生・大学院生に『日本語日常会話コーパス』を優先的に提供してコーパス活用の研究支援を実施することで、博士論文1本、修士論文1本、卒業論文7本の成果に結びついた。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ・プロジェクトで構築した『日本語日常会話コーパス』モニター版、『昭和話しことばコーパス』、『名大会話コーパス』、『現日研究・職場談話コーパス』、『国会会議録』を、インターネットを通して一般に発信した。今年度は合計で17718件の新規利用申請があり、研究教育に広く活用された。

5. グローバル化に関する計画

- ・今年度は新型コロナウイルスの影響で中止となった国際会議等も少なくなかったが、Speech Prosody や O-COCOSDA などオンラインで開催された学会を中心に4件の発表を通じてプロジェクトの成果を発信した。
- ・NINJAL チュートリアル「コーパスを活用した日常会話の研究」を韓国日語教育学会、韓国日本語学会との共催でオンライン開催した。国外機関所属者数66名を含む91名が参加した。

6. その他

該当する活動なし。

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
1. 2020年3月に開催予定であったが新型コロナウイルス感染拡大防止のために延期した「ことば・認知・インタラクション 8」をオンラインで2020年6月27日に開催した。口頭発表4件、参加者は246名（うち学生66名、海外機関所属者13名）であった。	
2. プロジェクト全体の研究成果を発信するために、各班合同のシンポジウム「日常会話コーパスVI」を令和3年3月4日にオンラインで開催した。口頭発表7件、参加者は254名（うち学生73名、海外機関所属者21名）であった。	

3. 会話コミュニケーションについての議論を深めるため、関連する科研費プロジェクトと合同でシンポジウム「ことば・認知・インタラクション 9」をオンラインで2021年3月6日に開催した。口頭発表4件、参加者は188名（うち学生35名、海外機関所属者12名）であった。
4. 以上の研究成果を、論文7件、ブックチャプター6件、発表・講演35件、一般向けの講演・セミナー等3件、データベース等4件（うち1件はプロジェクト内限定）として公開した。

(2) 研究実施体制等に関する計画

1. コーパスに基づく話し言葉研究を推進するために、国内外の研究者63名をプロジェクト共同研究員として組織した。今年度は、『日本語日常会話コーパス』の工学的応用研究の可能性を検討するため、IT企業の研究員などを共同研究員に加えて体制を強化した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<h3>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</h3> <p>[データベース等の構築・公開]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 『日本語日常会話コーパス』については、来年度の本公開に向けて、短単位・長単位・談話行為 (IS024617-2 日本語拡張版)・韻律情報 (X-JToBI 簡易版準拠)・係り受けのアノテーションを進めた。述語項構造についてはコーパス開発センターと共同で方針を検討した。 2. 2018年度にモニター公開した会話データ50時間が広く活用されるようになり、利用者から増補の希望が寄せられたことから、当初の計画にはなかったが、追加で会話データ50時間（計100時間）を整備し、オンライン検索システム「中納言」にて音声配信機能を付けて2021年2月17日に公開した。 3. これまで共同研究員およびその指導学生に限定公開してきた『日本語日常会話コーパス』100時間に対し、追加で50時間（計150時間）を限定公開し、研究・教育に活用した。 4. 1950～1970年代にかけて国語研究所で録音された音声資料を対象とする『昭和話し言葉コーパス』について、2018年度にモニター公開した講演等の独話17時間に加え、会話27時間を追加で整備し、オンライン検索システム「中納言」にて音声配信機能を付けて2021年3月15日に本公開した。独話については『日本語話し言葉コーパス』と、会話については『日本語日常会話コーパス』と比較することにより、話し言葉の経年変化を実証的に研究できる基盤が整備された。今年度、4184件に及ぶ新規利用申請があるなど、多くの関心を集めている。 5. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の図書館サブコーパスの文学・物語に含まれる会話文に対する話者情報（話者名・性別・年代）付与について、NDC情報の更新に伴い新たに対象となった225サンプルに追加で話者情報を付与し、オンライン検索システム「中納言」で2021年3月30日に公開した。 6. 国立障害者リハビリテーションセンター研究所からの協力要請を受け、『日本語日常会話コーパス』に参加した協力者のうち60名を対象に、自閉症スペクトラム傾向指数調査を実施した。これは、自閉症スペクトラム傾向指数と言語運用との関係を明らかにし、自閉症者の言語運用上の問題の支援に繋がる知見を見出すことを目指すものであり、『日本語日常会話コーパス』の利用可能性を広げる新たな取り組みである。 7. 『日本語日常会話コーパス』モニター版を拡張した上で引き続き公開し、中納言の今年度の新規利用契約は5156件、検索件数は昨年度25,751件に対して82,580件（昨年度比320%）となるなど、飛躍的にコーパスの利用が増えた。 	

(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

1. 東京大学(宮尾祐介教授)と連携し、『日本語日常会話コーパス』への係り受け解析を進めたほか、後述の通り IT 企業との共同研究を開始した。(詳細は「4.」を参照)。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 大学院等への教育協力に関する計画	
1. 東京外大と連携し、コーパスの構築法を学ぶための講習会を共同開催した(次項「(2) 人材育成に関する計画」参照)。	
(2) 人材育成に関する計画	
[プロジェクト非常勤研究員の雇用]	
1. 若手研究者を育成するため、非常勤研究員を5名雇用した。	
2. 大学院生や非常勤研究員に、会話データを優先的に研究利用できる環境を整え、Rを用いた統計勉強会を開催するなどして、コーパス言語学の若手研究者の育成につとめた。	
3. コーパス言語学分野の人材を育成するために、若手研究者や大学院生を主対象とする講習会3コースを、3月4日と3月5日に開催した(参加者192名)。これまでコーパスの利用法を中心に講習会を開催してきたが、受講者からの希望を受け、1回をコーパスの構築法(データのインポート・アノテーション)を学ぶための講習会とし、連携大学院である東京外大と共同開催した。また講習会の資料は国語研究所の機関リポジトリに登録した。	
4. コーパスの利用者からの要望を受け、計画にはなかったが、オンライン検索システム『中納言』・全文検索システム『ひまわり』の利活用法や『日本語日常会話コーパス』の仕様等を説明するビデオチュートリアルを新たに作成し、ホームページで公開した。前述の講習会の事前・事後学習や大学の授業などでも活用され、今年度、延べ4400件以上のアクセスがあるなど、広く活用された。	
5. 共同研究員が指導する大学生・大学院生に『日本語日常会話コーパス』を優先的に提供してコーパス活用の研究支援を実施することで、博士論文1本(九州大学)、修士論文1本(関西学院大学)、卒業論文7本の成果に結びついた。また早稲田大学などの大学の授業や社会言語学会の講習会でも活用されるなど、広く研究教育活動に利用されている。	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画	
1. コーパス開発センターとの連携研究として、日常会話の音声認識等の技術開発に関する研究をレトリバ社と開始した。	
(2) 研究成果の社会への普及に関する計画	
1. プロジェクトで整備・公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版、『昭和話し言葉コーパス』、『名	

大会話コーパス』、『現日研・職場談話コーパス』、『国会会議録』を、インターネットを通して一般に発信した。今年度は合計で17,718件の新規利用申請があり、研究教育に広く活用された。

2. コーパス利用講習会の資料はこれまでプロジェクトのサイトに登録していたが、今年度からはより広く発信するために、国語研究所の機関リポジトリに登録した。

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 国際的協業に関する計画	
1. 非常勤研究員1名を若手研究者海外派遣プログラムによりイギリスの Huddersfield University に派遣する予定であったが、新型コロナウイルスの影響で中止となった。	
2. 海外在住の研究者1名をプロジェクト共同研究員として加え、『日本語日常会話コーパス』を用いたデータセッションおよびシンポジウムを通して、コーパスについて評価してもらった。	
(2) 国際的発信に関する計画	
1. 今年度は新型コロナウイルスの影響で中止となった国際会議等も少なくなかったが、Speech Prosody や O-COCOSDA などオンラインで開催された学会を中心に4件の発表を通じてプロジェクトの成果を発信した。	
2. NINJAL チュートリアル「コーパスを活用した日常会話の研究」を韓国日語教育学会、韓国日本語学会との共催でオンライン開催した（新型コロナウイルスの影響で韓国での開催をオンラインに切り替えた）。国外機関所属者数66名を含む91名が参加した。	

6. その他

該当する活動なし。

令和2年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

研究については、コーパスの開発、成果公開、研究交流をバランス良く進めており、研究が予定通り進捗していると認められる。

共同利用については、コーパスの作成と公開を精力的に進めており、多くの研究者等に利用されるとともに、利用者を大幅に増やしている点が高く評価できる。共同研究についても、国立障害者リハビリテーションセンター研究所、東京大学、民間企業との具体的な連携が始まっており、今後の成果が期待される。

教育については、プロジェクトの成果を活用しつつ若手研究や学生の指導・支援を行ない、学位論文等に結実している。

社会との連携と社会貢献に関しては、プロジェクトの成果を一般の利用に供するとともに、上記のように民間企業との共同研究も始まっている。

グローバル化については、韓国日語教育学会、韓国日本語学会との共催によるシンポジウム、海外の研究者を交えたセッションなどを行なっている。特に、海外の機関とのイベントの共催や共同研究をさらに進めてほしい。

以上の通り、本プロジェクトの主たる成果物であるコーパスの開発と公開を中心として、その利用の拡大、学術的な成果発表、人材育成、国内外の研究機関や民間企業との連携を有機的に関連させながら、計画を上回るレベルで展開していると考えられる。

《評価項目》

1. 研究について

前下記の通り、コーパスの開発(後述)、成果公開、研究交流をバランス良く進めており、研究が予定通り進捗していると認められる。

成果発表のため、「ことば・認知・インタラクション 8」(オンライン、2020年6月27日、海外からの参加者を含む246名の参加者)、4班合同のシンポジウム「日常会話コーパス VI」(オンライン、令和3年3月4日、参加者は254名)を開発した。

会話コミュニケーションの研究を推進するため、関連する科研費プロジェクトと合同で、シンポジウム「ことば・認知・インタラクション 9」(オンライン、2021年3月6日、参加者188名)を開催して議論を深めた。

コーパスに基づく話し言葉研究を推進するため、国内外の研究者63名をプロジェクト共同研究員として組織した。特に、『日本語日常会話コーパス』の工学的応用研究の可能性を検討するため企業の研究員などを共同研究員に加えて体制を強化した。

2. 共同利用・共同研究について

共同利用については、下記のようにコーパスの作成と公開を精力的に進めており、多くの研究者等に利用されるとともに、利用者を大幅に増やしている点が高く評価できる。

『昭和話し言葉コーパス』について、先に公開した独話17時間に加えて会話27時間を補充した計44時間のデータを「中納言」にて音声配信機能を付けて2021年3月15日に公開した。こうして『日本語話し言葉コーパス』および『日本語日常会話コーパス』と比較することで話し言葉の経年変化を実証的に研究できる基盤を整備し、4184件の新規利用申請があった。

『日本語日常会話コーパス』について、先に公開した会話データ50時間分が広く活用されて増補の希望が寄せられたので、会話データ50時間を追加して「中納言」にて音声配信機能を付けて2021年2月17日に一般公開し、検索性が前年度の3倍以上になった。

共同研究員とその学生に公開してきた『日本語日常会話コーパス』100時間に50時間を追加して公開し、研究・教育に活用した。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の図書館サブコーパスの文学・物語に含まれる会話文について、225サンプルに話者情報を追加し、「中納言」で2021年3月30日に公開した。

『日本語日常会話コーパス』モニター版を拡張し、コーパスの利用を飛躍的に伸ばした。

共同研究については下記のような具体的進展があり、今後の成果が期待される。

『日本語日常会話コーパス』の新たな応用として、国立障害者リハビリテーションセンター研究所からの要請で、自閉症者の言語運用上の問題の支援に繋がる知見を見出すため、60名のコーパス作成協力者の自閉症スペクトラム傾向指数を調査した。

東京大学の宮尾祐介教授と連携して『日本語日常会話コーパス』の係り受け解析を進めた。

後述のように企業との共同研究を開始した。

3. 教育について

下記のように、プロジェクトの成果を活用しつつ若手研究や学生の指導・支援を行ない、成果を上げている。

若手研究者や大学院生を主対象とする講習会を2回開催した。受講者からの希望を受けて1回をコーパスの構築法を学ぶための講習会とした。

コーパス利用者からの要望を受け、『中納言』や『ひまわり』の利活用法、『日本語日常会話コーパス』利活用のための仕様等を説明する一連のビデオチュートリアルを作成・公開し、計4400件以上のアクセスがあった。

若手研究者育成のため、非常勤研究員5名を雇用した。Rを用いた統計勉強会を開催するなどし、コーパス言語学の若手研究者の育成につとめた。

共同研究員の学生に『日本語日常会話コーパス』を優先的に提供してコーパス活用の研究を支援し、博士論文1本、修士論文1本、卒業論文7本の成果に結びついた。

4. 社会との連携及び社会貢献について

下記のように、プロジェクトの成果を一般の利用に供するとともに、民間企業との連携も始まっている。

『日本語日常会話コーパス』モニター版、『昭和話しことばコーパス』、『名大会話コーパス』、『現日研究・職場談話コーパス』、『国会会議録』をインターネットで一般に発信し、合計17718件の新規利用申請があった。

コーパス開発センターとの連携研究として、日常会話の音声認識等の技術開発に関するレトリバ社との共同研究を開始した。

5. グローバル化について

下記のような国際的活動を行なった。海外の機関とのイベントの共催や共同研究をさらに進めてほしい。

オンラインの国際学会を中心に4件の発表でプロジェクトの成果を発信した。

NINJALチュートリアル「コーパスを活用した日常会話の研究」を韓国日語教育学会、韓国日本語学会との共催でオンライン開催し、海外の66名を含む91名が参加した。

海外在住の研究者1名を共同研究員として加え、『日本語日常会話コーパス』を用いたデータセッションおよびシンポジウムを通してコーパスの評価を受けた。

6. その他特記事項

特になし。

日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明

プロジェクトリーダー：石黒 圭

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトの目的は、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するとともに、その成果を日本語教育に応用する方法を明らかにすることである。具体的には、日本語教育やその関連領域の研究者や教育者、そして日本語学習者に有益なコーパスを構築すること、論文集や教師指導書を刊行すること、シンポジウムや研修会を開催することである。

本プロジェクトでは日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するために、3つのサブプロジェクトを設ける。「日本語学習者の日本語使用の解明」、「日本語学習者の日本語理解の解明」、「日本語学習のためのリソース開発」である。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」では、「学習者の会話能力の解明」と「学習者の日本語習得過程の解明」を行う。「学習者の会話能力の解明」としては、母語話者と学習者の自然会話コーパスを構築し、それをもとにして学習者の会話能力を解明する。この研究は、条件統制された「自発的な自然会話」をデータとした研究であることに特色がある。「学習者の日本語習得過程の解明」としては、さまざまな言語を母語とする学習者の対話や作文のコーパスを構築し、それをもとにして異なる言語を母語とする日本語学習者の日本語の習得過程を解明する。この研究は、日本を含む世界のさまざまな地域において統制された条件で収集したデータを用いることにより、母語による違いを重視することに特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」では、「学習者の読解過程の解明」と「学習者の聴解過程の解明」を行う。これまでの研究は学習者の言語産出活動である発話や作文に焦点を当てたものが中心であったが、この研究は学習者の言語理解活動である読解や聴解に焦点を当てたものである。学習者に理解した内容を母語で語ってもらったデータや教室での学習者の談話を通して、外からは見えない読解や聴解の過程を可視化する研究である点に特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習のためのリソース開発」では、「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」と「読解教材・聴解教材の開発」を行う。「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」としては、日本語の基本動詞が持つさまざまな意味を図解なども用いてわかりやすく解説する音声付オンライン辞典を作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、大規模コーパスを活用して作成した辞典である点に特色がある。「読解教材・聴解教材の開発」では、日本語学習者用の読解教材・聴解教材を作成するための共同研究を行った上で、ウェブ版教材サンプルを作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」で得られた調査結果に基づいて教材を作成する点に特色がある。

2. 年次計画（ロードマップ）

● 全体計画・研究組織

学習者のコミュニケーション	H28年度	H29年度	H30年度	R元年度	R2年度	R3年度
日本語使用班						
自然会話コーパス (BTSJ)	先行公開 294会話 (588名分)	39会話追加 計333会話 (666名分)	改訂公開 計333会話 (666名分)	35会話追加 計368会話 (736名分)	22会話追加 計390会話 (780名分)	本格公開 10会話追加 全400会話 (800名分)
シンポジウム	1回	1回	1回	1回	1回	1回
講習会	1回	1回	1回	1回	1回	1回
多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)	先行公開 225名分	225名分追加 計450名分	210名分追加 計660名分	215名分追加 計875名分	本格公開 175名分追加 計1050名分	既存データの 確認・修正 コーパスの 維持・運用
北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS)	データ収集	データ収集	データ収集	データ収集	データ 公開準備	データ 公開準備
ワークショップ	1回	1回	1回	1回	1回	
日本語理解班						
日本語非母語話者の読解コーパス		先行公開 45件	40件追加 計85件	20件追加 計105件	10件追加 計115件	本格公開 全115件
日本語非母語話者の聴解コーパス				先行公開 20件	30件追加 計50件	本格公開 全50件
日本語学習者の文章理解過程データベース		先行公開 3名分	57名分追加 計60名分	60名分追加 計120名分	60名分追加 計180名分	本格公開 全180名分
シンポジウム等		1回	1回	1回	1回	1回
リソース開発班						
基本動詞辞典	先行公開 15見出し	15見出し追加 計30見出し	15見出し追加 計45見出し	15見出し追加 計60見出し	15見出し追加 計75見出し	本格公開 15見出し追加 計90見出し
研究発表会	1回	1回	1回	1回	1回	1回
ウェブ版教材の開発		先行公開 28件	5件追加 計33件	5件追加 計38件	5件追加 計43件	本格公開 全43件
国際シンポジウム等		NINJAL国際 シンポジウム (ICPLJ)開催			国際シンポ ジウム開催	
プロジェクト全体						
NINJAL日本語教師セミナー（国内）	1回	1回	1回	1回	1回	1回
NINJAL日本語教師セミナー（海外）	1回	1回	1回	1回	1回	1回
NINJALチュートリアル	1回		1回			
刊行・出版		学習者の作文 能力に関する 論文集刊行	学習者の会話 能力に関する 論文集刊行 読解活動に関 する教師指導 書刊行	学習者の読解 過程に関する 論文集刊行 基本動詞辞典 に関する論文 集刊行	学習者の読解 過程に関する 論文集刊行 読解教材開発 に関する研究 書刊行	学習者の習得 過程に関する 論文集刊行 学習者の聴解 過程に関する 論文集刊行

●年次計画

【平成 28 (2016) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築に着手する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築に着手する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築に着手する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成に着手する。
- ・ウェブ版読解教材の開発に着手する。

【平成 29 (2017) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、その一部を試験公開する。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続する。ウェブ版聴解教材の開発に着手する。
- ・NINJAL 国際シンポジウム (ICPLJ) を開催する。

【平成 30 (2018) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続し、サンプルを試験公開する。ウェブ版聴解教材の開発を継続する。
- ・学習者の会話能力に関する論文集を刊行する。
- ・学習者の読解活動に関する教師指導書を刊行する。

【令和元 (2019) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続し、試験公開の範囲を拡大する。ウェブ版聴解教材のサンプルを試験公開する。
- ・学習者の読解過程に関する論文集を刊行する。

【令和 2 (2020) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・ウェブ版読解教材とウェブ版聴解教材の開発を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・学習者の読解過程に関する論文集を刊行する。
- ・読解教材開発に関する研究書を刊行する。
- ・日本語学習者のコミュニケーションに関する国際シンポジウムを開催する。

【令和 3 (2021) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスを本格公開する。

- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスを本格公開する。
- ・日本語学習者の読解コーパスを本格公開する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典を本格公開する。
- ・ウェブ版読解教材とウェブ版聴解教材を本格公開する。
- ・学習者の日本語習得過程に関する論文集を刊行する。
- ・学習者の聴解過程に関する論文集を刊行する。

3. 令和3年度の実施予定

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパス（BTSJ 日本語自然会話コーパス）の構築を継続し、500 会話を本格公開する。また、その活用のための講演会・講習会を行い、完成記念シンポジウムを開催する。
- ・I-JAS 公開後のメンテナンス作業、母語話者調査のデータ公開作業を進める。また、I-JAS を活用した共同利用・共同研究の推進のための学習者コーパス研究会および国際会議を開催する。
- ・日本語学習者の聴解および読解コーパスの構築を継続し、各 20 件のコーパスデータを新たに公開する。
- ・ウェブ版読解教材およびウェブ版聴解教材の開発を継続し、合計 5 件の教材を公開する。また、日本語聴解教材・読解教材作成に関する論文集の編集の準備作業を進める。
- ・日本語学習者の文章理解過程データベースに、新たに文章展開の理解を調査した 2 種のデータを追加、公開する。
- ・オンライン日本語基本動詞ハンドブックの作成を継続し、今まで執筆してきた残りのすべての見出し 30 件を追加する。視聴覚コンテンツ（音声ファイル、アニメ）の補充も併せて行う。
- ・国際交流基金ニューデリー事務所との覚書に基づき、インドの日本語教育史の書籍の刊行準備を進める。
- ・天津外国語大学・西安外国語大学との学術交流協定締結に向けた準備を継続する。
- ・ビジネス専門日本語教育の研究プロジェクトを、富士通研究所との協力のもと継続する。
- ・日本語教師等を対象とする研修会を、国内と海外で 1 回ずつ開催する。

II. 令和2年度活動概要

令和2年度予算総額 29,508 千円

令和2年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

本宇佐美まゆみ（編）『日本語の自然会話分析』くろしお出版を刊行した。日本語聴解教材および読解教材作成に関する論文集の編集作業を行った。国内外の日本語教育研究者 199 名による共同研究体制を組織し、PD フェローを 2 名、プロジェクト非常勤研究員を 14 名、技術補佐員を 7 名雇用し、共同研究を推進した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

学習者の言語使用では、BTSJ 自然会話コーパスの構築を継続し、69 会話のデータを追加・公開するとともに、NCRB のプラットフォームを構築し、BTSJ 自然会話コーパスを搭載した。また、I-JAS では中納言のユーザーに役立つデータ整備を行うとともに、B-JAS では第一次文字化作業・チェック作業を終了した。学習者の言語理解では、読解・聴解コーパスの構築を継続し、各 20 件のコーパスデータを新たに

公開するとともに、ウェブ版読解教材として3レッスン、ウェブ版聴解教材として8レッスンの教材を公開した。オンライン日本語基本動詞ハンドブックでは、15見出しの追加・公開を行った。プロジェクト内の共同シンポジウムとして「日本語教育は、自然会話コーパスで変わる！」をWeb開催し、263名の参加を得た。

3. 教育に関する計画

第11回 ICPLJ を NIJAL 国際シンポジウムとして Web 開催し、多くの大学院生や若手研究者に発表の機会を提供した。韓国向けの NINJAL チュートリアル「日本語学習者の作文の研究方法」、国内向け NINJAL チュートリアル「日本語の自然会話とディスコース・ポライトネス理論」を Web 開催し、大学院生等に研修を行った。「I-JAS 完成記念シンポジウム」を Web 開催し、若手研究者を中心に 284 名の参加を得た。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

ビジネス専門日本語教育の共同研究を富士通研究所と推進し、論文や書籍を刊行した。ブラジル向けの海外日本語教師セミナー「日本語学習者は日本語の何が難しいのか？」と国内日本語教師セミナー「対話システム研究と日本語教育」を Web 開催し、前者は 66 名、後者は 180 名が参加した。

5. グローバル化に関する計画

天津外国語大学日本語学院および西安外国語大学日本語科と日本語教育関係の共同プロジェクト、学術交流協定の締結に向けて準備を進めた。また、第11回 ICPLJ を NIJAL 国際シンポジウムとして Web 開催し、二日間の参加者の異なりの合計 462 名のうち、海外研究者 108 名の参加を得た。

6. その他

該当する活動なし。

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 宇佐美まゆみ（編）『日本語の自然会話分析—BTSJ コーパスから見たコミュニケーションの解明—』くろしお出版を刊行した。 2. 日本語聴解教材作成に関する論文集の編集を行った。新型コロナウイルスの感染拡大で海外での調査ができなかったため遅れているが、2021 年度に出版社に入稿する予定である。 3. 日本語読解教材作成に関する論文集の編集作業を行った。 <p>(2) 研究実施体制等に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. プロジェクトを推進するために、国内外の日本語教育研究者 199 名で 3 つのサブプロジェクトによる共同研究体制を組織した。 2. PD フェローを 2 名、プロジェクト非常勤研究員を 14 名、技術補佐員を 7 名雇用し、本プロジェクトの研究を遂行した。 	

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 共同利用・共同研究に関する計画	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 母語話者と学習者の自然会話コーパス (BTSJ コーパス) の構築を継続し、予定の3倍にあたる69会話(138人分)のコーパスデータを追加し、合計446会話(892人分)を公開した。また、その活用のための講習会を2021年2月6日にオンラインで開催し、初心者向けには83名、既習者向けには63名が参加した。 2. 日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、20件のコーパスデータを新たに公開した。 3. 日本語学習者の聴解コーパスの構築を継続し、20件のコーパスデータを新たに公開した。 4. ウェブ版読解教材として「鉄道のチケット」シリーズ3レッスン、ウェブ版聴解教材として「会社の会議」シリーズ4レッスンと「ホルモンの仕組みについての講義」シリーズ1レッスン、合計8レッスンの教材を公開した。 5. オンライン日本語基本動詞ハンドブックに15見出しの追加し、計140見出しを公開した。視聴覚コンテンツ(音声ファイル、アニメ)の補充も併せて行った。 6. 自然会話リソースバンク(NCRB)のプラットフォームを構築し、上記のBTSJコーパスを搭載した。また、NCRBに関する講演会を2021年3月27日にオンラインで開催し、157名が参加した。 7. 2019年度に公開した多言語母語の日本語学習者横断コーパス(I-JAS)の確認作業を行った。I-JASに関しては、①音声配信のためのアライメント作業、②表記に揺れがある箇所について表記統一作業、③誤解析の修正作業を進め、I-JAS中納言のユーザーにとってより使いやすくするための整備を行った。 8. 北京日本語学習者縦断コーパス(B-JAS)のデータ公開のための第一次文字化作業・チェック作業を終了した。 9. 2019年度に公開した日本語学習者の文章理解過程データベースの確認作業を行い、表記が一貫したものになるように更新した。 10. 本プロジェクトの成果である石黒圭編著(2018)『どうすれば協働学習がうまくいくか—失敗から学ぶピア・リーディング授業の科学』ココ出版の書評が『早稲田日本語教育学』(28号, pp. 107-111, 桐澤絵里奈氏執筆)で取り上げられ、「本書はピア・リーディング授業がうまくいかなかった教員や、今後こうした授業に取り組みたいと考えている教員にとって、協働学習を促進しながら、個々の学習者の学びとモチベーション向上に貢献しうる読解授業について考えるための指南書となりうるだろう」と評価された。 11. 本プロジェクトの成果である野田尚史・迫田久美子編著(2019)『学習者コーパスと日本語教育研究』くろしお出版の書評が『早稲田日本語教育学』(28号, pp. 125-129, 山田翔太氏執筆)で取り上げられ、「従来の日本語教育研究(言語学的な研究と同様のテーマや方法による研究)のあり方を見直し、母語話者や学習者の言語データを基に日本語教育を研究していく上で、本書の論文はその道標となる研究であり、大きな意義がある」と評価された。 	
(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 「日本語教育国際研究大会 香港・マカオ2020」で共同発表を準備していたが、新型コロナウイルス流行の影響で2022年11月に延期になった。 2. 「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」プロジェクトと連携し、日本語文型バンクに中・上級の文型を追加した。なお、文型バンクの紹介のために講演・研修会を行う予定であったが、新型コロナウイルス流行の影響で取りやめることになった。 	

3. プロジェクト内の複数班による共同シンポジウム「日本語教育は、自然会話コーパスで変わる！—『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の特徴と日本語教育への生かし方—」を2020年11月21日にWeb開催で行った。参加者は263名であった。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</p> <p>1. 特別共同利用研究員1名の受入を継続した。</p> <p>(2) 人材育成に関する計画</p> <p>1. プロジェクトPDフェローを2名雇用し、日本語教育に関する研究指導を行うことにより、日本語教育分野の人材を育成した。</p> <p>2. 大学院生14名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、コーパスの構築・分析作業を通して研究の指導を行った。</p> <p>3. NIJAL 国際シンポジウム「第11回日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ11)」を2020年12月19日 (シンポジウム, 参加者336名, うち学生86名) と12月20日 (口頭発表とポスター発表, 参加者376名, うち学生106名) をWeb開催で行い、多くの大学院生や若手研究者に発表の機会を提供した。なお、若手研究者 (特に大学院生) のうち、特に優れた発表者には国内旅費を提供する予定であったが、Web開催になったため、行わなかった。</p> <p>4. 韓国向けのNINJAL チュートリアル「日本語学習者の作文の研究方法」(88名参加, 担当: 石黒圭) を2020年10月10日に、国内向けNINJAL チュートリアル「日本語の自然会話とディスコース・ポライトネス理論」(127名参加, 担当: 宇佐美まゆみ) を2021年2月20日にそれぞれWeb開催で行い、大学院生や若手研究者に対し、プロジェクトが構築している自然会話コーパス、データベースを用いた研究方法の講習を行った。</p> <p>5. 「I-JAS 完成記念シンポジウム」を2020年6月20日と21日にWeb開催で行った。総参加者数は284名 (2日間の異なり人数)、うち海外機関所属者は33名であった。総発表件数は23件 (口頭発表)、うち海外機関所属者発表件数は7件であった。</p>	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</p> <p>1. ビジネス専門日本語教育のプロジェクトを、富士通研究所との協力のもと行い、学会誌『専門日本語教育研究』22号に寄稿論文を掲載したほか、一般向けの実用書である石黒圭・熊野健志編『ビジネス文書の基礎技術—実例でわかる「伝わる文章」のしくみ—』をひつじ書房より出版した。</p> <p>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</p> <p>1. 主にブラジルとその近隣諸国向けの海外日本語教師セミナー「日本語学習者は日本語の何が難しいのか?—日本語学習者と日本語教師に対する調査から—」(担当: 野田尚史) を2020年11月15日にWeb開催で行い、15ヶ国から66名が参加した。</p>	

2. 国内日本語教師セミナー「対話システム研究と日本語教育」(担当：宇佐美まゆみ)を2021年2月27日にWeb開催で行い、127名が参加した。
3. 学習者コーパス I-JAS 研究会を2020年12月12日に日本語教師、大学院生、研究者等向けに、オンラインで開催した。発表は2件で、参加者は30名であった。なお、研究会の登録メンバーは48名(2020年12月22日現在)である。
4. 福岡県国際交流センターとの共催で2021年1月10日・11日に福岡県地域日本語教室ボランティアスキルアップ講座をWeb開催で行い、53名が参加した。

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 国際的協業に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 天津外国語大学日本語学院と日本語学習者のコミュニケーションに関わる作文の共同研究には着手したが、新型コロナウイルス流行の影響で調印式が持てず、学术交流協定の締結は延期となっている。 2. 西安外国語大学日本語科と日本語教育関係の共同プロジェクト、学术交流協定の締結に向けて準備を進めた。 <p>(2) 国際的発信に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ICPLJ (日本語実用言語学国際会議) の国際シンポジウムを開催した。二日間の参加者の異なりの合計462名のうち、海外研究者108名の参加を得た。開催の概要については、3.「教育に関する計画」の(2)「人材育成に関する計画」を参照。 	

6. その他

該当する活動なし。

令和2年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

本プロジェクトの目的は、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するとともに、その成果を日本語教育に応用する方法を明らかにすることであり、3つのサブプロジェクトすなわち、①「日本語学習者の日本語使用の解明」、②「日本語学習者の日本語理解の解明」、③「日本語学習のためのリソース開発」で構成されている。2020 (R.2) 年度は上記プロジェクトの5年目に当たる。

自己評価は、「研究」、「共同利用・共同研究」、「教育」、「社会連携・社会貢献」は「A」、その他については「B」と評価されているが、以下に見るように「計画」と「実施状況」の細部を比較検討してみると、若干の再評価が必要な項目があると考えられる。しかし、いずれの項目においても相応の成果をあげており、総合的に見て「A評価」が妥当であると考えられる。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けての計画実施の遅れ、中止や延期、またWeb開催になったシンポジウムなどが若干数あるが、それらやむを得ない事情を勘案しても相応な成果をあげたと考えられる。

《評価項目》

1. 研究について

(1) 研究水準及び研究の成果に関しては、当初の計画になかった1冊の論文集を刊行し、2冊の論文集の編集作業を進捗させている。ただ、「年次計画(ロードマップ)」における記載内容と「項目ごとの状況」の「計画」欄における記載内容と「実施状況」欄の記載内容(表現)に若干のズレ(論文集を刊行する、刊行準備を進める、編集を行い入稿する、編集作業を行う、等の表現内容の違い)が見られ、当初計画でどこまでの成果を予定していたのかははっきりせず、従って成果が計画どおりか計画を上回っているのかなど判断としない。また「質的側面」に関する記載がないなど、計画に対する実施状況の評価に迷うところがある。「主要業績概要」の①の記載内容によって「質的側面」の評価を補い、またコロナ禍の困難な事情をも勘案し、(2) 実施体制構築に際しての動員人数が計画を上回っていることなども勘案したとしても、計画を上回る十分な成果をあげているとは評価し難く、「B評価」が妥当であるように思われる。

2. 共同利用・共同研究について

(1) 共同利用・共同研究に関しては、各種コーパスの構築を継続し計画どおりかそれ以上の成果をあげている。またウェブ版の読解教材・聴解教材についても予定を上回る数の教材を公開しており、オンライン日本語基本動詞ハンドブックの見出しの追加、コンテンツの補充も計画どおり実施している。また、当初計画には含まれていなかったと思われる「自然会話リソースバンク(NCRB)のプラットフォームの構築」を行い「NCRBに関するオンライン講演会」も開催している。さらに、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス(I-JAS)の確認・整備作業」を行い、「北京日本語学習者横断コーパス(B-JAS)のデータ公開のための第一次文字化作業やチェック作業」を終え、「日本語学習者の文章理解過程データベース」の確認・更新作業も行っており、当初計画を上回る実施状況となっている。質的側面に関しては、2冊の論集が共に書評に取り上げられ評価されている。

(2) 実施体制等に関しては、北京日本学研究中心との連携による共同発表の予定がコロナ禍で学会自体が開催延期になり(発表準備自体はできていたとのこと)、「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」プロジェクトとの連携活動は進捗していたものの予定されていた講演・研修会がコロナ禍で中止となり、計画されていた活動の一部が実施されなかった。一方でプロジェクト内の複数班連携による自然会話コーパス関係の共同シンポジウムはWebによって開催されている。共同利用・共同研究については結果的には上記のように一部において計画どおりの成果が上がっていないが、それらはコロナ禍の影響によるものであることを考慮し、また他の実施状況については計画を上回る成果を出していることに鑑みて、「A評価」とするのが妥当ではないかと考える。

3. 教育について

(1) 大学院等への教育協力に関しては、計画どおり特別共同利用研究員1名の受け入れを継続している。(2) 人材育成に関しては、プロジェクトPDフェローを2名、また計画を大きく上回る14名の大学院生をプロジェクトに参画させ研究指導を行っている。NINJAL国際シンポジウム(Web開催)では86名の学生参加者(参加者総数336名)を得ており、口頭発表とポスター発表には学生106名(参加者総数376名)の参加を得ている。また、大学院生や若手研究者に対するNINJALチュートリアルを韓国向け(88名参加)、日本国内向け(127名参加)の2回Web上で開催し、プロジェクトが構築している自然会話コーパス、データベースを用いた研究方法の講習を行っている。また、「I-JAS完成記念シンポジウム」をWebで開催し、参加者総数284名、うち海外機関所属者は33名、発表総

数は23件(口頭発表),うち海外機関所属者の発表は7件である。教育については,総じて計画を上回る十分な成果をあげており,「A評価」が妥当であると考え。

4. 社会との連携及び社会貢献について

(1) 産業界・地域社会との連携に関しては,ビジネス日本語教育に関する研究を(株)富士通研究所と連携して進め,学会誌への寄稿,また実用書1冊をひつじ書房より出版している。(2) 研究成果の社会への普及に関しては,日本語教師等を対象とする研修会を国内と海外で1回ずつ開催することが計画されていたが,実際には,主にブラジルとその近隣諸国向けの海外日本語教師セミナー(15ヶ国66名が参加)と国内日本語教師セミナー(127名が参加)をWebで開催し,加えて学習者コーパスI-JAS研究会(参加者30名)をオンラインで開催している。更に,福岡県国際交流センターとの共催で福岡県地域日本語教室ボランティアスキルアップ講座(参加者53名)をWebで開催しており,地域日本語教育の場への研究成果の普及活動を行っている。以上,産業界・地域社会との連携については,総じて計画を上回る十分な成果を挙げており,「A評価」が妥当であると考え。

5. グローバル化について

(1) 国際的協業に関しては,天津外国語大学と学術交流協定を締結し共同研究を実施すること,(2) 国際的発信に関しては,ICPLJ(日本語実用言語学国際会議)の国際シンポジウムを開催することが計画されていた。(1)については,天津外国語大学に加えて西安外国語大学とも学術交流協定の締結と共同プロジェクトの立ち上げの準備がなされたが,コロナ禍により協定締結が延期となっている。(2)については,参加者総数462名,うち海外研究者は108名であった。以上,グローバル化については,総じて計画を上回る十分な成果を挙げており,「A評価」が妥当であると考え。付言すれば,海外の日本語教育・日本語教師研修・日本語教育研究などについては,国際交流基金が豊富な知見・情報を有しているため,今後の連携のあり方について工夫が欲しい。

6. その他特記事項

1-6の項目それぞれに関連して,日本語教育学会また諸外国の日本語教師会などとの連携の可能性についても今後のさらなる工夫があればと考える。

コーパス開発センター
センター長：山崎 誠

I. 令和2年度活動概要

令和2年度予算総額 76,707千円

令和2年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

コーパス開発センター専任職員・研究員で、ジャーナル論文 4 本、国際会議発表 9 件。「言語資源活用ワークショップ」を9月に開催。

形態素解析用辞書 UniDic, 係り受けツリーバンク Universal Dependencies, シソーラス分類語彙表を中心にした共同研究を展開。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

「中納言」「梵天」および包括的検索系「KOTONOHA」の開発維持管理を実施。

3. 教育に関する計画

検索系の講習会を3回実施(予定)。国立国会図書館 2020年「NDL デジタルライブラリーカフェ」に登壇。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と『日本語話し言葉コーパス』の頒布を進める。

日本語語彙の分散表現データ NWJC2vec ・自然言語処理の事前学習モデル NWJC-BERT を2020年9月に言語資源協会より公開。

5. グローバル化に関する計画

国際的な係り受けツリーバンク構築プロジェクト Universal Dependencies に参画。

6. その他

ワークスアプリケーションズ社, リクルート社, レトリバ社と共同研究を実施。

高エネ研機構間連携プロジェクトに参画。生理学研究所共同研究プロジェクトに参画。

令和3年度の実施予定

- ・包括的検索系の機能強化
- ・国際会議 QUALICO 2021 の招致
- ・コーパスの有償契約の新体系の導入

II. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <p>1. ジャーナル論文 4 件・国際会議発表 9 件。</p> <p>2. 「言語資源活用ワークショップ 2020」を完全オンライン(zoom および slack)で実施。 参加申込者数 422 人 (内) 海外 71 人 (内) 学生 123 人 (内) 9/8 参加 356 人 (内) 9/9 参加 328 人 Zoom 参加者数 9/8 参加 274 人 異なり 9/9 参加 176 人 異なり Slack 参加者数 340 人 異なり</p> <p>3. 本年度開催予定であった QUALICO 2020 は新型コロナウイルス感染症の影響で 2021 年度開催(QUALICO 2021)に延期された(2020 年 6 月 1 日に正式決定)。国際会議 QUALICO 2021 の開催準備を進め, selected papers 16 本の proceedings を編纂 (2021 年度公刊予定)。</p> <p>4. 2020 年 5 月に Universal Dependencies 2.6, 2020 年 11 月に Universal Dependencies 2.7 を公開 『分類語彙表』のデータ拡張(親密度情報・位相情報・代表義・反対語情報)を進めるとともに検索系整備を行った。</p> <p>(2) 研究実施体制等に関する計画</p>	

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</p> <p>1. 「少納言」「中納言」「梵天」などの検索系の維持管理を行った。 「少納言」2020 年度検索数 887,080 件 「中納言」2020 年度検索数 1,673,296 件 「梵天」2020 年度高機能検索数 351,774 件 (文字列検索の公開後累計検索数は 2,002,600 件 2021/04/01 確認) 「少納言」についてはセキュリティ上の問題が発覚したために, 2021/2/12 にサービスを停止した。</p> <p>2. 複数のコーパスを横断的に簡便に検索可能な包括的検索系「まとめて検索 KOTONOHA」を試験公開中。 2020 年 5 月 19 日に累計 30,000 セッション達成。2021 年 4 月 1 日現在累計 94,014 セッション(内 2020 年度実績は 73,055 セッション)。</p> <p>3. 包括的検索系の格納データの増補, 分析指針(ファセット)の拡張を行った。同内容で LREC-2020 に国際会議論文採録。</p> <p>(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画</p>	

1. 大学の授業支援のために、「中納言」の「授業用アカウント」発行の枠組を一般公開。
2021年3月31日現在、101件の2020年度開催授業・セミナーで利用。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 大学の授業支援のために、「中納言」の「授業用アカウント」発行の枠組を一般公開。 101件の2020年度開催授業・セミナーで利用。 	
<p>(2) 人材育成に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. プロジェクト非常勤研究員を4名雇用 2. 講習会を3回実施予定 <ul style="list-style-type: none"> ・8/11に包括的検索系「まとめて検索 KOTONOHA」講習会 ・9/10に講習会ビデオ公開(9/8に言語資源活用ワークショップで事前公開および質問会を実施) ・3/4に包括的検索系「まとめて検索 KOTONOHA」講習会実施【項番2.(2)関連】 3. 言語資源活用ワークショップ2020において若手向け優秀発表賞を1名に授与 ワークショップ内イベントにて、まとめて検索のコンテストを実施し、優秀発表者に賞を授与 4. シチズン・サイエンスの取り組みとして包括的検索系「まとめて検索 KOTONOHA」の広報を兼ね、「KOTONOHA 検索コンテスト2020」を開催。優れた作品5件に優秀賞を授与 	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2020年5月に Universal Dependencies 2.6, 2020年11月に Universal Dependencies 2.7 を公開。 『分類語彙表』のデータ拡張(親密度情報・位相情報・代表義・反対語情報)を進めるとともに検索系整備を行った。【項番1.(2)再掲】 2. ワークスアプリケーションズと共同で第16回テキストアナリティクス・シンポジウムにて1件発表。 同内容で2020年優秀研究賞受賞。 3. Megagon Labs. より日本語版 spaCy Parser version 2.3.0 (2020年6月) および GiNZA Parser 4.0 をリリース(2020年8月)。 4. 新規にレトリバ社と共同研究を開始。2021年度内に音声言語に適応した深層学習モデルをレトリバ社より公開。 5. Yahoo! Japan 研究所の研究会に登壇。 	
<p>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 分類語彙表関連データの拡張を実施。 2. 検索ツール Cradle での公開を実施。 3. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の有償契約数30件・『日本語話し言葉コーパス』の有償契約数45件 4. 法律事務所に依頼し、コーパスの契約形態の見直しを実施(2021年度中に新契約体系へ移行)。 	

5. 日本語語彙の分散表現データ NWJC2vec を 2020 年 9 月に言語資源協会より公開。
2020 年度契約数 8 件。
6. 日本語処理の事前学習済みモデル NWJC-BERT を 2020 年 9 月に言語資源協会より公開。
2020 年度契約数 8 件。
同内容で NLP2020 言語資源賞を受賞。
7. 言語処理学会第 27 回年次大会をプラチナスポンサーとして支援。同学会でオンラインブースを設置して言語資源の広報を実施（予算は 2019 年度の新型コロナウイルス感染症による未執行繰越予算 25 万円を充当）
8. 「中納言」の年間契約数
『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 5,900 件
『日本語歴史コーパス』 4,660 件
『日本語話し言葉コーパス』 5,315 件
『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』 4,165 件
『名大会話コーパス』 3,809 件
『現日研・職場談話コーパス』 3,981 件
『国語研日本語ウェブコーパス』 5,175 件
『日本語日常会話コーパス』 5,156 件
『日本語諸方言コーパス』 4,115 件
『昭和話し言葉コーパス』 4,184 件
9. 国立国会図書館主催 2020 年「NDL デジタルライブラリーカフェ」に専任職員 1 名登壇。

5. その他の目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 国際的協業に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. COVID-19 のために受け入れ延期。 2. 2020 年 5 月に Universal Dependencies 2.6, 2020 年 11 月に Universal Dependencies 2.7 を公開。 【項番 1. (2), 項番 4. (1) 再掲】 <p>(2) 国際的発信に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ジャーナル論文 4 件・国際会議発表 9 件。 【項番 1. (1) 再掲】。 2. 国際会議 QUALICO 2021 の開催準備を進めた。 【項番 1. (1) 再掲】。 3. 法律事務所に依頼し、コーパス有償契約の英文契約書を大幅に改定。 	

6. その他

該当する活動なし。

令和2年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施している

令和2年度は新型コロナウイルス感染症のために対面での会合が全面的に中止となる中で、分類語彙表の充実、国際的なツリーバンク構築の一翼を担う Universal Dependency の公開、複数コーパスの横断的検索のための包括的検索系「まとめて検索 KOTONOHA」の公開など、コーパスの構築と提供の活動を着実に進めるとともに、学術雑誌論文・国際会議発表に関しては計画を上回る成果を上げている。

学術利用を目的としたコーパスの無償提供に加えて、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』及び『日本語話し言葉コーパス』の有償契約の実施、あるいは、言語資源協会を通じた機械学習自然言語処理のための基礎データの公開提供など、産業界に貢献する有償提供の拡大実施に取り組んでいることは高く評価できる。

さらに、リクルート社をはじめとする企業との共同研究を拡大し、その成果が着実に表れていることも評価される。大学共同利用機関法人内の他の研究組織との連携プロジェクトへの参画は今後の発展が期待される。

コーパスの開発とその利用普及を通じた学術研究の向上、社会発信、産業応用への寄与を目的とした活動を計画通り着実に実施していると判断される。

《評価項目》

1. 研究について

研究成果の公表に関しては、「自然言語処理」3編をはじめとする学術論文誌への論文発表、及び LREC をはじめとする言語処理・音声処理・言語資源構築技術に関する研究の国際会議発表を計画を上回って行なっており、高い研究成果を上げていると判断される。

研究者向けの公開研究集会として、9月には「言語資源活用ワークショップ2020」をオンラインで開催し、400名以上の参加者を集めている。

国際シンポジウムとしては、国際計量言語学会大会(QUALICO2020)を招致し、2020年東京開催を予定して準備を進めていたが、新型コロナウイルス感染症のために2021年9月に開催延期となり、QUALICO2021として継続して開催準備にたずさわっている。

Universal Dependencies Consortiumの下で Universal Dependencies 2.6/2.7を公開、分類語彙表のデータ拡張、及び国語研のサイトからの検索系整備を進めており、大学との連携、共同研究を通じた研究機関支援の基盤構築に着実に貢献している。

2. 共同利用・共同研究について

データベース等の構築・公開については、「少納言」「中納言」「梵天」などの検索系の維持管理を継続して進め、文字列検索の累計検索数が200万件を超えている。また、包括的検索系については、複数のコーパスを横断的に簡便に検索可能な包括的検索系については「まとめて検索 KOTONOHA」を試験公開し、計画を大きく上回る利用を達成している。さらに包括的検索系の拡張を行い、その内容で LREC-2020 国際会議論文に採録されるなど学術的成果にも結びついている。

共同利用・共同研究を推進するための大学との組織的な連携の一環としては、大学の授業支援のために「中納言」の「授業用アカウント」発行の枠組を一般公開し、2020年度開催授業・セミナーで101件以上の利用を実現している。

データベースに関わる共同利用・共同研究については計画通り順調に実施していると判断される。

3. 教育について

プロジェクト非常勤研究員4名を雇用して人材育成を図るとともに、包括的検索系「まとめて検索 KOTONOHA」など検索系の講習会を計画通り3回実施して若手研究者に対する教育機会を提供している。また、言語資源活用ワークショップ2020において若手向け優秀発表賞授与、「KOTONOHA 検索コンテスト2020」開催時に優秀賞5件を授与など、若手研究者の研究奨励に努めていることは高く評価される。

4. 社会との連携及び社会貢献について

産業界や地域社会との連携に関しては、Universal Dependency や分類語彙表のデータ公開などの活動の着実な実施に加えて、複数の企業との間で共同研究を積極的に展開し、学会賞受賞や音声言語処理用のプログラム・データ公開につながっており、優れた活動と評価できる。

研究成果の社会への普及に関しては、分類語彙表や各種検索ツールの公開など、主に学術利用を目的とした無償提供に加えて、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』及び『日本語話し言葉コーパス』の有償契約実施、あるいは、言語資源協会を通じた機械学習自然言語処理のための基礎データの公開提供など、産業界に貢献する有償提供を拡大実施している。言語処理学会大会でのスポンサーを含む・積極的な広報活動も各種コーパスの契約数の増加に結びついており、社会への普及活動は高く評価できる。

5. グローバル化について

新型コロナウイルス感染症のために海外研究者の受け入れ延期はやむを得ない。国際的ツリーバンク構築プロジェクトへの参画などの国際的協業活動、国際会議発表などの国際的発信活動はオンラインを利用することにより概ね計画どおり実施されている。

6. その他特記事項

大学共同利用機関法人内の他の研究組織(高エネルギー加速器研究機構及び自然科学研究機構)との連携プロジェクトへの参画は、研究の幅を広げ、新しい研究の発展や新しい研究知見へとつながる可能性がある。今後も積極的に取り組むことを期待する。

研究情報発信センター
センター長：石黒 圭

I. 令和2年度活動概要

令和2年度予算総額 35,850 千円

令和2年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

本センターは、大学共同利用機関としての共同利用に供するため、各種研究情報、研究資料及び研究成果の収集・整理・管理・維持を行い、広く社会に発信することで、研究の向上に寄与することを目的として活動を行っている。研究に関しては、所蔵資料とそのデータベース構築・公開について学会で研究発表を行い、その普及に努めた。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

共同利用・共同計画に関しては、データベースの開発・公開の推進、収蔵資料の共同利用体制の整備、公開データベースのオープンデータ化の三つが挙げられる。

一つ目として、「国立国語研究所学術情報リポジトリ」「日本語研究・日本語教育文献データベース」「研究資料室収蔵資料データベース」など、所管するデータベース類の開発・公開を推進した。

二つ目として、収蔵資料の共同利用体制を整備し、2020年度共同利用型研究（公募型）の採択課題（全13件中8件が研究資料室収蔵資料の活用研究）に対して提供した。

三つ目として、公開データベースのオープンデータ化を進め、ライセンス付与の基本方針を定め、原則CC BY 4.0での公開を実施した。

3. 教育に関する計画

教育に関しては、研究発信業務強化のため、プロジェクト非常勤研究員3名を雇用し、その育成に努めた。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

社会との連携及び社会貢献に関しては、『国立国語研究所論集』を2回、オンラインと冊子体の両形態で発行するとともに、円滑な発行を維持できるよう、2019年度に引き続き編集体制の見直しを行った。

5. グローバル化に関する計画

グローバル化に関しては、2019年度に引き続き、日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち、その評価がほぼ確立した日本語論文を英訳し（4点追加）、オープンアクセスで公開した（Pioneering Linguistic Works in Japan）。

6. その他

該当する活動なし。

令和3年度の実施予定

1. 所蔵資料のデータベース構築・公開について、学会で研究発表を行う。
2. 「国立国語研究所学術情報リポジトリ」について、国語研刊行物のデータ整備・登録を進めるとともに、オープンアクセス方針を踏まえ、研究成果の登録を推進する。
3. 「日本語研究・日本語教育文献データベース」(Web) に新規データを追加する。
4. 社会調査のデータセット等の公開を行う。
5. 研究資料室収蔵資料の利活用を促進する。
6. 音源・映像資料の媒体変換（デジタル化）を進める。

II. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
1. 所蔵資料とそのデータベース構築・公開について、学会で研究発表を2件行った。	
(2) 研究実施体制等に関する計画	

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 共同利用・共同研究に関する計画	
1. 「国立国語研究所学術情報リポジトリ」について、データ整備、登録、DOI付与を継続して実施するとともに、Web公開されているPDFのリポジトリ登録・DOI付与を促し、アクセシビリティを高めた。また、オープンアクセス方針の下、IR推進室と連携して情報を収集し、個人著作物の登録を推進した。追加470件、総件数2492件、ダウンロード回数は19.5万と昨年度比1.12倍であった。	
2. 「日本語研究・日本語教育文献データベース」に新規データを2,767件追加した（全約273,500件）。大学学術機関リポジトリ及び学会誌掲載論文の本文PDFへのリンクを新規に2,912件設置した（全31,583件）。また、韓国及び台湾の現地学会・大学等の協力を得て、韓国及び台湾出版の文献情報の追加収録を行った。なお、直近5年間のアクセス数は、2016年度3.3万、2017年度4.0万、2018年度4.9万、2019年度8.1万、2020年度14万と増加傾向であった。	
3. 「鶴岡調査データベース ver. 4.0」において、語彙・文法項目の回答データの追加を行い、公開した（2020年9月）。 「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」の回答データを公開した（2020年12月）。	
4. 資料群3件を新規に公開し（来館閲覧利用を可とする）、「研究資料室収蔵資料データベース」を更新した。「研究資料室収蔵資料データベース」には新たに「研究課題一覧」（2021年3月）を追加し、検索性向上を図った。また、地図資料の専用保存箱を制作し、資料保全の劣化対策を行った。	
5. 研究資料室収蔵の音源・映像資料について、1,344点の媒体変換（デジタル化）を進めた（カセットテープ691点、オープンリール録音585点、VHS等映像メディア68点）。また、所内専用試視聴システム「音声・映像データベース」にデジタル音源・映像を2,561点増補収録した（音声2,516点、映像45点）。	
6. 研究資料室収蔵の調査票について、デジタル撮影を行った（29,082枚）。	

(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

1. 研究資料の共同利用体制を整備し、2020年度共同利用型研究（公募型）の採択課題（全13件中8件が研究資料室収蔵資料の活用研究）に対して研究資料を提供した。
2. 公開データベース23件のオープンデータ化を進め、ライセンス付与の基本方針を定め、原則CC BY 4.0での公開を実施した。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した。
--------	-------------

(1) 大学院等への教育協力に関する計画

(2) 人材育成に関する計画

1. 社会調査のデータセット等の整備・公開のため、プロジェクト非常勤研究員を1名の雇用を継続した。また、「日本語研究・日本語教育文献データベース」の登録範囲拡張のため、プロジェクト非常勤研究員1名の雇用を継続するとともに、新たにプロジェクト非常勤研究員を1名雇用した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
--------	------------

(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画

(2) 研究成果の社会への普及に関する計画

1. 『国立国語研究所論集』第19号（2020年7月）と第20号（2021年1月）をオンラインと冊子体の両形態で発行した。また、論文の関連データを投稿できるよう規程を改正した。

5. その他の目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を上回って実施した
--------	-------------

(1) 国際的協業に関する計画

(2) 国際的発信に関する計画

1. 2019年度に引き続き、日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち、その評価がほぼ確立した日本語論文を英訳し、Pioneering Linguistic Works in Japanとして、オープンアクセスで4点追加公開した。

6. その他

該当する活動なし。

令和2年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施している

令和2年度は新型コロナウイルス感染症のために対面での会合が全面的に中止となる中で、国立国語研究所学術情報リポジトリ、日本語研究・日本語教育文献データベース、鶴岡調査データベースをはじめとする社会調査のデータセットなどの各種研究情報・資料の充実化とWeb上での公開を着実に進め、オンラインでの学会発表を行うなど、大学共同利用機関としての共同利用に供するため、各種研究情報、研究資料及び研究成果の収集・整理・管理・維持を行い、広く社会に発信することで、研究の向上に寄与することを目的とした活動を計画通り着実に実施していると判断される。

《評価項目》

1. 研究について

日本言語政策学会第22回研究大会における研究発表、台湾日本語・日本文学研究国際シンポジウムにおける基調講演など、国語研究所の所蔵資料とそのデータベース構築・公開の活動に基づく学会研究発表を行うなど、国語研究所の研究成果の発信および研究用データの普及を着実に進めている。

2. 共同利用・共同研究について

国立国語研究所学術情報リポジトリについて、国語研刊行物のデータ整備・登録を継続して進め、DOI情報付与によってアクセシビリティ向上を図るとともに、オープンアクセス化を進めた結果、リポジトリダウンロード件数が増加している。

日本語研究・日本語教育文献データベースについては、大学学術機関リポジトリ掲載論文及び学会誌掲載論文の情報追加を進めるとともに、韓国・台湾の学会・大学の協力を得て出版文献情報の登録を進めた。その結果、データベースアクセス件数が着実に増加している。

社会調査のデータセットについては、鶴岡調査データベース ver. 4.0、国民の言語使用と言語意識に関する全国調査の公開を行っている。

研究資料室収蔵資料についても、利活用促進のための資料目録整備、劣化対策、音源・映像資料のデジタル化などを着実に進めている。

また、2020年度共同利用型研究（公募型）の採択課題に対して、研究資料及び研究情報を提供するなど、研究資料の共同利用体制の整備を進めている。

研究情報、研究資料及び研究成果の収集・整理・管理・維持を行い、社会に発信し、国語研究の向上に資する活動を着実に実施していると判断できる。

3. 教育について

社会調査のデータセット等の整備・公開、日本語研究・日本語教育文献データベースの拡充のために、プロジェクト非常勤研究員2名の雇用継続に加えて新たに1名を雇用し、若手研究者育成を図っている。

今後は大学教育あるいは社会人教育向けの研究データ提供の取り組みを期待する。

4. 社会との連携及び社会貢献について

『国立国語研究所論集』の発行を継続して実施し、研究成果の社会への発信に着実に取り組んでいる。

令和2年度には第19号（2020年7月）と第20号（2021年1月）をオンラインと冊子体の両形態で発行している。

5. グローバル化について

英語による研究成果の発信に着実に取り組み、日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持つ日本語論文を英訳公開する活動を継続して実施している。令和2年度には論文4点を *Pioneering Linguistic Works in Japan* としてオープンアクセス公開している。

6. その他特記事項

特になし。

令和2年度「管理業務」に関する評価シート

業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 組織運営の改善に関する目標を達成するための措置

【計画】

外部有識者の参加を得て、運営会議及び各種委員会を開催するとともに、機関の組織運営に研究者コミュニティ等の意見を積極的に取り入れる。

【実績】

- ・第4期中期目標期間における共同研究プロジェクトについて、所内で出された次期研究プロジェクト案に対し運営会議・外部評価委員会の両構成員によるヒアリングを実施した。ヒアリングでいただいた意見及び助言は共同研究プロジェクト及び将来計画に反映させた。
- ・運営会議において、外部委員から研究所の研究活動について意見等をいただき、以下のとおり見直しを図った。
- ・所長候補者の選出方法について、オンライン投票における可用性確保の意見があり、検証の上マニュアルに反映した。
- ・テニユアトラック教員の選出及び採用指針について意見があり、選考及び採用手続きに反映させた。
- ・新型コロナウイルス感染防止対策についてマニュアル化の意見があり、所内にてマニュアル化の実施を行った。

2. 教育研究組織の見直しに関する目標を達成するための措置

【計画】

機関拠点型基幹研究プロジェクトの共同研究プロジェクトを研究系とセンターにより推進し、国際連携室において国際発信力を高めるために、チュートリアル事業等を推進し、国際学術機関等の連携を強化する。また、研究力向上に資するためにIR推進室において研究成果に関するデータの収集・管理・分析を行い、関係する委員会に情報提供を行う。

【実績】

- ・毎月開催している共同研究プロジェクト推進会議において基幹研究プロジェクトの進捗状況などを確認するとともに、研究系とセンターの連携による機関拠点型基幹研究プロジェクトの研究成果として、「言語コミュニケーションの多様性」をテーマに、令和2年10月3日にシンポジウムをオンラインで開催した。
- ・国際発信力を高めるために、国際連携室が支援して、海外におけるチュートリアル授業（韓国）をオンラインにて令和2年10月10日、11日に実施した。
- ・国際発信力を高めるために、国際連携室では海外の研究機関と国際交流協定1件新規に締結し、1件を更新し出版覚書（1件）を締結した。新規締結を予定していた1件（天津外国語大学）は、新型コロナウイルスのため締結式が来年度以降に延期となった。またDe Gruyter Mouton社との出版協定に基づく新シリーズ（The Mouton-NINJAL Library of Linguistics）の出版企画を進めるとともに、危機言語の叢書シリーズ刊行についてBrill社およびハワイ大学と協議を重ねた。
- ・IR推進室では研究成果に関するデータを収集・管理し、機構のデータポストに活用するとともに、将来計画委員会及び自己点検・評価委員会等に情報を提供した。また収集したデータに基づき国立国語研究所年報を編集・刊行した。

3. 事務等の効率化・合理化に関する目標を達成するための措置

【計画】

機構内機関及び機構外機関との業務の共同実施

【実績】

- ・コピー用紙の調達について、機構内3機関（本部・国文研・国語研）と2機構6機関の計9機関で共同調達を実施した。
- ・立川地区（人間文化研究機構国文研，国語研及び情報システム研究機構極地研，統数研の2機構4機関）で、自販機設置運営業務を共同契約した。
- ・各種研修会を内外の機関と合同で開催することにより経費削減及び業務の効率化を図った。
 - ①西東京地区の国立大学法人等で運営される令和2年度文部科学省西東京地区生涯生活設計セミナーが開催され（R3.1.13～R3.2.2），5名が参加した。
 - ②関東甲信越地区国立大学法人等主催の職員研修2件に職員を参加させた。
 - 1) 令和2年度東京地区及び関東・甲信越地区実践セミナー（広報の部）（R2.11.6開催，参加者2名）
 - 2) 令和2年度東京地区及び関東・甲信越地区実践セミナー（人事・労務・安全管理の部）（R2.12.10開催 参加者1名）
 - ③令和2年度公文書管理研修Ⅰ及び公文書管理研修Ⅱに各1名を参加させた。
 - ④I-URIC/SOKENDAI 連携の研修3件に職員を参加させた。
 - 1) 個人情報研修。（R2.10.22開催 参加者9名）
 - 2) 利益相反研修（R2.12.9開催，参加者8名）
 - 3) 知的財産・安全保障輸出管理担当者WG研修（R3.2.15開催，参加者6名）
 - ⑤人間文化研究機構本部主催による研修5件に職員を参加させた。
 - 1) 令和2年度人間文化研究機構新規採用職員研修（R2.6.30開催 参加者1名）
 - 2) 令和2年度ハラスメント相談員研修（R2.12.1開催 参加者3名）
 - 3) 令和2年度人間文化研究機構事務系職員の人事被評定者研修（R2.12.1開催，参加者1名）
 - 4) 令和2年度人間文化研究機構働き方改革（在宅勤務）研修（R2.12.14開催，参加者6名）
 - 5) 令和2年度人間文化研究機構育児・介護支援研修（R3.1.28開催，参加者14名）

自己点検評価

計画どおりに実施した

《評価結果》

計画を上回って実施している

業務運営の改善及び効率化に関しては、計画を上回る積極的な取り組みが行われた。

組織運営の改善に関しては、第4期中期目標期間における共同研究プロジェクトについての次期研究プロジェクト案に対し運営会議・外部評価委員会の両構成員によるヒアリングを実施し、そこで得られた意見及び助言を共同研究プロジェクト及び将来計画に反映させた。また運営会議において外部委員から研究所の研究活動について意見等を生かして、所長候補者の選出方法、テニユアトラック教員の選出及び採用指針、新型コロナウイルス感染防止対策などについての見直しを図った。

研究組織の見直しに関しては、毎月開催の共同研究プロジェクト推進会議において基幹研究プロジェクトの進捗状況などを確認し、研究系とセンターの連携による「言語コミュニケーションの多様性」についてのシンポジウムをオンラインで開催するとともに、国際発信力を高めるために、海外におけるチュートリアル授業の実施、海外の研究機関との国際交流協定の締結、De Gruyter Mouton 社

との出版協定に基づく新シリーズの出版企画の推進、危機言語の叢書シリーズ刊行について Brill 社およびハワイ大学と協議などを行った。IR 推進室では研究成果に関するデータを収集・管理を中心に、国立国語研究所年報を編集・刊行するなどさまざまな活動を展開した。

事務等の効率化・合理化に関しては、コピー用紙の調達や自動販売機の設置・運営の業務委託で工夫が見られ、各種研修会を内外の機関と合同で開催することにより経費削減及び業務の効率化を図るなどした。

財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 外部研究資金、寄付金その他の自己収入の増加に関する目標を達成するための措置

【計画】

常勤研究者の科研費への研究代表者もしくは研究分担者としての参加率を毎年度 80%以上にするため、競争的資金の申請に向けた説明会や研究計画書の作成支援等を実施する。

【実績】

- ・令和 2 年度に配分された科研費（新規及び継続課題）に研究代表者又は研究分担者として、常勤研究者 34 名のうち 33 名が参加した（参加率 97.1%，新規課題採択率 63.3%）。
- ・4 機関合同（国文研、国語研、極地研、統数研）科研費説明会（R2.9.29）を実施した（参加者 11 名）。また、人間文化研究機構科学研究費助成事業（科研費）説明会（R2.7.16）に 22 名参加させた。
- ・外部資金についての公募情報を所内グループウェアに掲載するとともに、全研究者宛てに電子メールで周知した。特に、科研費については、科学研究費助成事業の採択率向上のために、申請者が他の研究分野を含む研究者と研究計画・方法について意見交換を行う「科研費申請準備会議」（R2.10.6-7）を実施し、若手研究者の育成にも配慮しつつ科研費申請を奨励・支援した（令和 3 年度分申請 27 件）。（令和 3 年 3 月末現在）
- ・昨年度まで有償頒布していた『日本語話し言葉コーパス』『現代日本語書き言葉均衡コーパス』及び『日本語日常会話コーパス（モニター版）』に加え、今年度から新たに『日本語諸方言コーパス』の有償頒布を行い、総額 15,007 千円の収入を得た（※令和 3 年 3 月末日現在）。

2. 経費の抑制に関する目標を達成するための措置

【計画】

一般管理費の分析を行い、分析結果を基に教職員に対しコスト意識の啓発を図るとともに、契約方法の見直し等を実施する。

【実績】

- ・所内各室廊下やエレベータ前、トイレに電力節減、夏期には軽装励行のポスターを掲示し、教職員に対してコスト削減・省エネ推進の啓発を図った。また、例年どおり 4 階テラスにグリーンカーテンを設置し省エネを図った。
- ・複数年で契約締結している警備業務の期間満了に伴い、前回同様複数年契約による入札を実施し、業務の効率を図った。（財務課）
- ・従来実施している会議の合理化及び省力化については、他新型コロナウイルス感染拡大防止のため所内外の会議をオンライン会議に移行し、ペーパーレス化の推進の、会議にかかる施設利用料や旅費といった諸経費の節約と業務の軽減を図った。

【計画】

- （2）業務の外部委託等を促進させるとともに、職員の人件費や外部委託の状況を分析し、経費の抑制策を検討する。

【実績】	
<ul style="list-style-type: none"> ・働き方改革の一環として一部部署においてフレックスタイムを導入した。 ・引き続き、施設管理業務及びネットワーク管理業務について外部委託を行い、業務の効率化を図った。 	
自己点検評価	計画どおりに実施した

《評価結果》

計画を上回って実施している

財務内容の改善に関しても、外部資金の獲得や業務の効率化で計画を上回る成果を達成した。

外部研究資金、寄付金その他の自己収入の増加に関しては、科研費への常勤研究者の参加率が97.1%に達し目標を大幅に上回った。外部資金獲得のための説明会や意見交換を積極的に行った。また当研究所作成コーパスの有償頒布で総額15,007千円（前年度比約300%）となる収入を得た。

経費の抑制に関しては、研究所内のさまざまな場所に電力節減・夏期の軽装励行のポスターを掲示しコスト意識・省エネ意識の徹底を図り、警備業務契約の入札でも業務の効率化を図った。新型コロナウイルス感染拡大防止のためのオンライン会議への移行、ペーパーレス化の推進に取り組んだ。またフレックスタイムの導入や施設管理業務及びネットワーク管理業務の外部委託による管理業務の効率化も図った。

自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 評価の充実に関する目標を達成するための措置	
【計画】	
自己点検・評価等を実施し、組織運営の改善に活用する。	
【実績】	
<ul style="list-style-type: none"> ・所内に自己点検・評価の実施、評価結果の公表及び活用に関することを目的とした自己点検・評価委員会（委員6人）と研究所が実施する共同研究プロジェクトの推進及び連携・調整を図ることを目的とした共同研究プロジェクト推進会議と連携して開催し、PDCAサイクルを管理している。 ・自己点検及び評価の検証を行うための所外の専門家8名で構成される外部評価委員会による機関拠点型基幹研究プロジェクトの自己点検評価・外部評価を実施した。 	
2. 情報公開や情報発信等の推進に関する目標を達成するための措置	
【計画】	
国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書など評価に係る情報等を、ウェブサイト等に掲載し、広く社会に公開する。	
【実績】	
<ul style="list-style-type: none"> ・国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書に加えて、外部評価委員会による研究系・センターの実績及び組織運営の評価をまとめた外部評価報告書を、ウェブサイト及び『国立国語研究所年報』を通じて公開した。 	
自己点検評価	計画どおりに実施した

《評価結果》

計画どおり実施している

自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関しては、計画通りの成果を達成した。

評価の充実に関しては、所内に自己点検・評価委員会と共同研究プロジェクト推進会議に設置しPDCA サイクルを管理し、さらに所外の専門家 8 名で構成される外部評価委員会による機関拠点型基幹研究プロジェクトの自己点検評価・外部評価を実施した。

情報公開や情報発信等の推進に関しては、国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書に加え、外部評価委員会による研究系・センターの実績及び組織運営についての外部評価報告書をウェブサイト及び『国立国語研究所年報』で公開した。

その他業務運営に関する重要目標を達成するためにとるべき措置

1. 施設設備の整備・活用等に関する目標を達成するための措置

【計画】

施設整備・既存施設の維持管理及び省エネルギー対策を実施する。

【実績】

- ・定期的な施設・設備の点検結果及び日常的な研究所内外の施設点検等（木の剪定、通路の補修等）により、計画的な維持管理を行い、職員及び利用者の適切な予防安全に努めた。
- ・研究所内の事務室内、廊下やエレベータ前、トイレに、電力節減、夏期の軽装励行のポスターを掲示し、職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図った他、4階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し、昨年度に引き続き省エネを図った。

2. 安全管理に関する目標を達成するための措置

【計画】

危機管理に関するマニュアルに基づく訓練や研修等を実施する。

【実績】

- ・災害発生時など非常時における、情報システム・ネットワークの復旧・稼働維持に関する対応・情報等について集約する。「非常時における情報システム・ネットワーク 対応一覧表」を作成した。
- ・新型コロナウイルス感染防止の観点から研究所での消防訓練実施を変更し、12月21、22日の両日に、立川防災館でVR防災体験や応急救護訓練等4種類の防災体験及び救護訓練等を実施し24名が参加した。

3. 法令遵守等に関する目標を達成するための措置

【計画】

公的研究費の適正な使用に関する研修会等及び研究倫理教育等を実施し、受講者の理解度チェック及び受講状況の管理監督を行う。また、情報セキュリティに関する研修を実施する。

【実績】

- ・日本学術振興会が提供している研究倫理 e ラーニングコース[eL CoRE]を新規採用の研究者 11 名に受講させるとともに、採用時オリエンテーションを実施した。また、人間文化研究機構令和 2 年度コンプライアンス教育研修会及び研究倫理教育研修会（11月19日）に 35 名を参加させた（昨年比 1.67 倍）。
- ・人間文化研究機構本部主催の各情報セキュリティ研修・訓練を対象者に受講させた。
- ・セキュリティインシデント発生時の対応フローの見直しを行い、周知した。

<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍における在宅勤務対応として、セキュリティ強度の高いリモートデスクトップサービスを導入するとともに、在宅勤務時のセキュリティ確保、標的型攻撃メールへの対応、Zoomの推奨セキュリティ設定等に関する注意喚起を行った。 ・新たなセキュリティ分析・レポートツールを導入し、研究所ネットワークの監視機能を強化した。 	
自己点検評価	計画どおりに実施した

《評価結果》

計画を上回って実施している

その他業務運営に関する重要目標を達成するためにとるべき処置に関しては、計画を上回る成果が達成された。

施設設備の整備・活用等に関しては、定期的な施設・設備の点検が行われ、職員・利用者の適切な予防安全が図られた。研究所内のさまざまな場所に電力節減、夏期の軽装励行のポスターを掲示するなど、職員のコスト意識・省エネ意識の啓発を図るとともに、4階テラスにグリーンカーテンを設置し省エネを図った。

安全管理に関しては、災害発生時など非常時用の「非常時における情報システム・ネットワーク対応一覧表」を作成し、また立川防災館でVR防災体験や応急救護訓練等4種類の防災体験及び救護訓練等を実施した。

法令遵守等に関しては、新規採用の研究者に対して公的研究費の適正使用や研究倫理についての教育を施し、また35名をコンプライアンスや研究倫理の研修会に参加させた。情報セキュリティに関しては、情報セキュリティ研修への対象者の参加、セキュリティインシデント発生時の対応フローの見直し、コロナ禍における在宅勤務に対するさまざまなセキュリティ強化対策、また新たなセキュリティ分析・レポートツールの導入による研究所ネットワークの監視機能の強化などを行った。

【総合評価】

業務運営の改善及び効率化、財務内容の改善、自己点検・評価及び当該状況に係わる情報の提供、その他業務運営に関する重要目標を達成するためにとるべき措置のすべての項目にわたって、ほぼ計画通りか、計画を上回る成果を達成している。コロナ蔓延の困難な状況を考慮すれば、全体的にきわめて良好な管理業務が行われていると評価できる。

2. 資 料

国立国語研究所外部評価委員名簿（敬称略）

- ◎ 坂原 茂 東京大学名誉教授
専門： フランス語学，認知言語学
- 小野 正弘 明治大学教授
専門： 国語学・国語史
- 上山 あゆみ 九州大学教授
専門： 生成文法・日本語統語論
- 沖 裕子 信州大学名誉教授
専門： 談話，方言，日本語教育
- 片桐 恭弘 公立ほこだて未来大学学長
専門： 情報科学，社会言語学
- 砂川 裕一 群馬大学名誉教授
専門： 哲学，比較文化基礎論，言語文化教育論，日本語日本事情教育論
- 橋田 浩一 東京大学教授
専門： 自然言語処理
- 森山 卓郎 早稲田大学教授
専門： 日本語学，日本語文法

任期：令和2年10月1日～令和4年9月30日（2年）

◎委員長 ○副委員長

国立国語研究所令和2年度業務の実績に関する評価の実施について

1. 評価の実施の趣旨

国立国語研究所では、共同研究プロジェクト及び機関拠点型基幹研究プロジェクトにおける研究計画の実施状況について、プロジェクトの代表者が行った自己点検評価及び実績報告書の妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施している。

2. 評価の実施方法

評価は書面審査で行った。研究所が作成した、令和2年度の計画及びその実施状況が記入された「2年度業務の実績報告書」（「プロジェクト・センターの研究活動」、「管理業務」）の内容を検証した。

「プロジェクトの研究活動に関する評価」の点検項目及び観点は次のとおりである。

点検項目	観 点
研究成果 (研究) (共同利用)	研究業績の量的側面 ・ どれだけ論文等のアウトプットがあるか
研究水準 (研究) (共同利用)	研究業績の質的側面 ・ どれほど学術的意義や社会的意義があるか
研究体制 (研究) (共同利用)	研究推進にあたっての制度的側面 ・ どれだけ大学と組織的に連携し、大学の機能強化に貢献しているか
教育	研究過程及び研究成果の教育的普及 ・ どれほど大学等の機能強化に貢献しているか
人材育成	若手研究者の育成、及び社会人の学び直し ・ どれだけ受け入れて取り組んでいるか
社会連携	自治体・産業界との連携など社会との協業 ・ どれほど社会と連携しているか
社会貢献	研究成果の社会への普及 ・ どれほど社会に向けて発信しているか
国際連携	研究体制における国際的協業 ・ どれだけ海外の組織と連携しているか
国際発信	研究過程及び研究成果の国際的発信 ・ どれだけ国際的に発信しているか
その他特記事項	

機関拠点型基幹研究プロジェクト一覧

研究領域	プロジェクト名	プロジェクト略称	リーダー
理論・対照研究領域	対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法	対照言語学	窪菌 晴夫
理論・対照研究領域	統語・意味解析コーパスの開発と言語研究	統語コーパス	プラシヤント・パルデシ
言語変異研究領域	日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成	危機言語・方言	木部 暢子
言語変化研究領域	通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開	通時コーパス	小木曾 智信
音声言語研究領域	大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的な研究	日常会話コーパス	小磯 花絵
日本語教育研究領域	日本語学習者のコミュニケーションの多角的な解明	学習者のコミュニケーション	石黒 圭

国立国語研究所外部評価委員会規程

平成21年10月 1日

国語研規程第7号

改正 平成28年 4月 1日

改正 平成31年 4月 1日

(趣旨)

第1条 この規程は、国立国語研究所組織規程（国語研規程第1号）第16条の規定に基づき、国立国語研究所（以下「研究所」という。）外部評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

(任務)

第2条 委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること。
- (2) 研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること。
- (3) 共同研究プロジェクト等の評価に関すること。
- (4) その他評価に関すること。

(組織)

第3条 委員会は、10名以内の委員をもって組織する。

2 委員は、研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。

(任期)

第4条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選により決定する。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

(議事)

第6条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(意見の聴取)

第7条 委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

(外部評価の実施等)

第8条 外部評価の実施は，研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。

2 委員会は，評価の結果を所長に報告するものとする。

(庶務)

第9条 委員会の庶務は，管理部総務課において処理する。

(その他)

第10条 この規程に定めるもののほか，外部評価の実施に関し必要な事項は，委員会が別に定める。

附 則

この規程は，平成21年10月1日から施行する。

附 則

この規程は，平成28年4月1日から施行する。

附 則

この規程は，平成31年4月1日から施行する。

国立国語研究所外部評価委員会【令和2年度実績評価】（第1回）

日 時： 令和3年8月5日（木） 10:00～12:00

場 所： オンライン会議（ZOOM）

議 事：

1. 前回議事概要（案）確認
2. 機関拠点型基幹研究プロジェクト評価について
3. 令和2年度共同研究プロジェクト評価について
4. 令和2年度「コーパス開発センター」及び「研究情報発信センター」の評価について
5. 令和2年度「組織・運営」、「管理業務」の評価について
6. その他
 - ・第3期中期目標期間（4年目終了時）に係る業務の実績に関する評価の結果について（報告）
 - ・大学共同利用機関の検証結果について（報告）

資 料：

1. 国立国語研究所外部評価委員名簿（令和3年4月1日現在）
2. 国立国語研究所外部評価委員会規程
3. 前回議事概要（案）（令和2年9月10日）
4. 国立国語研究所プロジェクト別 令和2年度評価担当
5. 機関拠点型基幹研究プロジェクト実績報告書及び評価報告書
- 6-1～6-6. 令和2年度共同研究プロジェクト自己点検報告書及び令和2年度共同研究プロジェクト評価結果
- 7-1～7-2. 令和2年度国立国語研究所2センターに関する実績報告書及び令和2年度国立国語研究所2センターに関する評価結果
8. 令和2年度「組織・運営」、「管理業務」に関する評価結果
9. 令和2年度業務の実績に関する外部評価報告書の構成について
- 10-1～10-6. 第3期中期目標期間（4年目終了時）に係る業務の実績に関する評価の結果について自己検証結果
- 11-1～11-3. 大学共同利用機関の検証結果